汝人をさばく勿れ、兄弟の目にある塵を見て、反て己の目にある梁を思はざるか。求めよ。さらば與へられん、尋ねよさらば會はん、戸を叩けよさらば開かれなん。

それ廣き大なる門は滅亡に導くものなり、小き門窄き道は生命に導くものなり。生命に至る人それ何ぞ勘き。善き樹は惡き果を生せず。唯天に在す神の御旨を行ふ者のみぞ天國に入るべし。

凡そ我言を聽きて之を行はざる者は沙上に家を建つる愚者に同じ、雨來り川漲り、風吹かば其家は倒るべし。而して其覆ると大ならん。（馬太傳取意）

と、全人類の父なる神は人類の福祉繁榮を其旨となし、人類の善惡邪正は皆此神意に順ふか適はざるかによりて定まる、神意は無上の權威にして其旨は人類の相愛にあり、神の在る所即ち天國にして神は我曹と共にあるなり。天國はこゝにあり、かしこにありと云ふが如きものに非ず、相愛する兄弟の中にあるなり、イエスが敎ふる所は實にこの神の天國を世に臨ましめ、神と偕に在らんと欲する努力に外ならず。

されどこの天國の門に入らんとするには、其心嬰兒の如くならざるを得ず、嬰兒の如く自ら謙遜なるもの、嬰兒の來れるを祝福して云へらく、天國にある者は悉て斯の如し、我誠に汝等に告げん、嬰兒の如き心を以て我敎を受けざるものは天國に入ることを得ざるなり又天國の窄き門は富を擔ふ者は入ることを得じ、富者の天國に入るは駱駝の針の穴をとほるより難しと、謙遜、無欲、恬淡にして盜賊の求めに任せて其持てるものを與ふる者に非ざれば天國の門は開かれざるなり。

一視同仁の愛を以て地上に天國を來さんとするイエスの理想は三年の敎化となり。福音の宣傳となりけるが、彼は汚れたる者を嫌はず、癩れたる者を愛し、呪はれし者を祝福しぬ、イエス、ユダヤよりガリラヤに歸らんとするの路、會々サマリヤを經スカルの邑にあるヤコブの井戸に於て一婦人の水を汲めるを見、之に水を乞ひたり、抑もユダヤは古よりサマリヤを敵視し、之と交はる事なかりけれど、イエスが精神は斯る地上の爭を以て謂なき事とし、女の訝れるを諭して活ける水を與へんとせりき。イエス曰く凡そこの水を飲

◎基督の言行

む者は復た渇する事あれども予の與ふる水は、一たび之を飲めば、泉となりて永久に湧き出て其人を永生に至らしむべしと、五人の夫を有ち一人の情夫を有せしサマリヤの女は救世主の活ける泉によりて浄められ永生に入りぬ。イエスの眼中終に一個の敵なし。假令サマリヤの人なりとも其行にして仁慈ならば貪慾なるパリサイ、サドカイの徒よりは神の旨に適ふべしとはイエスが教えたる所なりき。

イエス、一夕パリサイの徒と會食せる時、醜行かくれなき一婦人の來りて香膏を以てイエスの足を濕し、己の頭髪を以て之を拭へるを退けざりければパリサイの徒の訝かれるを察し、席にあるシモンに二人の債務者を赦せし喩を談り罪の大なりし者は神之を愛すること又大なりと教えし說話は、エルマレムの殿堂に於て姦淫の婦の石もて撃たれんとするを救ひたる說話と好一對の寛容の德を現はす。イエスの眼中唯神の愛子あるのみ、姦婦と淫婦とはあらざりきと戒しめたるのみ。

イエスは又人の齒せざりし收稅吏ザアカイの家に宿りて之を敎化し、或時は當時の社會より罪人と目されたる人々の饗宴に臨みて毫も恥づる色なきのみならず、彼なる者は醫を須たず、彼等こそ悔改むべきものなれと答へて罪惡に沈論せる不德の者共をば敎化したりき、加之イエスが十二の使徒の中、福音經を書きしと傳ふるマタイは實にかゝる收稅吏たりしなり。イエスが務は彼が自ら云へる如く罪に沈める者を尋ねて之を救ふにありき。彼が努力は蓋し九十九の羊を措いて一頭の迷羊を夜もすがら山に求むるにありしなり。

イエスは果して救世主（メシア）なる自覺を有し、エルサレムの宮殿に坐し其の王國を建設せんと欲して聖都に入りしものなるや否やは今問ふを要せざれども、然れども、彼が所謂天國は地上眼に見ゆる榮華の象徴にはあらで神我等と偕にある平和の天國なりしにちかし、年三十にして初めて神の愛を認め、道を傳ふること僅かに三年、敎敵の爲に乘せられて、エルサレムの郊外ゴルゴタの邱上に刑せられけれども、其愛の福音は地上の劍の爲に妨げらるゝことなく、使徒ペテロ、ポーロ等を始めとし幾多の殉敎者は異敎徒迫害の手に身を殺して

◎孔子の言行

毫も悔ゆる所なく、其の血を以て教會を裝ひ、終に幾百年の基礎を羅馬に安んじたりし所以の者は、殉教者の熱誠に由りしものとは云へ、イエスが偉大なる人格と、試練に堪えし精神の發露と云はざるを得ず。

三　孔子の言行

孔子の人格

「之れを仰げば彌〻高く、之れを鑽れば彌〻堅く、之れを瞻て前にありとすれば忽焉として後に在り、夫子循々然として善く人を誘ひ、我を博むるに文を以て、我を約するに禮を以てす、罷めんとして能はず、既に吾が才を竭くし立つ所ありて卓爾たるが如し、之れに從はんと欲すと雖も、由しなきのみ」と、これ我が孔夫子の人格を髣髴せしむるものにあらずや。一言一行天下の則となり、一擧一動萬民の法となる。

幼時

名は丘、字は仲尼、周の靈王の二十年冬十月を以て魯の昌平鄕の陬邑に生る。父は叔梁紇、母は顏氏、夙く父を失ひ、賢母の手に鞠養せられ幼にして嬉戲するに常に俎豆を陳ねて禮容を設けしと、嚴肅なる家庭に在りて起居禮に適はんことを修養し、を想見すべし。十五にして學に志し、二十にして魯に仕へて委吏となり、事務を處理すること頗る公正敏活、後、周に遊びては禮を老子に問ひ、齋に遊びては景公に治國の要を說き、學德愈〻高く隨て業を受くるもの頗る多し。魯の大司寇となるや。獄訟を斷ち事理明白、弊政を革新して、國威大に振ふ。淮南子にいふ孔子魯の司寇となりて道、遺を拾はず、市買漁賈せず、田漁皆な長に讓り斑白負戴せず」と　所謂君子行く所として可ならざるなきものか。

大司寇

文に武

隣國齋の景公禮を修めて魯の定公と國境夾谷に會盟せんとす、齋の太夫黎鉏、景公に言つて曰く孔子禮を好んで勇なし、兵を以て不意に劫かさば必ず志を得んと、定公の出でんとするや孔子進んで曰く、臣聞く文事あるものは必ず武備あり、武事あるものは必ず文備あり。古者諸侯疆を出づるには必ず武官を具ふ、今の會盟も亦司馬を具へ武臣を從へんと。かくて夾谷に壇を設け兩國の國主互に揖讓して登る。獻酬の禮終り、齋の有司、進んで曰く、諸ふ四

◎聖賢の言行

◎孔子の言行

方の樂を奏せんと、景公諾す、此に於て旌旗羽旄を執り矛戟撥を以て鼓噪して定公を却す、蓋しこれ齊の威嚇的手段なり。孔子忽然として趨り進み、階に登り一等を盡さず、袂を擧げて曰く、今我が兩君好會を爲すの時に當り、此の如きはこれ夷狄の樂なり卻けざるべからずと、景公心に恥ぢて之れを去らしむ。齊の有志又進んで曰く、請ふ宮中の樂を奏せんと、景公諾す、因りて優倡侏儒の徒、出でゝ前に戲る、孔子又趨り進みていふ、斯の如きは匹夫にして諸侯を熒惑するものなり、當に誅すべしと手づから斬りて手足を異にす、景公大に懼れ、歸來群臣を責めて曰く、今、魯、君子の道を以て其の君を補佐す、汝等、予に夷狄の道を敎へて罪を魯君に得せしむと、終に會て侵略せし地を還付して其の過を謝せりと、溫良恭儉讓なる孔子の行動として奇態の觀なきにあらずと雖も身一國の休戚を負ふ、此の如くにして初めて其の責を全ふすべきにあらざるなきか。後儒之れを付會として抹殺せんとするものあるは却て孔子を傷くるものにあらざるなきか。

外交既に成り專ら心を內治に用ひ、或は太夫少正卯を誅し或は三都を毀す

て、陪臣の跳梁を制し以て公家の隆盛を期せしも、事、志と違ひ、慨然として故國を辭し、四方に周遊して廣く大義を天下に暢べんとし孔席煖かなるに遑なく漂浪十四年、足跡十國に印す、其の最も困厄を究めしものを陳蔡の間とす、荀子にいふ、

孔子、南楚に遣せんとして陳蔡の間に厄す、七日火食せず、藜羹、糂せず、弟子皆な飢色あり、子路進んで問ふて曰く、由、之れを聞く、善を爲すものは天之れに報ずるに福を以てし、不善を爲すものは天之れを報ずるに禍を以てす、今、夫子、德を累ね、義を積み、美行を懷くの日久しくて、奚ぞ、居の隱するや。孔子曰く、由、識らざるか。吾れ女に語らん、女、知者を以て必ず用ひらるゝと爲すか、王子比干は心を剖かれざらんや、女忠者を以て必ず用ひらるゝと爲すか、呉子胥は姑蘇東門外に磔せられざらんや、夫れ遇不遇は時なり、賢不肖は材なり、吾子博學深謀にして時に遇はざるもの多し、是に由て之を觀れば世に遇はざるもの衆し何ぞ獨り丘のみ

◎賢愚の言行

◎孔子の盲行

ならんや、且つ夫れ芝蘭は深林に生じ人なきを以て芳ならざるにあらず、君子の學は通ずるが爲めにあらず、窮して困まず、憂へて意衰へず、禍福終始を知て心惑はざるが爲めなり、夫れ賢不肖は材なり、爲不爲は人なり、遇不遇は時なり、死生は命なり、今其の人あり。其の時に遇はざるは賢なりと雖も、其れ能く行はれんや、苟も其の時に遇はゞ何の難きことか之れあらんや。故に君子博學深謀、身を修め行を端して以て其の時を俟つと、これ逆境の好福音にあらずや。匡に往きては匡人陽虎を殺さんとし孔子の容貌相似たるを以て帶甲して其の舍を圍むも、平然として、詩書の習はざる禮樂の講ぜざるこれ丘の罪なり、吾れ陽虎にあらず我を以て陽虎と爲すは丘の罪にあらず命なりと、子路と共に相和し相歌ひ、宋に往きては桓魋の殺さんとするに遇ふも、自若として天德を予に生せり、桓魋其れ予を如何せんといふ如く一難を經る毎に志氣愈高く以て其の人格の偉大を證す。

逆境の福音

晩年、魯に歸りて志を當世に斷ち、道を千載に傳へんと欲し、詩、書、禮、樂、を刪潤し、易傳並に春秋を述作す。詩は諷咏にして詩三百、一言之れを蔽へば思ひ邪無きに歸し、書は堯舜を祖述し文武を憲章す、所以、禮は政治の要、人倫の序、樂は即ち藝に遊ぶものにして易はこれ形而上學にして宇宙の玄機を探り、春秋は魯の史記にして法を萬世に垂れ、周の敬王の四十一年（西暦紀元前四百七十九年）を以て卒す、一代の行實は皆なこれ修養の典型にして其の教ふる所は悉く修養の規箴たり、晩年、修養の經路を回想して云ふ。

晩年

修養の徑路

吾れ十有五にして學に志し、三十にして立ち、四十にして惑はず、五十にして天命を知り、六十にして耳順ひ、七十にして心の欲する所に從ひて矩を踰えず

と、一生學に志し德を修め、人に教ゆるにも亦進學修德を以てし、

我れ生れながらにして之を知る者にあらず、古を好むが故に敏くして以て之を求めしなり。

と、いひ、

仁を好んで學を好まざれば其の蔽や愚。知を好んで學を好まざれば其の蔽や蕩。信を好んで學を好まざれば其の蔽や賊。直を好んで學を好まざれば其の蔽や絞。

進學

◎進學の盲行

◉孔子の實行

其の蔽や愚。勇を好んで學を好まざれば其の蔽や亂。剛を好んで學を好まざれば其の蔽や狂。

と說ひて講學の必要を示し。思ふて益なし學ぶに如かずとし敎へていふ。

君子、食、飽を求むることなく、居、安を求むることなく、事に敏にして言を愼み、右道に就いて焉を正す、學を好むと謂ふべきのみ

と、其の

朝に道を聞かば夕に死すとも可なり、

と、いひ、

賢を見ては齊しからんことを思ひ、不賢を見ては內、自ら省みる

といふ類、吾等を啓發す、其の修德に就ては智、仁、勇の三者を以て達德とし、道に志し德に據り、仁に據り、藝に遊ぶを以て人格修養の法とし、

君子の道は三、我れ是れを能くすることなし、仁者は憂へず、智者は惑はず、勇者は懼れず。

と、其の仁を說くや「君子終食の間も仁に違ふことなく、造次にも必らず是に

道に志す

三德

於てし、顚沛にも必らず是に於てす」といひ、

仁遠からんや、我れ仁を欲せば斯に仁至る

と示し、更に此の仁の主要なる觀念を曾子に示して、

參か、吾が道は一以て之を貫く、

何の謂ぞや曾子曰く夫子の道は忠恕のみ、

と、曾子曰く唯と、子出づ、門人問ふて曰く

子貢、問ふて曰く一言にして以て終身之れを行ふべきものありやと、孔子曰く

其れ恕か、己の欲せざる所、人に施すこと勿れ

と、其の勇を說くや、司馬牛、君子を問ふ、孔子曰く

憂へず懼れず

と、牛いふ、憂へず懼れざるもの君子といふべきや、孔子いふ、

內省みて疚しからず、夫れ何をか憂へ、何をか懼れん

と、內省不疚は眞勇の源泉、之れあつて初めて、「志士仁人生を求めて害する

忠恕

內省不疚

◉盛德の實行

ことなく、身を殺して仁を成すことあるを」得んか、孔子は實に此の三德を兼ね更に藝に遊ぶの餘裕ありたるなり。其の詩といひ樂といひて文藝的修養を

詩と樂

鼓吹せられ樂に就ては論語に「子、齊に在り韶を聞き三月、肉の味を知らずして曰く、圖らざりき樂を爲すの斯に至らんとは」とあり、淮南子に「榮啓期一たび彈いて孔子三日樂しむ」とあり、詩に就ては論語に「小子何ぞ詩を學ぶこと」なきか。詩は以て興すべく、以て觀すべく、以て群すべく、以て怨すべく、以て怨すべし、之れを邇くしては父に事へ、之れを遠くしては君に事へ、多く鳥獸草木の名を識る」とあり皆な之れ趣味啓發の資にあらずや。

天命

孔子の言行は常識的現實的なり。常識的現實的なる中に犯すべからざる信念と扞ぐべからざる操守とを見る、其の

罪を天に獲る禱る所なきなり。

天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す、我を知るものは其れ天か。

君子三畏あり、天命を畏れ、大人を畏れ、聖人の言を畏る。

天何をか言はん、四時行はれ百物生ず。何をか言はんや。

といへる中には敬虔の情溢れ、其の

蔬菜を飯ひ、水を飲み、肱を曲げて之を枕とす。樂亦其の中に在り、不義にして富み且つ貴きは我に於て浮雲の如し。

と、いひ、

富にして求むべくんば執鞭の士と雖も、吾れ亦之れを爲さん。求むべからずんば吾が好む所に從はん、

といふ超然として然も操守する所の堅きを見る。之れを仰げば彌、高く、之れを鑽れば彌、堅し。吾等は此の模範により此の教示に從ひ以て此の人格に近づかざるべからず。

四　ソークラテースの言行

基督降世前四百六十八年(或は七十年)、希臘阿典府に大聖ソークラテース生る。父はソフロニコスと呼べる彫像師、母は產婆を業とせるフエナレテ、其

の家甚だ富ます、幼にしては僅かに市民の普通の教育を授けられしに止まり多くは父の業に從ひ日に彫刀を手にしたりしも、自ら好まずして早く之を廢したりしが如し。

彼が哲學的教育を受けしや否やは今詳ならず、萬物轉變の理を稱導せしパルメニデースの教を聽き、又は其の時代のソフイストの教を受けしとありと說く者あれども恐らくは唯かゝる書を讀みしに止まり、面受せられたるにはあらざりしならん、少壯にして自然哲學を學びし事壯年三度軍に從かひし事と年四十に至らざるに父の業を抛ち、專ら道途に精神の修養を設きたる外は多く知るに由なし。

ソークラテース未だ教を傳へざる前、阿典府の征軍に從ふと三度、多くの逸話ありて以て彼が堅忍剛毅の性情と其の武名を談る、曾つて軍に在りし時、天寒ふして雪大に降り、人々苦寒に腦める時、彼は薄衣徒跣にして四方を奔馳し毫も苦痛の色を示さず、酒を飲まず、飢餓を意とせざりき。ポチダー戰役の時夏日陣營の前に佇立して靜かに哲理を瞑想し、朝より晝に至り、夕に及び、夜半も過ぎ、翌日の朝嘿靜かに東天に現はるゝ頃、初めて朝さ祝してをりし事ありき。プラートンとアルキビアデスの負傷せしを救ひしは實にこの戰役なりき。

ポチダー戰爭の後七年、阿典の軍デリリウムに敗れし時もソークラテース又軍に從ひしが其の態度の沈着にして死を恐れざりし風采はプラトーンをして轉た敬慕の念を起さしめ後年彼の言行を錄したるクセノハニーズが此の役に負傷して馬より落ちしを見て、己が肩に擔ひて救ひしは實にソークラテースなりき。

戰役より還れるソークラテースは選ばれて評定官、司法官の職に就き、終に元老院議長となりしが、此職にありし間も彼は正義と剛毅とを以て德義を行ひ、暴政を峻拒し、或は全議會に反對して自己の理と信ずる所を敢行し、毫も躊躇する事なかりしのみならず、漠然たる習慣と傳說とに倚らず、明確なる知識を以て社會百般の事を處理し、口に說く德義の實行を示したり。

◉ソークラテースの一生の事業は彼が野に下り、庶民の裡に逍遙して以て青　三八五　◉德實の言行

年の愛人たるに至りて始めて其の眞相を發揮しぬ。彼の風貌は眼大にして突出し、唇厚く、腹肥滿し、鼻低く一見して甚だ肉慾に渇ける人の如かりしと、其の思想の堅實高尚なると、談論の方法頗る世人の耳に新らしく、加ふるに事に當りて從容として迫らず、彼の詭辯者の如く美衣を着けず、贈を受けず、弊衣徒跣、恬淡寡慾なりしものから、亞典の市民が注目の焦點となりしは、元よりさることにて、彼が打鳴らす道途の木鐸は期せずして一世の師表となり、特に青年の耳目にはたとへ方なき崇高の念を與へたりき。

對話法

ソークラテースを敬慕して常に其の教を聞きし者はその數甚だ多く何人にても彼が說に耳を傾くる者は必らず此を教化せずんば止まず、而して其の教化には常に對話を用ひたりき。彼れ思へらく、人は個人に各〻異れる所見を有し終に一致合同すると難きに似たれども、さりとて詭辯論者の考ふるが如く吾人知識の成立は決して妨げらるべきものに非ず。其相異れる意見の裡に自ら生じ來る合同一致あり即ち是れ眞正の知識に非ずして何ぞ、換言すれば此の合同一致こそ蓋し眞實の自躰、實在界なれ、此眞實界よりして世界に現はれ來りしもの即ち一切の現象なり、吾人は此の現れ來りし一切の感覺や欲念の爲に妨げられて眞正の知識たる理想界に到達する能はず、若し吾人にして世界萬象の虛妄を離れ眞正の知識に至らんとせば、必然として吾人の精神を清淨ならしめざるべからず、即ち道德的躬行を以て虛僞に滿ちたる欲念を拂拭し、以て眞正の知識に達すべし、而して其眞正の知識即ち各人の合同一致する知識に達するには常に相集りて談論し對話せざるべからずと、さは云へど彼は自ら知識あり、道德ありと號し、又は天地自然の眞秘を探る所謂純正哲學の宗匠なりと謂ひしにあらず。彼れ常に學徒を警しめて天地自然の眞秘は之を究むるも要なし、吾等は天地自然の眞を知るに先ちて、汝自身を知らざるべからずと謂へり、彼の哲學が煩鎖なる談理を避け、朝に道を聞けば直に之を身に行ふを得る倫理なりしとは之の一事を以て知るを得べし、且つ自も何等の知識なき無學者なりと號し、曾てデルフワイの神託を以て亞典第一の知者なりと宣せられし時、彼は亞典府中我よりも大なる知者無きは頗る悲しむべきなりと慨きたりき。

汝自身を知れ

産婆術

ソークラテースの妻

彼れが對話談論を他と交ふるに當りてや、先づ己の無識なるとを告げ、以て他に學ぶ所あらんと云ひ、他が此に乘じて喋々として自說を吐くを聞きつゝ漸やく之を缺陷の地に誘ひ、以て自家撞着の坑に陷れ、他が自己の無識を覺るに及んで、徐ろに其說を破し我執を去り、かくて其胸裡に潜める眞知を誘致す、ソークラテースが產婆術と號するもの即ち是れにして、蓋し思想を出產せしむるの謂なりとす。

彼れは此の如く市民の無識を破し、眞知を啓發せんとを努力したれども決して其の反對者を攻擊するが如き態度なく、常に春風習々たる胸襟を有し、謙遜の美德を以て商估、工人をも卑しむとなく友人に對しては常に信切と愛情とを捧げ、曾て親言と慰藉とを廢せず、之を激勵し、感動せしむるに努めたりき彼が如何に他に對して寬大なりしかは、彼の妻が一日怒つて水桶を覆へし、ソークラテースの頭上より全身に注ぎし時、彼は平然として

雷鳴の後には聚雨ありといひ、或る人が彼に對して何故にかゝる精悍なる婦人を娶りしやを問へるに答へて、「人若し馬を御せんとせば宜しく悍馬を馭御せざるべからず、我人を御せんとす、我にしてかゝる悍婦を御馭し忍耐するを得ば、世豈に御し難く忍び難きとあらんや」と。

クセノハニース

ソ氏の門人

[illegible] 彼が敎訓は時として奇想天外より來る底の妙辭を以て人を誘ひ其好奇の心を喚起せしむ。「メモラビリア」を傳したるクセノハニース未だ彼が門に入らざりし頃、一日、市にソークラテースに遇ふ、彼れ卒爾として問ふて曰く、「食物は何處にて購ふを得べきぞ」クセノハニース答ふらく「かしこ市場にて求められよ」彼再び問ふ「人若し善良ならんとせば何處に行かば得べきぞ」。クセノハニース答ふると能はずして躊躇す、ソークラテース曰く、「然らば余に從がひ來りて學ぶべし」と、紅顏の美少年クセノハニースはこの時よりして彼の門に入りき。彼れに就て學を授かりし者甚だ多く、希臘後世の才華たるものを擧ぐるも尙ほ十指に餘れり、メガラの禁令を犯して夜々身を婦人に扮して彼の敎を享けしオイクリデスはメガラ學派の祖となり。克己禁欲を以て身を持せるオイクリデスはその當時既に帷を下して門下に業を授けつゝありたれど尙來りて自己の門生と共に彼が警咳に接して中庸節制の美德を守り。後代ソーク

◎ソークラテースの言行

ラテースを理想の巨人とせしプラトーン、キレネ學派の祖アリスチポス、史家クセノハニーズ、等の外、ペリクレスクリチアスあり、クリトーン、ファイドンの如き對話篇に名を止めたる者あり、青年のカエレフォーン、老者オイリピデースあり、艶女テオドータの如き者も又ソークラテースが教を受けたりと傳ふ。

孔門從遊の子弟三千人にもおさ〳〵劣らざる彼が門下は上は一代を指導すべき青年より下は兵士、估人、職工に及び、感化全市に洽ねく、恰かも磁鐵が自己の周圍にある鐵片をして悉く磁石たらしめずんば已まざるの狀ありき。ソークラテース當時の亞典府は內政轉た非に、奸人上に在りて政道を恣にし、古代の光彩も日に覆れて國外の辱を受くること多かりければ彼は常に之を嘆き、民衆の肉體を强健にし、敵國の狀勢に鑑み、國境の守備を論じ、以て舊時亞典府の盛時に回さんとし、政弊を痛論し、民心を皷舞し、自ら朝每に家を出で、或る時は運動場に出でゝ體操法を行ひ、或時は人を集めて處世の要道、德義の躬行を說き、身を以て之が模範たらしめんとせりき。是の如くす

ること二十年一日の如く、墨突終に黔まざる觀あり。亞典政廳豈に之を憚らざらんや。終にソークラテースはダイモンと云へる新神を拜し、希臘の神を瀆し、亞典青年を腐敗せしむと云へる三の理由を以て訴へられ、老軀獄に下りて、楚囚の苦楚を嘗めしめらるゝに至りぬ。

彼が獄中に在りて亞典市民に告げし辭は靜平にして威嚴に滿ち眞理の尊貴を仰ぎ、浮世の榮華を退け、凜として千古に獨步するの光彩を有す、曰く、

余にして若し人心を腐敗したりとせば汝等の欲する儘に余を遇せよ、幾回の死に處せらるゝも余は其道を更えざるべし。死は何の恐るゝ所ぞや、我は未來世に行きて古の英雄と物語らん、現在も未來も善人に惡の來ることなく、神は終に善人を棄てじ、余は今や生の死に勝れるを知る、諸神之を止めざるなり。

と、死刑の宣告を受けてより三十日デロスの祭日を守りてソークラテース獄中に在り、脫獄の機會ありけれども敢て之を爲さず、談論生平と同じく、門弟子を獄中に延きて以て敎誡を垂れ、「靜肅大膽に我が爲すべき義務を盡さん」

◎臨終の言行

ことをのみ思ふ。刑の前一日ソークラテースはクリトーンに對して哲學は死の用意たること、死は何ぞや、來世有無の問題を語り「クリトーンが末亡の寡婦及び家族を保育せんことを云へるに答へて「我欲ずる所は汝が德義の道を履み行ふにあり、汝之を完せば余が喜悅は家族を守護しくるゝに優れり、不德にして我家族を讒る終に何の要ぞや」と。

其の死

刑の時至りてソークラテースは門弟子の裡に坐し靜かに獄卒の齎らす毒杯を仰ぐ、弟子等はかゝる悲慘の光景を見るに忍びず、落涙禁じ得ざるものあり、ソークラテース弟子の獻欷慟哭するを見て云へらく「友よ何を泣くぞ、嗚呼德義何處にある、先に婦女をして去らしめしは是の如くならんと思へばなり、予曾て之を聞く、人は神意に任せ靜平に死すべきものなり」と、我が友悲む勿れ、乞ふ男らしき氣象を示せ」。言終りて牀上に臥し而も尙口言を絕たず、クリトーンに告げて牡鷄の負を果さんことを乞ひ、言終りて頽然として死しぬ、紀元前三百九十九年某の日、暮靄紅に亞典を罩めて、絕代の偉人が最後を裝ひぬ、時に年七十二。

ソークラテースが門下にして師の行實を後代に傳へたるものはプラトーンとクセノハニーズとなり。前者は「辨證論」及び「ファイドーン」篇等に於て師が亞典人民に對する豫言者風の忠告と死に對する感想とを記して委曲を極むる外に、其著述は多く其師ソークラテースを以て主人公となす、蓋しプラトーンは前に揭げし二篇に於てはソークラテース晩年の行實に由りて記述したるもの外なれども其他の諸篇は多くは自己の理想化せし先師をして物語らしめたるに似たり。されどクセノハニースの「メモラビリア」は第一篇に於て先師が蒙れる寃を雪ぎて稍論議せし痕を示す外は全篇殆んどソークラテースの行實と離れざるやの觀あり。若しプラトーンの傳へし先師を以て幾分理想の色彩を有するものとすれば、クセノハニーズが傳へし先師は現實の其を傳へしに庶幾からんか。ソークラテースが啓蒙の談論は「メモラビリア」一篇に於て、之を窺ふを得ると共に彼が如何に巧みに之を用ひて他をして修養せしめしかを知るに足るべし。今此に其二三を傳へて一斑を髣髴せしめんとす。

◎聖賢の言行

第一篇はクセノハニース自らの筆にして先師が亞典政府より蒙りし寃罪、

彼は瀆神者にも非ず又新らしデイモンを稱へしに非ること、(第一章)青年を腐敗せしことも非ざること(第二章)を論じ證するに其言行を以てし一轉して、彼一代の行實(第三章)を傳へ、神の尊むべく、克己制慾の利、戀愛情慾の害を說きしことを論じ、(第四章)に神の存在を說き、神は何處として在らざる所なければ苟しくも不正を爲すべからざるを說く。第六章には節制の美德たることを告げ、天下何人が放蕩不頼の者をして後見人となし、飮酒度無き者をして金銀財寶の管理者とすべけんや、無節制の徒は獨り他を損するのみに非ずして、併せて自己を損す、肉身の欲を恣にし金錢に平伏する者は是れ金錢の奴僕なり、この奴隷の卑しきと何の選む所ぞと。(第六章)は、詭辯者アンチフォンがソークラテースの風采の卑しきを以て甘んずるを難じ、かゝる生活は終に幸福に非ずと云へるに答へ、我の人に報酬を求めず、美食を口にせず、肉慾を恣にせざるは唯永久に不朽なる報を得んが爲のみ、自ら求むるなきは神なり、されば求むる所寡きは蓋し神に近きものたらざらんやと。(第七章)に於て彼は盧飾の人を戒しめ、樂師と水先人の例を引き、自ら得たる所なくして唯一時を糊塗する者は終に失敗に至り、友人を失ひ、他の財を蕩盡し終らんことを說きて之を誡む。

第二篇に入ればソークラテースが對話の妙を知るに足る妙篇多し、(第一章)にはアリスチッポスと共に節制と快樂とを論じ、食欲、情欲の節すべきと困苦艱難に堪え、忍耐勤勉に身を持するは以て大業を成就する所以を說き、プロチゴス書中の德義と逸樂の二女の譬喩を引き浮華淫蕩の逸樂の手を免れ、温良貞淑なる德義と共に步めと敎ゆ。第三篇(第五章)も又オイナデムスに放縱の害と謹愼の効を敎え、肉慾に溺るゝ者は何等の自由を有せざる奴隷に同じく、天賦の知識を之が爲めに銷磨し精神を蔽はれ、品格を墮落せしめ、義務を忘れ怠惰に誘ふ。世には放縱を以て快樂なりとする者あれども、這は甚だ誤まれり、眞正の快樂は放逸に非ずして反つて節制にあり、見よ放縱の徒は飢餓寒暑に堪えず、情慾を抑ふるの力を失ひ、之を行ふと數々にして終に快樂を滅す。何ぞ之をしも眞の快樂なりと云ふを得べき、身心共に健全にして家を齊へ友侶に信あり、邦國を愛し、敵を挫く、是れ即ち眞正の快樂には非

◎ソークラテースの言行

すやと。

ソークラテースは朋友及び友愛を論ずること頗る丁寧にして幾度か之を口にせり、曰く

世人皆な朋友を以て無價の珍寶なりとするは是れ宜なり、然れども朋友を得るに至りては家屋土地を購ふ程の熱心を以てせず、喜憂を我と共に分つものは朋友なり、然るに之を遇すること奴婢にだも劣れり蓋し誤れるの甚しきものなり、善友は金を出しても尚ほ求め難く、人は善良なる奴僕と良友とは之を捨つる者に非ず。されど朋友の選擇は必らず心して之を爲さゞるべからず。奢侈を好み、金を他人に借りて悉く之を消費し、借さざれば、敵意を狹む者は友とすべからず、されど徒らに吝嗇にして受くるを知つて與ふるを知らざる徒、利己に急にして他を省みざる徒、爭論を好み、人に報ひざる輩は友とすべからず、唯節制、信義、眞率にして己を益すると其に又他を益する者を選んで其友とすべし。友は之を得んと欲するも獵すべからず漁すべからず、宜しく其の好意を得ざるべからず、好意を得んと欲せば、宜しく其の人を歎美すべし、されど過褒して愚弄するの態あると勿れ、然りと雖も眞正の友愛は此のみを以て永久に持續するものには非ず、永久の友情を保たんには先づ身自ら有德の人たらざるべからず、朋友の善を喜び、幸福を悅し、友に盡して倦まず、友に對しては善を以て勝ち、敵に對しては勇を以て克ちてこそ初めて眞正の友情を保つことを得べけれ。

と、其の他アリスタルリスに貧困を遁るゝ術を教えて綿羊と犬との譬喩を語り、一家の女子に裁縫を爲さしめて金を儲けしめ。或は美女テオドータをして不正の快樂の盡き易きを教え、以て高尚なる哲學德義の快樂を知らしめ、或時はペリクレースと亞典の現狀を語り、愛國の精神義憤の調に燃え、又或時は王侯、大將の資格品位を論じ、若しくは繪畫彫刻の鑑議を語り、善と美との調和を論ずるなど、高きは神人の一致より卑きは家庭處生の法に至る迄、ソークラテースの口に乘すれば一個靈犀なる生氣に滿ち、不眞を去り、善美の域に到達せずと云ふ事なし。

◎デルフアイ神殿の標語

之を聞く亞典デルフアイ神殿には二個の標語あり、曰く『汝自身を知れ』曰

く『何事も中庸を尊しとす』と。蓋し希臘第一の偉人ソークラテースが標語は汝自身を知れと云へるにあり、胸裡に秘めたる善美は彼が巧妙なる產婆術を以て其の光輝を放つと共に其倫理は節制禁欲の中庸を以て之を律し、一歩一歩、デルファイの神殿に昇らしめんとす。一代の行實、誠にこの二個の格言を體現したりしものか。況んや、其の最期の沈着にして騒かざる態度、ウインケルマンが所謂高潔なる簡素、深沈なる雄大恰かも蒼海の沈濤の下千古常に靜かなる風格を存ずるをや。

「佛法を學するとは己を學するなり、己を學するとは己を忘るゝにあり　心は人を高貴ならしむ　（承陽大師）　（セネカ）」

第二章　英雄と修養

一　諸葛孔明の人格

英雄回首即ち神仙。劍戟を手にし徒らに民衆を殺戮して自ら快とす、これ眞英雄の資にあらず。古來撥亂反正の功を樹つるもの皆な其の心裏の奥底に深く自ら信ずる所あり、起て以て天下の蒼生を救はんとす。之れを以て能く人心を收攬すべく、之を以て能く統一の業を畫すべし。統一の業を畫するに深謀遠略なかるべからず。人心を收攬するに誠實慈仁なかるべからず。殊に其の死生の巷に奔走するに至ては膽勇あり、難に當て屈せず、厄に遇ふて撓まざるものなかるべからず。茫々五千載、宇内國を建つるもの幾許、而して興廢の蹟、歷々として幾多の教訓を吾等に遺す。まことに歷史は一種の英雄經にして世界は英雄の祭壇なり、而して其の英雄經には修養の教條を載せ、其の英雄の祭壇には賢哲の面影を止む。威權赫々歐亞の天地に振ひたるマセ

◉諸葛孔明の人格

ドンの大王アレキサンドルは破衣弊袴のヂオゲネスが寡欲を羨みて、吾、歴山大王たらずんばヂオゲネスたらんといひ、武勇絶倫一世に冠たりし英傑成吉斯汗は自己の行動を以て天意に外ならずと信じ寛仁大度以て人材を登庸したりといひ、セント、ヘレナの孤島に餘生を送りしナポレオンは世界に偉大なるものは基督あるのみといひて敬虔の念溢れたりといひ。更に之れを我が武士道に見る。誰か佛神の信仰を等閑したるものある、誰か仁慈の心を失ひたるものなる、伊達政宗、幼時、侍臣に伴はれて不動明王の像を拜し、其の他の佛神に似すして憤怒の相あるを疑ふ、侍臣告ぐるに此の佛、内に大慈の心を藏して外に憤怒の相を現し以て難化の衆生を攝すといふを聞き、釋然として武將の心得を知れりといふの一事はこれ英雄經の中心思想にして又我が武士道の殺伐以外に美所長所を有する所以にあらずや。這般の説話は東西に乏しからず、古今に其の例多し。今は暫く支那三國時代の英雄劉備をして功を奏せしめたる諸葛孔明を擧げて其の人格を學ばしめん。

漢の高祖、沛より起り三尺の劍を提げ正義を標榜して秦の亂を平げてより

二百餘年四民太平を謳ひしが王莽位を簒して世大に亂れ、幸に光武英邁の資を以て之れを討ち、天下復び漢に歸して又二百年、紀綱弛みて之れを恢復するに由なく、群賊蜂起して四海亂麻の如く、所在の豪傑之れが蕩平を名として雲の如くに起ち、各一地方に割據して其の雄を爭ふ。漢の景帝の子中山清王勝の後なる劉備名は玄德、家貧にして母と共に履を鬻ぐを業とす、しかも大志あり、好んで交を天下の豪傑に結び、河東の關羽、涿郡の張飛と兄弟の交を訂し共に漢室の頽廢を助けんと欲し潜かに献帝の詔を奉じ、威望隆々一世を蓋ひ天子を挾んで天下に號令し機に乘じて漢の天下を奪はんとする梟雄魏の曹操を討たんとす。此の時に呉に孫權あり、江東の嶮に據り才を愛し攬に禮し武を練り兵を整へ、屹然として曹操に向ふ、曹操之れを逆撃し、劉備大敗して荆州の劉表に投じ、僅に新野の城を得て之れを守る、時利あらず、志を齎らして行ふ能はず、劉備頗る脾肉の嘆あり。

此の時に當りて南陽に稀世の英才あり、諸葛亮字を孔明といふ。瑯琊陽都

の人、父は珪字は子貢、早世の後叔父玄に從ひ幼にして經書を學び、廣く諸子百家の說に通じ、古今の治亂を究めて施政の道を悟り、眼を兵書に曝らして其の術に精しく、人の出でゝ仕へんことを勸むるものあるも、深く思慮する所ありて出でず。胸中に經綸の策を懷き、臥龍山下に廬し甘んじて自ら隴畝に耕し、梁父吟を爲す人呼んで臥龍先生といふ、其の歌に曰く、

步出齊城門　遙望蕩陰里　里中有三墳　纍々正相似。
問是誰家墓。田疆古治氏。力能排南山　文能絕地紀
一朝被讒言　二桃殺三士　誰能爲此謀　相國齊晏子

劉備其の名を聞き之れを屈請せんとし、之れを南陽に訪ふ、途に田を耕して謠ふものあり、

蒼天如圓蓋　陸地如碁局　世人黑白分　往來爭榮辱
榮者自安々　辱者定碌々　南陽有隱君　高眠臥不足

と、劉備其の何人の作なるやを問ふ、これ臥龍先生の作なりと、其の廬を叩けば在らず、二び之れを顧る亦在らず。即ち書を遺していふ。

（上略）伏して覩るに朝廷陵替し綱紀崩摧し群雄國を亂すの時、惡黨君を欺くの日に當り、備、心肺俱に醉ひ、肝膽幾たびか裂け匡濟の忠誠ありと雖も、經綸の妙策なきを奈何せん。仰ぎ啓す、先生仁慈惻隱、忠義慨然、呂望の良才を展べ、子房の大器を施せ、備、之れを敬する神明の如く、之れを望む山斗の如し、一見を求めんと欲して得べからず、再び十日を容せ、齋戒薰沐して特に尊顏を拜せん、乞ふ寬宥を垂れ、鑑察せば幸甚し。

と、三び之れを訪ふ、時に孔明、臥床にあり、劉備階下にありて之れを待つ、孔明睡覺め吟じて曰く

大夢誰先覺、平生我自知　草堂春睡足　窓外日遲々

と、童を呼んで其の來人あるを知り、終に劉備と高堂に會す。正にこれ龍の雲を得たるが如く、孔明此に經綸の策を立て終に劉備に從つて廬を出づ、時に孔明年二十有七。

爾來劉備事毎に孔明に計り、師の禮を以て之を敬ふ、關羽張飛心に喜ばず、備に謂つて曰く此の青年、何の才ありてか深く之れを敬すると、備曰く、吾

が孔明を得るは猶ほ魚の水を得るが如しと、張飛等怒りて孔明を呼ぶに水を以てす、されど孔明已に知遇に感ず、他の毀譽何かあらん、唯だ實力を以て之れを服すべきのみと、後、曹操の軍と戰ふの時、畫策悉く圖に中り、劉備の軍意外の大勝を得。此に於て張飛等も亦其の智に服す、かくて赤壁の一戰にさしも猛威を逞せし曹操の軍を破りしより交戰幾回か辛酸具に嘗め劉備の威望いよ〳〵高く、終に漢中に王たるに至る。孔明欣然として曰く、吾、王が三顧の恩に感激し南陽の草廬を出でしは王を助けて四方を討平し、漢家を既倒に挽回し、天下をして泰山の安きに置かんが爲めなり、今、荊益の二州を跨有し兩川を蕩平し、漢中王の位に即く、稍々吾が意を強うするに足る、然れども琼にすべからざるものは此の後にありと、大に内政を修め國事を整ふ、後、曹操卒し其の子曹丕、献帝に逼りて位を讓らしめ、自ら皇帝の位に即き、國を魏と稱し、漢帝を弑すと傳ふるに至るや、孔明爲めに劉備を勸めていふ「今、曹丕、漢帝を弑して帝位を詐稱し、漢の嗣を絶す、王はこれ帝室の胄、今にして帝位に即き漢祚を萬世に繼ぐにあらずんば何を以て天下の

望を繫がん」と、此に於て劉備、帝位に即き章武と改元し國を大蜀と號し。孔明を以て丞相とす。

章武二年、帝、吳を討たんとして大に敗れ、慚憤病を得翌年三月に至りて甚しく、乃ち孔明に命じて太子を輔けしめ、謂ふて曰く、嗣子輔くべくんばこれを輔けよ、不才ならば君自ら取れと、孔明感泣して曰く、臣敢て股肱の力を竭くし忠貞の節を効し、之に繼ぐに死を以てせざらんやと、帝、更に太子に告げて曰く、

惡小なるを以て而も爲すこと勿れ。善小なるを以て爲さいることと勿れ、惟だ賢、惟だ德、以て人を服すへし。汝の父、德薄く、効するに足らざるなり、汝、丞相と事に從ひ之れに事ふる父の如くせよ

と、君臣相知る此の如く以て忠貞の節を効すべし、劉備は孔明を得て以て此の大業を畫し、孔明は劉備を得て此の大功を樹つ。人生の意氣感ずる此の如くにして初めて其の眞情を見るべし。

帝崩じて孔明其の遺孤を助け事、巨細となく之れを決し、日夜心身を勞し

◎諸葛孔明の人格

て休むことなく、呉と和して邊境を安くし、南方戎越を撫和して後顧の憂なからしめ、此に宿昔の志たる魏と中原に爭はんとし、出師表を上りて其の志を告げ、

「……三び臣を草廬の中に顧みて、臣に諮るに當世の事を以てす。是に由て感激、遂に先帝に許すに驅馳を以てす、後、傾覆に値ひ、任を敗軍の際に受け、命を危難の間に奉じ、爾來二十有一年、先帝、臣が謹愼を知る、故に崩ずるに臨みて臣に寄するに大事を以てす、命を受けて以來、夙夜憂歎、託付効さず以て先帝の明を傷けんことを恐る。故に五月瀘を渡りて深く不毛に入り、今ま南方已に定り、兵甲已に定る。當に三軍を奬率して北、中原を定むべし。庶くば駑鈍を竭くして姦凶を攘除し、漢室を興復し、舊都を還さん。此れ臣が先帝に報じ、陛下に忠なる所以の職分なり……臣、恩を受けて感激に勝えず、今ま遠く離るゝに當り、表に臨んで涕零ち、言ふ所を知らず、謹んで表す。

と其の至誠盡忠の志を見るべし。かくて大軍を率ゐて魏を討ち、關中響應す、

偶ま參軍馬謖、孔明の節度に違ひ敗績す、孔明還りて更に兵を出し、後の出師の表を上りて志をいふ。句々忠誠、言々人を動かす、其の末段に曰く、

臣、鞠躬盡力、死して後已む、成敗利鈍に至りては臣の明の能く逆め覩る所にあらざるなり。

と、兵を用ふる神の如く、敵を卻くすること數回、魏將司馬懿、其の威名を憚り、山に登り營を掘り、肯て戰はず、孔明乃ち民を息め、士を休することと三年、朝に出で奏して曰く、「臣既に兵士を養ふこと三年、糧草兵器充足して人強く馬壯なり、此の時に乘じて魏を討ち以て先帝の値遇に報ずべし、若し奸賊を平げて漢室を恢復せずんば再び陛下に見へず」と復た大衆を悉くし進んで五丈原に據り、懿と渭水の南に對し、兵を分ちて屯田し、久駐の基を爲し、數ば戰を挑むも、敵艮れて出でず。偶ま孔明、病を得て心神疲勞又軍務を見る能はず、乃ち楊儀をして代て之を司らしめ、病を扶けて自から遺表を出し、死して後、天子に上らしむ。其の表に曰く、

丞相、武鄕侯諸葛亮、伏して聞す、生死常あり、定數を逃れ難し、死の將

に至らんとす、願くは愚衷を盡くさん、臣、賦性愚拙、時に艱難に遭ひ、符を分ち節を擁し、專ら鈞衡を掌り、帥を興して北伐、まだ成功を獲ず、何ぞ期せん、病、膏肓にあり、命、旦夕に垂る。伏して願くは陛下、心を清くし慾を寡くし、己を約し民を愛し、孝道を先君に達し、仁恩を寰宇に布き、幽隱を提拔して以て賢良を進め、奸隱を屏斥して以て風俗を厚うせよ……

と、萬世の下、人君の規箴たり。死に臨んで君を忘れず、慈父の子を訓誡するが如く懇切を究む。孔明一たび先帝の知己に感じ草廬を出でゝより家國の經綸を以て己が任とし、遺孤を托せられては鞠躬盡瘁、死に至るまで止まず、

英雄、英雄を知る

英雄、英雄を知る、清の乾隆皇帝、御製五賢祠の詩並に序あり、

沂州古瑯琊郡、漢諸葛亮故里、晉王祥王覽、唐顏杲卿眞卿、皆產其地、舊有景賢詞合祀之、嘉其純忠至孝、節烈彪炳、足表範人倫、紀之以詩王祥王覽能全孝。眞卿杲卿均致身。所遇由來殊出處。要推諸葛是全人。諸葛是れ全人。眞にこれ誠忠の權化、君子と英雄とを兼ぬるものたり、鹽谷

謹愼の人

簣山、曾て孔明の傳を讀んでいふ、

古に稱す、非常の功を爲す者、必らず非常の行あり、予乃ち曰く、至常の行あつて而して後、非常の功成ると、光武の初め起るや、絳衣大冠す、人皆な驚て曰く、謹厚なるもの亦之れを爲すかと、殊に知らず、謹厚なるものにあらずんば則ち能く大事を爲す能はざるを、霍光小心謹愼、昌邑を廢し、宣帝を立つ、文王小心翼々、周家の基業を啓く、孔明亦自ら謂ふ、先帝、臣の謹愼を知ると、夫れ謹愼の孔明たる所以を知らば、則ち孔明の英雄たる所以を知る。

孔明の一代は謹愼にあり、而して此の謹愼なるものをして大業を賛せしめし劉備の眼識も亦凡にあらざるなり。

二　ワシントンの人格

北米合衆國が現時三十有餘州を併せて宇內に雄飛するに至りし因は主とし

て殖民地に不毛を闢きし人民が、自由を慕ふ止み難き精神に出づると雖も、之れを統率して草創の效を遂げし偉業に至りては、マウンド、ヴエルノンの一農者ジョージ、ワシントスに俟せざるを得ず。ワシントンの祖先は英國の人にしてジョージが四代の先初めて北米ヴアジニアの荒蕪に來りポートマックの河畔に廣大なる地を得て之を耕し、靜平なる生活を爲せしがジョージが此處に生れしは紀元一千七百三十二年二月二十三日、父はオーガスチンと云ひ、母はマリー、ボールと呼びぬ、兄弟十人ありジョージは其の二男にして一兄三姉を有す、父は温厚篤實の紳士にして神を敬ひ人を愛するの人格を有したりしなり、逸話の傳ふる所によれば、嘗て父は郊後の園畝に杖を以てジョージ、ワシントンの名を地上に劃し其痕に甘藍の種を播きしに、程經て甘藍はワシントンとある字の如く生ひ出しぬ。之を見たる幼童は怪訝の念に堪えず其故を父に問ひたりしに、父はこの機會を以て甘藍の種は己が播きしものなれど斯く生え出でしは世の創造主なる神の仕業にしてこの世に生を享けしものは悉く神の命に服從すべきものなることを訓へしと傳ふ、この一話を以てする

も彼の父が敬虔なる人なるを知るべし、又ワシントンが幼時父より與へられし笞の利を試みんが爲に庭園に在りし櫻樹を切り仆せしを僞らず父に告げて罪を謝しぬと云へる物語あり、ある傳者は之を以て據なき虛構の事と見做せど、彼が幼時よりして虛僞の言動を爲すを敢てせざりし證左とも見るべきか、彼が父オーガスチンはジョージが十三歳の時に死し、十人の子は各々其の遺産を頒たれて孤兒となりぬ。されど彼等の母は謹直にして兒女の教養を怠らず、頒ちし財産を監督して些の遺漏なからしめたりと傳ふ。

其の時代の殖民地の教育は未だ進歩せず且教育者も殖民地に至ると雖く高等の教育を受けんとせば海を越えて母國に行かざるを得ざりき故に、ワシントンの幼時に於ける教育も極めて幼稚なるものに過ぎず、唯だ僅かにヴアジニア州に於て、句讀、算術、簿記、習字を學びしのみ、文法修辭の如きは授けられざりしと覺しく、彼が作りし幼時の文章は甚だ謏劣たるを免がれざりき、されど彼が幼時には眞率にして何事にも謹嚴なりしことは其の當時筆記せし帳簿を見ても明なり、其體裁甚だ精細にして一として亂雜なるものな

く。彼が謄寫せし『證書文例』は商賈風の書體にて認められ其の書後に集めし拔萃の類には道德上の格言多く、幼時よりしてかゝる修養に心を致せしを證して餘ありとす。ワシントンが生涯の言行には、些の罪惡なく、卑劣なる點なかりしは皆人の知る所にして、其の因由する所は幼時より克己制欲の習慣を作りしに由らずんばあらず、彼れは幼時より活潑なる遊戲を好み、競走、角力、飛躍等常に儕輩に抽んで軍隊の遊戲、戰鬪の狀を爲すを喜び、自ら仲間の首領となるの習なりければ、思ふに其の性質は激烈にして情緒燃ゆるが如きものなりしならんも、彼は是が爲に禮讓を失ひ、言行を恣にすることなからんが爲に自ら道德上の格言規則を選び、之を言行の規律と名け、以て自己に克つの料とせり、今其一二を擧げんに

言行の規律

一　自己の名譽を重んずべし、上品なる人と交るべし、惡友と交るよりは友なきにしかず。

一　人を責めんと欲せば、自ら非難さるゝ如き態度あるべからず、先例は規則に優る。

一　博識なる人の前にて些細の事を喋々すべからず、無學なる人の前にて重大なる事を饒舌し、信じ難き奥妙なる話は爲さゞるを善しとす。

一　己に要なき他人の事は甚だ不正なればなり。

一　話しを始むる前、このことを話しても善きか惡しきかを考へよ、而して非難する勿れ、かゝる事を知らむと勉むる事勿れ、其の席上に在らぬ人を

事の注意

一　話しは巧妙なる話手なり。

一　言行は常に良心に恥ぢざらんことを要す。

一　努めて汝の心中に良心と呼ぶ天の光明を保て。

些事をも忽にせざるソシントンが精神は既に十四五歳の少年時より其の言行に現はれ、かゝる格言を服膺して克己の工夫を爲し來りしなり、彼れ既に小學校を卒業せし後二ヶ年が程は測量、三角術、幾何學等を修めしが、其時彼は實地練習の爲にとて校舍の近傍なる原野を測量すること恰かも自己の所有の如く、朋友が餘りに彼の丁寧に過ぐるを冷笑するをも顧みず、一々精細に之を己が手帳に書込みたりき、かゝる微細なる事に於て丁寧親切なりしヲ

◎ワシントンの人格

ワシントンは將來大國の經綸に當りても又丁寧親切に規律ある大道を行ひ、毫も疎放の風なかりしなり。

少年のワシントンの忍耐力と判斷力とは長兄ローレンスの緣戚なるフェアファックス卿に知られ、卿の領地なるアレガニー山中の地の測量を囑托せられたり、而して其領地は廣袤數十哩に亘り大澤、深林、谿谷に滿ち、猛惡なる蠻民は時として白人を襲ひて之を殺すの憂あり、非常の忍耐と勇氣を有するに非ざれば之に赴く事能はざりし地なりけれども、敢爲にして艱難を事とせざるは彼は一人の友と共に深くこの蠻地に入り、藁の床に毛の切れし一枚の毛布に身を纏ひ虱に攻められつゝ幾夜を明し恰かも工夫の如き生活を送りて斯る難事業を成し遂げたり。彼れが將來軍隊を督して佛國の軍隊と戰を交ふるに當りて困難に克ち、蠻地に入りて萎まざる經驗は蓋しアレガニー山中測量の賜なりと云ふ。

アレガニー山中、

昔てパージニヤのポトマック河畔の測量に從事しつゝありし時、其の近傍に住める農民の幼童が誤つて河に陷り、其の母が堤上を走りつゝ救を乞ふ聲を聞きたるワシントンは猛然として奮ひ起ち、巖に激し、石に逆ふ激流中に身を躍らして飛び入り、矢の如く流るゝ幼童を救はんとせり、急流直下する所は數丈の大瀑布、若し幼童を捉ふるを得ざれば彼は瀑布に打たれて再び生くるの望なかりき。幸にして少年の勇者は瀑布を距る數間の所に幼童を救ふを得たり。危難と困悋とは彼をして光明ある前途を期待せしめたるなり、されど、之を要するに彼が幼時は他の天才に見るが如く、尋常人の企及し得ざる底のものに非ずして反つて平凡なる一幼童が嚴肅にして規律ある生活を爲し、秩序と克己とを以て自己を敎育せしに過ぎざるを知らざるべからず。

幼兒を救ふ、

ワシントンの勇氣

ワシントンが公生涯の第一步は彼が二十歲より二十八歲に至る迄、粉骨碎身して以て故國に盡せし攻城野戰に在り。ウイリアム戰爭には民兵の州監大佐として之に臨み、アン女王戰爭にも又之に從がひ、ジョージ王戰爭には佛軍と戰つて非常なる名譽を得たりき。この間彼が性格は幾多の困難に由りて益〻陶冶せられ、高潔なる情操常に民兵の間に認められき嘗て政府が民軍に俸給を與へざりし時、全軍の將士擧げて隊を去らんと決せし時彼は

◎英雄と修養

◉ワシントンの人格

其原因の如何に拘らず、我はこの軍隊を退くと能はず、全軍悉く去るも我一人は留らん

と云ひ。戰敗れて困難の起る毎に彼は常に其の責任を己に仮し、戰の啓かるゝ毎に

我自ら先づ進まん

と叫び、全軍の先頭に立ちて指揮を下すを常とせり。而して彼は戰の終りには必らず古郷ヴエルノン丘に飯臥し、ジョージ戰爭の後は純然たる一農者として耜を秉りて隴畝の間に立ち、毫も效名の欲なく、恬淡なる生涯を送らんとしたり。

然れどもヴエルノン丘上の夢は長へに穩かなること能はず、パトリック、ヘンリーか自由を與へよ、然らずんば死と云へる叫聲が、殖民地の人民を熱狂せしむるに當りてや、人民は强ゐて彼を隴畝の間より起たしめ、與ふるに將軍の印綬を以てし、烏合の衆に將として精鋭なる英國の軍隊と前後七ヶ年に亘る戰爭に當らしめたり。彼が自由の爲に一身を犧牲に供し、己を用ひし人民

の知に辜負せざらんが爲に如何に苦心焦慮し、困難と飢餓とに身を委ねて毫も悔ゆる所なかりしは、世人の熟知する所にして、若しワシントンにしてヴエルノン丘に起たざりしならば世界唯一の自由の章なる星旗は今日ワシントンの白堊館上には樹てられさりしや必せり。

精良の武器なく、身を支ふる程の給養もなく、加ふるに議會は數〻俸給を部下に與へざる間にありて何等の支給をも受けざるワシントンは自己の名譽と功蹟をば

是は我が兵士より受くる賜なり

と感じ、

米國は一に諸君に負ふ

と激勵したればこそ、彼等統一なき民兵は敵の戈器を奪ひて以て敵を伐ち、自由の偉なる光榮をば神に捧げんと欲するの精神に住したるなり。

ワシントンが攻城野戰の功、フランクリン等が樽俎折衝の蹟は結晶して終に北米の自由を生みぬ。これ等の偉功は一として誠實の賜ならさるは無し。

◎ワシントンの人格

一千七百八十三年十一月二十五日北米合衆國の獨立と平和は地上に確立せられ、越えて十二月四日軍の總督ワシントンはニヨーヨーク、ホテルに將士を集め、嚴肅なる告別の式を擧げ、其印綬を解き、萬人の涕泣を後にして彼は鄕里のヴエルノン丘に去り、人民の職業中、最も健全、幸福、尊貴なる農業に身を委ね、毫も効名を心に掛けず、唯其の義務を果したるを喜んで再び來報を手にしたりき、彼の敬すべき美點は實にこの恬淡にして寡慾なる點にあり。

若しワシントンにして一點の野心を藏したらんには、彼が帝王たらんとする機會甚だ多く、且つ一擧手一投足の勞にして彼は帝冕をも其額上に加へ得べかりしなり、されどワシントンが自由と米國との父たる所以は實に之を付けし高潔なる精神より出てたるなり。ワシントンは帝王たらしめんとする請告を受けて之に答へたる書牘は百代に傳へて彼が高潔なる情操を語るに足る曰く、

『卿よ、汝の手紙は我をして殆ど驚愕と恐怖とを禁じたり。戰爭の困難は終

に卿の感情を聞きしに比すればものの數ならず、我は斷言す、我はかゝる手紙を見ることを憎惡す、……卿にして若し國家を思ひ、我身と兒孫の行末を鑑み、尙我を思ひ玉はゞ速にかゝる考を心中より抹殺せよ、而して再びかゝる事をば我に告ぐること勿れ、又人にも告ぐること勿れ。』

かゝる高潔なる精神を有する一農民をヴエルノン丘より起たしめて米國第一の大統領たらしめしは蓋し米國の大なる光榮にして、彼が三度其職を裝はざりしは彼の光榮たり、蓋しクロムウエルたらざりし彼は世界の光榮たらずとせずや。

◎英雄と修養

佛軍と戰ひては堅忍なる大佐たり、自由の爲めに戰ひては總督たり、政治家としては第一の大統領たるワシントンはヴエルノン邱上の一農夫、ポトマック河畔、葡萄と無花果の樹陰に一市民たりしジョージにして疇昔アレガニーの山間に亂と共に困難せし一小童に過ぎざりしなり。市民の間に生れし自由の兒は他の所有地を測量せし勤勉なる一青年なりき。彼が成効は彼が日常腹膺せし格言の如く

總べての斷案は廣き經驗と熱心なる熟慮との後に來りしものあり。

三　徳川家康の人格

江戸幕府三百年の基を開き海内三百の諸侯をして柳營に摺伏せしめたる稀代の英雄徳川家康の先は、清和源氏の嫡流を汲み新田氏を襲ひしと雖も中道に至り困頓失意して身を藤澤遊行寺に投じて僧となり徳阿彌長阿彌と稱へ、遊行上人と共に海内を教化し途三河を過ぎ松平酒井兩村長に養はれて子となり。松平氏に育はれし徳阿彌は歸俗して松平太郎左衞門と號し、自ら近隣の荒蕪を墾き道路を修め貧窮を救ふて其の名稍〻近傍に聞ゆるに至りしが、後壯丁罪人を募つて武を業とし、四方を略するの志を有すること一百年、族酋稍多きを加ふるに及んで遂に岡崎の城に據り廣忠に至りて漸やく海道に重を爲す、廣忠の子竹千代は即ち徳川家康なり。

當時海道に覇を稱する者三河を中心として北に武田氏あり、東に今川氏あり、岡崎は常に此等豪族の威武に威嚇せられ廣忠に至り織田信秀と戰ふて勝たず、救を今川義元に乞はんか爲に其子竹千代を質せんとす。信秀隙を見て竹千代を途に奪ふ、義元廣忠を援くるに及び、信秀の家人竹千代を殺さんとするを信秀の嗣信長之を助け、換ゆるに織田氏の家人を以てす。これより竹千代は今川氏に質となり、義元は竹千代を後見して僅かに岡崎の城を保つを得たり。竹千代長じて家康を名告るに至り義元は家康をして西三河に當り以て織田氏に備てしめ自ら上洛して京師を定めんと欲する志あり、斯の如くにして家康は織田今川兩家の間に存し、驥足を延ぶる事さへ能はず、日夜攻戰討爭に身を委ね、備さに辛酸を嘗めざるを得ざりき。

家康が老來天下を掌握するに至れる修養は實に彼が岡崎一小城に據り四方の豪族と相砥礪する間に成れり。其意志の堅實にして一點浮華の氣なきは之を甲斐の信玄に學び、膳斗の如く事に臨んで直截の斷を下すは之を信長に學び、加ふるに父祖の衣鉢を傳へし天賦の才能は戰鬪に臨んで常に其鋭鋒を現

はしたりしをや。彼は小國を以て敵を四方に受け、攻城野戦の謀略を胸中に蓄ふると共に常に民政に意を止め、寸土尺地を拓きて民富を増すの政治的方面に心を盡さゞるべからず。「武功雑記」の傳ふる所に由れば三河にて御家人に仰せ渡されしは、「家人等の妻を迎ふるには、よく木綿を織り得べき女を求めよ、御出陣の後には俵米十分を玉はることならねば、かゝるものを織出て家業にあてよ。

秀吉が聚楽一宵の歓會に千金を散じて豪華を事とせしに比して殆んど天淵の差あるを見る。彼れ曾て部下に節倹の道を教へて曰く我に五字七字の秘傳あり、

上を見な。
身の程を知れ。

彼れが秀吉の豪放なく、信長の爽快なく、成功と勝利とは常に隠約の間に存して一點人を魅するの光彩をも有せざるに係はらず、終に天下を一統したり し所以の者は、實に彼れが堅忍にして不抜なる意志の力によれり、而して其

の意志は實に三河の一小人質なりし竹千代の時代に蘊蓄したりしなり。世に傳ふる。家康の遺訓は其眞僞未だ急に信じ易からずと雖も彼れが老成堅實なる精神、周到緻なる用意を道破し得たるに庶幾し。

人の一生は重荷を負て遠き道を行くが如しいそぐべからず、不自由を常と思へば不足なし、心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基、いかりは敵と思て、勝事ばかり知て負くる事を知らずんば害其身に至る、おのれを責て人を責むるな、及ばざるは過ぎたるよりまされり。

言々悉く是れ彼れが一生の事蹟より歸納せし一面の眞を含み、滿足、忍耐、謙慎の徳を以て無事長久の基を闢きし教訓とも見るを得べけんか。彼れは實に堅實なる意志を以て本尊とするを以て身を持する幾多の小竹千代と小家を占め得たる岡崎城裡には質素堅實を以て身を持する幾多の小竹千代と小家康とありて、以て彼をして三百年太平の基たらしめき。家康が功成り名遂げて已に駿河にありし頃、常に足袋箱二管を作り置かしめ、一は新らしきを納

◎徳川家康の人格

足袋箱

れ、一は砂土などに汚れしを入れ、其の箱滿つるに及んで、我前に之を開き、汚れたる足袋兩三足は元の箱に殘し置き其の餘はそれ〳〵の女房どもに分ちたり（古老物語）倹素の風は一族中に影響して所謂三河武士の美點となりぬ。秀吉は諸將を遇するに賞功の大を以て其功名心を皷舞し、國土を與ふると家康の汚れたる足袋にだも及ばざりしも、家康は財地を得るを容易ならざりしを以て恩威を以て家人を厲まし、部下を皷舞するに氣節を以てし、過するに自己の一族を以てせり。嘗て秀吉宿將を會して存する所の珍寶の何物なるかを問ひし時、諸將各々金銀財寶を以てす、家康默して言なし、秀吉強て之を問ふに及びて曰く

家康の寶

吾は三河の片田舍に生ひ立ぬれば一の珍寶をも有せず、唯予の爲には水火をも辭せざる五百の士を有す。

と。爭臣十人を有せし侯伯の言にもまして秀吉の心膽を寒からしめたりけん、不敵の太閤唯苦笑して止みしと傳ふ。彼は如何にして水火をも辭せざる五百の家人を贏け得しぞ。「如蘭社話」に傳ふる逸事は家康と其の家人との交情とを

石川又四郎の話

知るに足るべし。曰く家康の臣石川又四郎なる者あり、初め淨土宗なりしが後轉じて一向宗徒となり一向一揆に與みして三河を亡命し而も至る所志を得ず、漂泊して再び三河に至りしが、會〻路上に家康と會しぬ、家康又四郎を見て、

あれに居候は石川又四郎めと見ゆる、譜代の主を檀那坊主に思ひかへて我等方を出、愛かしこを經めぐりても埒明ぬゆへ、又舞戻りたりと見えたり、不屆なる奴かな

と云ひ、近習に吩咐して彼れを城に伴ひ來らしめ薄暮に及びて城に歸りて再び又四郎を召し、

胸ぐらを御取被遊、汝元の淨土宗になるまじきか、いやならばいやといへ、首を切つてと仰せられければ又四郎承り、たとへ首を切りなされ候とも宗旨をかへ申儀は罷成不申と御請を申すを御聽被成、扨々情のこわきにくき奴かな、ゆるすぞと御意にて、御つきはなし被成候へば、又四郎は後ざまに二三間ほどよろ〳〵と し、あふのけに倒れしがやがて起直り、兩手をつき、元の淨土宗に罷成可申と申を、御聞被成、已めは身共がいふ時は不罷成と云、只今になりて可苦いとふは、いかなる所存ぞやと被仰ければ、又四郎承り、いかに私體の者にても宗旨をかへぬに

◎英雄と修養

◎徳川家康の人格

於ては、昔を切ぞとの御意の下にて御請仕候ては男立ち不申、ゆるすとの御意の止にて御主様の御嫌被遊候一向宗にて罷在べきやうは無御座に付、以前の浄土宗に可罷成申上候と也、兎角の御意も無之、御わらひ被遊被成御座候か、其後段々と御念頃に被召仕候なり。

以て家康が如何に家人を遇したりしかと、家人が如何に稜々たる眞骨頂を有せしかを想見するに足らん。

彼れは堅忍不抜なる意志と氣骨稜々たる家人とを有し加ふるに時機の來るを待つ忍耐の精神を有しき、天下を統一して江戸幕府を開くを得たる所以の者は實にこの三者あるを以てなり、彼子孫を戒しめて曰く

世に大丈夫と稱せらるゝもの忍の一字を能くす、我未だ大丈夫ならずといへども忍字を持する久し、忍の一字を守るべし

彼は隱忍して静かに時機の臻るを待てり、時機一たび至らば彼は静かに畫策して一點一畫を打算し、利害成敗を胸裡に畫きて而して後之に當る、彼は破壊の英雄に非す、破壊すると共に建設するを忘れざりき永祿七年十一月武田

忍の一字

啐啄

信玄家康の英名を慕ひ、家人下條彈正をして書を酒井忠次に送らしめ、兩家慇懃を通ずべきを以てす、其の書の表に啐啄の二字を記せり、城中其の字面を知る者なし、會伊勢の僧江南和尚東國に赴かんとするの次岡崎を過ぐ、乃ち石川日向守家成この字義を問ひしに、鳥の卵殻を破るに其時節あり、早ければ水となり、遲ければ腐ると云へる意なりと答へき、家康之を聞き

凡て萬事に時を失はざるを以て肝要とす、主將たらんものは殊更此意を失ふまじ

と云へり。彼が用意の那邊に存するかを知るべし。

家康のかくの如くにして時期の來るを待ち、終に海内を一統して戰亂を剿絕し、民に鼓腹擊壤の樂を與へ、自又征夷大將軍淳和奨學兩院別當源氏の長者たる榮譽を荷ふに及りぬ。されど家康は一面に干戈を以て海内を靖定すると共に他面に於ては文物を起し宗教を尊び、干戈に更ゆべき恁麼東西を民に與ふるを忘れざりき、曰く文教即ち是れなり。戰國の英雄は嚢攻伐を以て民人を定め四方を鎭壓し得べしと信じたりき。是彼等が皆中道にして其業を棄

◎英雄と修養

◎德川家康の人格

てざるを得ざる素因なり、家康の達見豈是を知らざらんや、彼れは民心を統一すべき唯一の方法として宗教を取れり、若し宗教にして其所を得せしめざらむが、彼等信仰に熱せし徒は一揆となりて四方の族人と結び、其の極終に收回すべからざる一大勢力を現出すべし。曾て家康が一向宗徒の亂を鎭めんが爲に大樹寺に於て淨土宗の門徒を集め、「厭離穢土、欣求淨土」の旗幟を立てゝ之に對立したる如き、明らかに彼の腦中に浸徹したる事象ならずんばあらず。彼は宗教を善用すべきを知れり、本願光佐の子光壽をして東本願寺を立てしめ彌陀如來の弘慈も是には過ぎじと思はるゝ岩淵夜話恩義を施すこと共に、關ヶ原の役に彼に從はんとせし一向宗徒をば嚴に斥くるの處置を誤まらざりき。彼は宗教をして天下統一の具たらしめたり。

家康幕府を江戸に開くに當り、武州仙波喜多院の天海をして常に其の帷幄に參せしめ、天海をして黒衣宰相の名あらしむるに至れり、天海は實に稀有英傑の資、江戸幕府の爲に畫策する所頗る多く獻山の僧徒を鎭め、上野に寬永寺を創め、京の延曆寺と對し法親王をこゝに据えて京師の異心を壓へ、家

康薨ずるに及んで一實神道の奥義により東照大權現の神號を契清する等、公武の間を斡旋すること甚だ勉めたり。天海に次で德川幕府の爲に斡旋したりし者に金地院崇傳あり、幼にして禪法を學びて南禪寺の長老となりしが、頗る文事に精なるを以て招かれて陣中の文學を掌り、幕府開くるに及んで天下の佛寺を統一し、法制を定め、外交に當り、後江戸に金地院を設けて僧錄職を握る、又一世の奇僧たるを知るに足る。家康はこの二人者を以て民人の宗教心を利用するの具とし以て幕府をして益々九鼎太呂の重を爲さしめき。幕府が民人統一は宗門改めを以て其大成を期し、武人には朱子の穩健なる學風を以て文學の素養を成さしむると共に、世道人心をして殺伐なる氣風より蟬脫せしめんとせり、彼は藤原惺窩を擧げて文敎を起さしむると共に、弟子林羅山を重用して文學の柄を接けぬ、「武家諸法度」は腥血未だ腕を去らざる武人を敎へて曰く

文武弓馬之道專可相嗜事、

左文右武古之法也、不可不兼備矣、弓馬是武家之要樞也、號兵爲凶器、不

◎英雄と修養

◎德川家康の人格

得已而用之治不忘亂、何不勵修練乎。

と云ひ、或は又百ヶ條に

文武皆仁より出づ千徑萬機と雖其理同じ、治國平天下の法茲に在りと知るべし

と。聖賢の道此に於てか再び地に在り、家康は如是にして國の上下を文敎を以て統一せんと努めたり。

儒と神道と釋とは其品は區別すれど善に導き惡に罪するに過ぎず、其所見に從ひ、之を宗とし之を旨とす、妨げざる所なり、されど議論に於ては堅く停止すべし

末段家康が議論を避けて實行に心を注げるの態度を見るべし。

さらば家康自己の信仰は抑も何所に確立せられ、何人によりて鼓吹せられしが、天海僧正か、あらず、崇傳和尙か、否、曰く三河大樹寺の登譽上人なりき、彼曾て岡崎にあり、一向一揆と戰かひて利ならず、從ふ者十八人と共に逃れて大樹寺に至るや、住持登譽は彼に懇切なる訓誡を以て彼を覺醒せし

登譽上人の敎訓

めき。「淨宗護國篇」に曰く

上人公に向ひて問ひ申されけるは、御若年の昔より數度の軍に向はせ玉ひけるに、敵に勝ちなんとのみ勇み玉へるか、又は何の分ちなく一筋に向ふを洩さず切り拂はんとの御心なりや、此二つの境いづれをか先に爲し玉へるぞと云へり。公聞し召して之れ卽ち武士たらんもの常の志にて更に珍らしからず何ぞ事新らしき尊れかなとのたまへり、上人又申されしは然らば申上ぐべし、敵を討ち亡して何の爲にかしたまふ、公答へて曰く其の心は武威を盛んにして敵を討ち終ふは城を乘り取る時其領地卽ち歸服す、これは少分の勝なり、大度の武將は其計略大にして爲すところも然り、然して勝つときは大國の主となりて富四海にわたり威を世上に振ふようとのたまへり。上人又申さく、富四海に渡り威を振ひて何の爲にかしたまふ。公曰く然る時は其家を興し、父母あればもとより亡きと雖其名を輝かし、ましして其身は名を後代に止め榮華を于孫に傳ふ人古今珍しからず、然ればこれ武功の大なるに非ずや。上人重れて曰く、それ人身に貯ふる德を以て其威を增して萬人を司る人は其榮累代にいたりて久し、又勇力强盛を振ひて人に勝つ時は其勝利を保つこと久しからずして又人に亡ぼさる、然れば幸は天より受くるを以て第一とす、されば天より受けさるにおのが計力にて討ち從へしは幾程ならずして衰ふ、これ卽ち非常の武力にして切賊なり、それ非道にして富貴なるは浮雲の如く一旦に草葉の露くに異らず、かゝる愚なる心は貪り

◎英雄と修養

◎德川家康の人格

より起れり。國郡を從へて一旦富を成し榮華を爲すと雖忽ち死に赴く時はやがて惡趣に墮りて恥しめなとりて其迷魂計りなき苦を受くるなり、これ必然の道理にして免るゝことなしと云へり。公つく〳〵と聞し召され御得心淺からざりしかば仰せける樣、敵を亡しては其所領を得、又はだん〳〵の功を以ては登庸せんとを願ふは諸士の道なれば其計略軍理を常に心がけて勝れんとを旨とす、然らば此一事に心を傾けて佛法後世の用意に於ては尤も疎きなり、然らば當來の浮沈これまた餘氣なき專要なり、如何ぞ謹むべからざらんや。當來に於ては因果應報等のこと皆以て佛敎なり、此に至りては上人の敎化に從ふべし、爲に示されよと實にうらなき仰せ言なりければ。

渾身唯是れ功名と富貴とを以て畢生の志望とせし將軍は萬人が心中の機微なる宗敎の源泉を衝ねて以て這の刼賊を覺醒せしめたり榮花、富貴死の前に來りて畢竟何するものぞ、唯兒孫の計と祖先の名とを知つて迷魂計りなき苦惱を受くるを知らず、況んや貧慾の家は常に勝利を保つ事久しからざるをや。家康は常に後世の必要を聞くの機を捉へ得たり。登譽上人はこゝに於て一段の訓誡を與ふ

世上の武士なさして總て劫賊と申すには非ず、元來其所作に善惡は侍らず、唯其人の心を申すなり、若し其心法に適ふ時は日夜に刀刃を振ふて殺斷するとも聊か惡業にあらず、又長へに佛經を讀誦し晝夜に念佛するとも之を善行とも云はず、唯方寸の一法にあり、此義を觀じぬれば武士の作業は全く菩薩の行に違ふことなく、慈悲の行法大權聖者の善巧方便なり、されば古人の語に天下は一人の天下に非ずして天下の天下なりと云へり、然れども天下に於ては其主君其司なき時は民ほしいまゝにして爭亂止む時なし、然るを主司となりて天下を我物とし榮華を極めん爲めに庶民を貪り苦しまむる時は國人疎み惡むなり、然るを傍より其疎んぜられて萬機まち〳〵なる弱味を見て敵士已に出來て戰ひに及べり、元來國人に疎まれしかば實の加勢なきを以て終に敗り亡さる、又其君主聖道を行ひ民を憐み神佛を尊崇し、道行はるゝ時は其仁德四方に至るを以て更に怨敵なし、然れば則ち一郡一國にても又は天下の廣漢なるも其君主司職とならんには其器寬大慈愛にして、物の爲に驚動せず、柔和正直にして人を愛し憐むを以て本とす然る時は何を以てか背き怨むるものあらんや。若し又かくあらん上に於て其聖道に背きて士は逆心を爲し民は慾を擅にして其惡業りて世を亂がし亂を爲んにも彼の慈悲の道破るゝに當れりとて其まゝにし置く時は其亂いよ〳〵盛なり、然る時は彼の慈悲の心は更に捨てざれども之を見て忍ぶに止むを得ずして或は辭を以て戒めむとすれども、彼の惡徒其下知に從はざる時は、速に之を退治し或は流刑に處し又は誅伐すること定れる法にして之れ即ち殺生を以て殺生を皆むるの義にして

◎英雄と修養

◎德川家康の人格

即ち菩薩の修行にて慈悲の一行なり公は御先君より代々佛敬な信じさせ玉ひ、別けて淨土の法門に歸依しますこれ第一の御宰なり、然らば則ち禍令當宗の法意によりて逆亂の苦難を拂ひ向ふ所の諸勢をして正道に歸せしめ玉ひ、國家安泰にして甲胄の緒を解き弓を袋にし玉はんこと只御心の中にあり、恐れながら示し上るべし、抑も件に逃べ候ひし聖賢の道を行はせ玉ひなば御運を開かせ玉はんこと更に怪しみなし、而して兵具收り同那穩かにて安住ましまさんには平生に淨土往生の御心を起させ玉はんを第一なり、第二には諸士をめぐみ民を憐れませ玉ふべし云々

陣中常に六萬邊の念佛を稱へ、六字名號の旗幟を以て敵に向ひし家康は果然として其壯年の時代に於て登譽上人の提撕に由りかゝる安心を立命せしを思へば彼が三百年の覇業を成就せしもの又實に其所因なきに非るなり。

第三章　文豪の修養

一　蘇東坡の修養

四百餘州の山水其の秀靈の氣を蜀の地に鍾め、峨眉の山、蜀江の水、凝て錦心繡腸の詞章となり、先に李太白あり、峨眉山上半輪の月、影は一代を風化して支那詞人の宗たり、後に蘇東坡あり。眉州眉山の縣に生る。字は子瞻、名は軾、其の家は峨峨の麓、蜀江の上にあり、父は洵、字は明允、老泉と號し、少にして學を好まず、年二十有七にして發憤して學に志し、戸を閉ぢて書を讀むこと六年、六經百家を究め、京に入りて歐陽修に知られ秘書省校書郎となる。其の文蒼勁峭刻、優に一代の文宗たり、祖父序、伯父、澹、渙も亦文學を以て著はれ。東坡の弟、轍、字は子由、其の文秀傑平暢、父兄と共に文星一門に集る。母は程氏。賢夫人の名あり、坡の幼時、父洵官游して在らず、敎養一に自ら任じ、之れに書を授け之れに治亂の蹟を談ず、東坡は實

◎文豪の修養

◎蘇東坡の修養

に出でゝは秀靈の山水に接し、入ては此の母に鞠養せられ、不言の感化と有意の敎訓とは此の少年を養成し、幼時作る所の文中、既に

人能く千金の璧を砕くも、破釜に聲なき能はず、能く猛虎を搏つも蜂蠆に色なき能はず、

破釜の聲

の語ありと、人情の至微を穿ちて心衷の琴線に觸る。長じて莊子を讀み、嘆じて曰く「吾、昔、中に見るありと雖も口言ふ能はず、今此の書を見て我が心を得たり」、默識神通、好んで南華の書を讀み。心神の修養に資し、後、父弟と共に京師に入るや、三蘇の文名一時に藉甚し、殊に東坡の文に至ては當時の文豪として天下に冠絶したる歐陽修も、軾の書を讀んで汗の出るを覺えず、快哉快哉、老夫當に此の人を避くべしといひ又客と談じて「三十年後、世人更に我を道着せじ」といふ。東坡眞に知己を得たりといふべし。終に試に應じて官に上げられ、大理評事簽書鳳翔府判官となりて任に到るも、刀筆の吏となりて斗米の爲めに沒頭するは彼れの堪ふる所にあらず、終南山に隱れ竹林の中に在りて避世堂と名け、

文名一代を壓す

隱几頽如病、忘言兀似痴、弗茨追上古、冠蓋謝當今、曉夢猨呼覺、秋懷鳥伊吟

の閑寂中に詩思を養ふ、然かも治蹟大に見るべきものあり、任滿ちて京に歸る、英宗皇帝、軾が才を愛し召して翰林に入れんとす、時に韓魏公、相たり。諫めていふ。軾、才遠にして大器なり。他日自ら天下の用を爲すべし。要は朝廷に於て之れを培養するに在り。今一旦驟かに進めば天下の士、未だ必らず皆な之れを信せず、適ま以て累を爲すに足らんと。召して秘閣に試み直史館たり。英宗崩じて神宗立つに及び、年壯にして名を好み、治を求むるに急にして王安石を擧げて其の新法を行はしむ。軾、之れと爭ふて合はず。侃々其の非を擧げ諤々其の弊を論ず。安石喜ばず、遂に請ふて抗州の通判となる、留ること三歲、密に徙り、更に徐州に至り湖州に轉じ、想ひを江山に寄せて滿腔の不平を吐き、終に禍を買ふて獄に下さる。蓋し安石の徒の讒誣に出づ、軾、詩を輯に寄せていふ。

聖主如天萬物春。小臣愚暗自亡身。百年未滿先償債。十口無歸更累人。是

題詞不過

◎文豪の修養

東坡

處青山可埋骨。他年夜雨獨傷神。與君世々爲兄弟。又結來生未了因。

と、彼れ既に死を決したりしなり。幸に神宗其の才を惜み、僅に赦して之れを黄州に貶す。朝に在ては傲岸一世を壓する安石と爭ふて屈せざりし軾も今は謫地に在りて田夫野人を友とし、

先生食飽無一事。散步逍遙自捫腹。不問人家與僧舍。柱杖敲門看修竹。

悠々自適、身の窮厄の中にあるを忘る。谷究つて山愈々高く、困難益々迫つて其の人の高きを見る。中年に於ける東坡が流離困頓は彼れの人格を陶冶し其の詩思を啓發す。自ら故營の地を墾して東坡と名け又自ら東坡居士といひ坡に沿ふて雪堂を築く、前後春艸齋しく、左右斜徑微なり

吾不知五十九年之非而今日之是。亦不知五十九年之是而今日之非。吾不知天地之大也寒暑之變悟昔日之癯而今日之肥

と、其の白露、江に横へ、水光、天に接する明月の庭に槊を横へて詩を賦せし曹孟德の昔を偲び眇たる蒼海の一粟、吾が生の須臾なるを哀みし赤壁の賦は實に此の時代の清遊を叙せしものにして千古の絶唱にして其の病の爲めに門を

皓禪師と東坡

杜ぢて客を謝せるを誤り傳へて物故せりといふものあるや。「平生得る所の毀譽殆んど皆な此の類」と達觀せるは其の修養の堂に入れるを見るべきにあらずや。

是より先き東坡、年少氣を負ふて京師に在るや、遍く天下の名僧智識を檢せんとし、偶ま玉泉の皓禪師を問ひ、自ら稱して天下の名僧を量るの秤と姓す、禪師大喝して曰く、一喝重きこと多少ぞと、坡、答ふること能はず、爾來、心を禪要に傾け。其の抗州に趣くや金山寺佛印了元禪師に參じ頗る造詣する所あり。東坡が靜中の修養は世路の艱難に遇ふて幾試練を經、其の黄州を發して廬山を過ぐるの頃に當りては其の詩、其の想と幾段の進境を見る。

悟境

彼の

廬山烟雨浙江潮。未到千般恨不消。到得還來無別事。廬山烟雨浙江潮。

といひて退步却來の妙趣を咏せる。其の西林寺壁に題して

横看成嶺側成峰。遠近高低各不同。不識廬山眞面目。只緣自在此山中

といひて風光明媚の中に罩まれたるをいへる、皆なこれ禪の悟境たり。

◎蘇東坡の修養

一夜、東林の總禪師を訪ひて無情說法の話を聽き、翌朝、馬に乘りて山水絶佳の所を過ぎ、豁然大悟していふ、

溪聲便是廣長舌。山色豈非清淨身。夜來八萬四千偈。今日如何擧似人。

彼れは實在の妙音を聽得し、天地の好景を看取したりしなり。其の詞章に於て凡俗を超絶せるもの豈に所由なからんや。

後、神宗崩じて哲宗立つに及で朝政一變、軾も亦召されて朝に入る、然かも黨爭まだやまず、長く此の詩人を容るゝ能はず。「上書得自便」、歸老湖山曲、躬耕二頃田、自種十年木」と、外補を請ふて抗州に知たり、これ十六年前、曾て通判たりし地。江山故國の如く、父老皆な相識、後召されて闕に趨き、在ること四日、復た出でゝ潁州に知たり。轉じて楊州の知となり。召されて闕に入りて禮部尙書に遷りしも一榮一枯、終に遠竄の身となる。頽齡衰殘の身を以て瘴癘の地に入り辛酸具さに嘗む、しかも身心安如たるものあり。以て其の修養を見るべきにあらずや、軻軻不遇は彼れの一生なり、而して能く堪え能く忍び、窮境にありて綽々たりしものは彼れの素養なり。臨終の時、門

人錢世雄、進んでいふ、先生平時の履踐、此に至て須らく着力すべしと、東坡いふ、着力すれば即ち差ふと語絶えて逝く。時に年五十有二。

一代の行實、仔細に之れを叙述したらんには吾等を指導するもの少からざるべしと雖も、今は唯だ其の大要を擧げて彼れが政に參しては剛直の臣となり、詞章に隱れて萬代の師たるの素深きを知らしめたるのみ、殊に其の双親に孝に弟妹に友なりしの一事は此の曠世の詩人が性行として忘るべからざるものたり。曾て畫工に命じて阿彌陀佛の像を描かしめ、父母の爲めに福を薦め、頌を作て

佛以大圓覺。充滿河沙界。我以顚倒想。出沒生死中。云何以一念。得往生淨土。我造無始業。本從一念生。既從一念生。還從一念滅。生滅々盡處。則我與佛同。如投水海中。如風中鼓橐。雖有大聖智。亦不能分別。願我先父母。與一切衆生。在所爲西方。所遇皆極樂。人々無量壽。無往亦無來。

といへるは一面修養の篤たらしむると共に他面に於て彼れが孝心を見るべく

◎文豪の修養

其の雨中、　に別るゝ詩に、

庭下梧桐樹。三年三見汝。前年適汝陰。見汝鳴秋雨。去年秋雨時。
我自廣陵歸。今年中山去。白首歸無期。客去莫歎息。主人亦是客。
對床定悠々。夜雨空蕭瑟。起折梧桐枝。贈汝千里行。歸來知健否
莫忘此時情

といへるに於て友情を見るべきにあらずや。其の

入峽喜巉巖。出峽愛平曠。吾心淡無累。過境即安暢

といへるは境に隨て境に變せられざる安立の胸地を示す。

江月照我心。江水洗我肝。端如徑寸珠。墮此白玉盤。我心本如此。
月滿江不湍。起舞者誰歟。莫作三人看。嶠南瘴毒地。有此江月寒。
乃知天壤間。何人不清安。貅頭有白酒。盎若白露傳。獨醉還獨醒
夜氣清漫々

といへるは修養の極致を謳へるものにして此の心境あつて彼の詞章を發す。

吾等は唯だ文豪としてのみ東坡を傳へんとするにあらず。彼れの全人格は皆なこれ吾等の活模樣たるものにあらずや。川北溫山の東坡外傳の序能く東坡の爲人を悉くす、掲げて以て東坡の人物を髣髴せしめん。

雲は天中に停て漠々として唯だ風焉に依る、東坡其れ雲の如きか。水は地中に行て滔々然として唯だ勢ひ是れ從ふ。東坡其れ水の如きか。稚子、雲を指して其の遠近廣袤を語る。至人水を鑑みて其の利害變化を說き以て遠と爲せば則ち遠く次て近と爲せば近し。次て利と爲せば則ち利。次て害と爲せば則ち害。其の廣袤變化、亦皆な稚子至人の心目に在り。其の行て巖岫を抱き流れて巖崖を繞るに當ては則ち愛翫すべきの極にして其の何の故たるを審にせず、東坡の學の文、浩然として博く、雜然として駁。荒々然として其の端倪を見ず、君子期するに宰卿の器を以てし、儒者許すに經緯の才を以てし、術士擬するに權謀の離を以てし佛氏待つに解脫の祖を以てす。道士醫人、書畫者流、咸な吾曹の師と謂はざるはなきなり。豈に其れ淡然無心測度すべからざる雲と水との如きを以てせざらんや。東坡、之を作て自ら云ふ猶ほ行雲流水の如しと、余謂ふ其の一世を擧げて亦行雲流水の如きか、然して雲能く雨を致し、水能く物を育む。均くこれ無窮に洽澤す。東坡の澤、何くに在る、曰く行雲のみ、流水のみ。

と、行雲流水、眞にこれ一代を品隲し了れりといふべし。

二　ゲーテの修養

十七世紀の末葉より十八世紀に跨れる獨逸の思想界は從來勢力を得來れる舊思想が汎く一般に布及すると共に、之れに慊焉たらざる新思想は漸やく頭を擡げ來り其の形式を爲さんと欲して未だ遂けず、混沌として捕捉すべからざる傾向を有したりき。舊來學苑の裡にのみ其の勢力を張り來りし舊學說舊信仰はライマールス、ニコライ、レッシング等の碩學に由りて一般の思想界に弘布傳播し以て一切を這裡に包容せんと企てつゝあり。此傾向に從がひて此の時代を名くれば即ち啓蒙(アウフクレールンクス、ペリオデ)時代と名くべし。されど一般の學者は舊信仰舊知識を以ては終に自己の要求を滿足するに足らずとし、思想に過去を輕視し宗教に正統派を斥け、神秘迷信を振り捨てゝ偏に自己の知力を以て一切を解決せんと欲するの傾向あり、之に從がひてこの時代を名くれば光耀(エルロイヒツングス、ペリオデ)時代と稱すべきなり。

何れの時代にても新舊兩思想が各々思想界の一角を領して相下らざるは常に見る所なれどもこの時代に於ける獨逸は別に尙一個の思想の漲れるありき、所謂觀察考證を蔑知し歷史的發達を重んせす唯自己の情熱の發露するが儘に行爲し、偏見に熱狂したる混亂の思想なり、この時代をば又名けて暴風突進(ユッルム、ウント、ドラング)時代と云ふは蓋しこの謂なり。

佛蘭西に於て政治的に現はれし革新の思想は既に業に獨逸の思想界を支配し何等かの一新革命をば齎さゞるを得ざる時代なり、ゲーテの生れしは實にかゝる思想混雜の世紀にして、ゲーテ自ら又この時代の兒なりしなり。

ナポレオンは晩年のゲーテを見て謂へらく『如是の人世界にありや』と歎せしが如くゲーテは眞に近世に於ける最も偉大なる人物にして、其の燃ゆるが如き情熱、飽くを知らざる知識欲、史上稀に見るの大才なり、然れども彼れには堅實なる意志を缺きたりき。彼自らも又己の意志の堅からざるを認識し世を終る迄其の意を鍛練せんことを企てたり。彼の偉大なる所以の一半は實に此に存す、彼が常に其燃ゆるが如き情欲の爲に失敗したるにも係らず、後代に幾多の崇拜者を有する所以のものも又實に此に存す。

ゲーテの家庭

◉ゲーテの修養

ヨハン、ヴルフガング、ゲーテは一千七百四十九年八月二十四日フランクフルトの富有なる商賈の家に生れ、幼よりして詩才の凡ならざるを示したりしが、其の父たる人は嚴烈、冷淡の性情を有し眞理を愛し、廉直を重んずるの風あり、常に飢ゆるが如く知識を求むるの精神を有しぬ、ゲーテが死する迄眞理を探求せんとするの精神はこの父より惠まれし遺産なるなからんや。彼れの母は單純なる愛情を有し、快活誠實の氣風、情に感ずること多く、寧ろ放縱の傾向ありて演劇詼謔を好みき、ゲーテが燃ゆるが如き情熱は蓋しこの母よりも享けし性情と云はざるを得ず。而して彼の堅實なる意志は終に何人よりも之を享けざりき、加ふるに其家の豐かにして、未だ曾て涙に濕ひし麵麭を喰ひし事なく、窮乏と艱難とは終生嘗めしことなく、反抗の氣風克己の美德は之を學ぶに由なかりしなり。唯一個自然の寵兒として氣宇曠朗風采瀟洒たる貴子として生ひ育ちぬ。ゲーテが強き意志を有せざりし原因は實に艱難の試練を受けざりしにあり。然れども若しゲーテにして自己が堅實なる意志を有せざることを自覺せず、唯徒らに情緒と知識とにのみ其身を任せたりしならんには思ふに彼は唯一個の情熱ある詩人として僅かにバイロン一輩の徒と驅驅するに止まりしならんか。

智識的要求

人誰れか生れながらにして圓滿なる性情を有する者ぞ、唯自己の缺けたるを認識して之を修養せんとし、有するを助成して之を圓滿ならしめんと欲する人こそ大なる人格の域には到達するを得るなれ。而して其の缺けたるを補はんが爲に修生焦慮し、足らへるを充實せしめんが爲めに一生を努力に費せしことゲーテの如きは蓋し稀なりと云はざるを得ず。

彼れが飽くことなき知識の要求は已に垂髫の頃よりして現はれ未だ八歲に至らざる頃、日耳曼、佛蘭西、伊太利の國語を知り希臘羅甸の古文辭をも敎へられ、千七百五十五年にはリスボンの大震災を聽き、全智全能にてましますす天地の創造主にして保護者たる神は何故に義者と不義者とを共に殺し玉ふぞと疑ひ、フリードリッヒの奇蹟を耳にしては世界の正義とは何ぞと疑ひ初めたりき。十二歲の頃よりして彼は數學、繪畫、音樂を學ぶと共に、英語、猶太日耳曼語、希伯來語をも讀み譯し得る程に達したりき。感激し易く擺動

◉文豪の修養

◎ゲーテの修養

し易き彼が天性は絶えず。外界の刺激に由りて心理的發展を遂げつゝありしなれど末だ彼は當時の所謂混亂の思想には多く觸るゝ所なくスランクフルトの窓の帳深く移り行く思潮を觀しに止まれり。

ゲーテ十六の秋フランクフルトを去りライプチヒ大學に入りホフラート、ベーメに就きて哲學法理を學ぶに至り、終に混亂せる思想の渦中に入ると共に天眞の情感は火の如くに彼を焦し暫らくにして『予は神と世界とを敎授の知れる如くに知に至れり而して論理は終に立往生せり』と放言して講座に出です、校長ホフラート、ルドウキツヒに管せられたる醫學生の會合に出席しつゝありき、然れども移り易き彼は之にも甘んせず或はベーメ夫人に近づき、酒肆シエンカップの家に會して文學の徒と談し、アナ、カタリナを戀し、エーセルに從がひて繪畫を學び、『ラオコーン論』を喜びてはドレスデンに古名匠の作を見んが爲に赴き、ストックに就きて彫刻を學びぬ、されど彼は終に之に甘んずるを　とせざりき。彼は時代の暴風突進の渦中に入り來り憂鬱偏固にして變り易き性情をして一層其度を強めしめ麥酒を痛飲し珈琲を好み、放

肆不品行を敢てし僅かに其鬱を愈さんとせり。

果然其の放肆は罰せられたり、千七百六十八年の夏一夜咯血して隣室の朋友を呼びて救を乞ひ漸やく落命の苦を免れたれど此時に發したる頸上の腫物は久しく癒えず褥中に在りて煩悶する所頗る多くゲーテが所謂怪想的鬱憂症に陷ちたり。彼の友ランゲルはこの時ゲーテに日耳曼古文辭書を贈ると共に聖書を讀むべきを諭したりき。彼は朋友の忠言により熱誠を以て聖書を耽讀することゝ數回、これにより偉大なる印象をば與へられき、彼れ曰く

予は聖書を愛好し尊敬す、そは予が道德の修養は實に此書に仮すべければなり

と。彼が神秘論者に反對の意を表しつゝ尙ほ自然論者にも同情を有せす、信仰乏しけれど一面懷疑を恐れたるは是が爲なり。

◎文豪の修養

彼をして道德的修養に入らしめし第一の因緣は實に疾病と聖書となりき。彼が知識欲は年と共に發達し健康僅かに恢復すると共に煉金の術を學び、再び法學を修めんが爲にシユトラスブルヒに赴き此處にてヘルデルヘに遇ふ

煩悶

自殺觀

て啓發せらるゝ事頗る多く、國民的の境地より世民的市民に移り行く新時期の興起を助成せんが爲に其の力を盡すへきを敎えられ難解苦澁の書をも尙自ら之を明らめしめられたり。されど一度ゲーテの胸中に胎せし怪想的鬱憂症は其の根頗る深く、はては自殺して其の苦を免れんと欲し、濶刄の短劍を夜中褥中に抱き、燈を滅せんと欲する前必らず之を室より脫して視、靜かに尖端を胸にあて、寸又寸、之を胸中に突き込まば如何ならんと思ひし事一再に止まらざりき。されどゲーテはかゝる苦悶に裡に在りながら尙歇み難き知識欲に驅られ古今東西の自殺論及び其方法を尋ねて之を批判するの餘裕と矛盾とを有しぬ。而して彼が斯く自殺を夢想し思索せしは寧ろ詩的努力なりと思ひしが爲にして、かゝる見地より自殺の感想を蒐集すること約二年。『自殺は畢竟精神の偉大と自由とを求むべき道に非ず、自殺は之を求めて終に失ひし者』と云へる解決に到過せり、一面より云はゞ彼は自殺する程の意志の力を有せざりしには非るか。

ゲーテが情感的時代の作物にはかの有名なる『若きヱルテルのわづらひ』（ライデン、デス、ユンゲン、ヱルテルス）

ヴイマルの新居

あり、この書の主人公ヱルテルは暴風突進の時代に生れし情感の兒にして毫も意志の力を有せざるゲーテ自身なり、シユトラスブルヒに於て博士の學位を受けし後も尙彼は何によりて身を立てんかに惑ひ、ライン河畔に於て小刀を河中に投して以て其の運命を占はんとせしが如き、一として彼が意志に弱きを證せざるなし。而して彼はかゝる鬱憂の時代にありても尙ほ情事を捨てず、至る所情人を求むること恰かも飢るが如かりき。

ゲーテが第二の修養はヴイマルの新居と伊太利亞旅行にあり、サアルの河イルムの谿、物舊りし古城のたゝずまひ淸麗繪の如きヴイマルの自然は情感の詩人をして最後の床を發見せしめ光榮ある後半世をこゝに送らしめたりき、されど、ゲーテは此處に來りても尙情火の迸しるを禁ずるを能はず、ゲーテ一生の瑕瑾たる行爲をさへ行ひて憚らざりしのみならず、ヴイマル王庭の豪奢風流に身を沒し日夜饗宴に列して三鞭酒と詼謔とを恣にせり、然れども彼はかゝる歡樂の境に身を安きつゝ一面には觀察と經驗の眼を以て植物發育の過程を探り、骨格を學び腮骨を發見し顯微鏡によりて類同（グライシエン）の研究を勉め以て

◉ゲーテの修養

後年科學界發現者の素地を爲すを捨てざりき。

無謀墮落の生活はヴイマルに住すると年多きに從がひて漸く良心の苛責を受け、暗膽たる情慾に眼昏み、人生の半は何等の善をも成さずして費されたるを覺り、夢想の世界を逃れて現實の世界に入らんとするの煩悶は刻々として堪え難く、『神よ更に我を助け給へ、而して我に光明を與へ給へ』と叫ぶに至り、思想正に一變せんとするの傾向を示したりき。

伊太利の旅行

久しく翹望せし伊太利亞の旅行はゲーテの所謂新誕生なりき。桂の綠深きチーブルの市、霧立ち罩むるカンパニヤノの野。傳奇藝術の興趣に滿てる古への羅馬は、道永久の市に近づくにつれて何人をも之を化せずんば止まざりけん、ヴイマル於て其嫩芽を萌せし彼の自覺は終に羅馬に於て熟せり、彼が羅馬を去りし時ヴイマル侯に呈せし書に云はく、『この旅行の目的は予をして無用の人物とならしめし形骸上、道德上の不安より蟬脫し、眞の美術に對する渴仰を愈さんとてなりき、而して前者は未だ全からずと雖ども後者は成效せり』と。

シルレル

伊太利亞より還り來りしゲーテは當年のエルテルが隻影を止めず、『イフイゲニア』を公にして、古典女詩人が意思の弱かりしに萬斛の同情を濺ぐと共に、科學の研讃益〻精緻の域に達し、假令ニユートンに對する辨駁は其前提に於て誤謬に陷りたりとは雖とも、『植物化醇論』は近世植物學の曙光となり、『色學』は後素家に偉大なる刺激を與へ、解剖學上に腮骨の發見より自然の一致を歸納しあらゆる不同をば最高の一致に皈着せしめんと企畫せりき。

この頃よりして彼はシルレルを友とし常に相砥礪して同一詩神に仕え、史上稀に見る美はしき交情を結び、彼が最後の傑作『ファウスト』の如きも若しシルレルの刺激なかりしならんには或は終に之を完結せざりしやも知るべからざるなり。彼が史上に不朽の名を殘せし一半の名譽は蓋しシルレルとの交情に由れるには非るか。即ち彼が最後の修養は實にシルレルとの交際にありき。

◉文豪の修養

醜つて思ふにゲーテ一生の事業は彼自分の言の如く生命の源泉、眞理の礎を發見體得せんとするの努力にあり、而して屢〻論せし如く彼は堅實なる意

ファウスト

志を有せず、恰かも白雲の徂徠するが如く一より他に移り、他を去つて又他に赴き、而も至る所に滿足を得ざりしとファウストの如かりしなり、彼の詩を以て長き彼が懺悔と云へるを眞とすれば、ファウストが眞理の探求に渾身を捧げて終に之を得ず、惡魔に身を任せ、肉慾を恣にし、希臘に遊んで一たびヘレナを得、又之を失ひ、某王侯に請ふて不毛の地を得、荒蕪を開墾して以て地上に一新都市を現出せしめんとせしは、疑ひもなく堅實なる意志に由りて以て地上に己が足跡を印さんと欲したる彼が努力なり。ファウストは惡魔の爲に地を呪はれ幾度か墾いて幾度か破壞せられしはゲーテが幾度か暗黑なる情慾の爲に纖弱なる意志を破壞せられたるを詠したるものには非ざるか。ゲーテは終に死に至る迄滿足せざりき、彼が最後の一言『もつと明くせよ』(mehr licht)と叫びしは、眞理の追求、意志の充實未だ全からずして早く既に世を謝するを悔ひし深刻なる恨ならざらんや。

されどゲーテが偉大は死する迄強固なる意志を充實せんとして自ら棄てざりし所にあり、もつと生きたいと歎きたる眞摯の悔恨にあり。

三　松尾芭蕉の修養

風雅

天地も風雅なり、萬象も風雅なり、此の風雅これ佛祖の肝膽なり、衆生の心性なり、濁海の寶筏なり、闇夜の明燈なり。此の風雅を捨てゝ能く道に達するものなしと看破して正風の眼を開き、宇宙の妙を十七字に諷び、天地の玄を短詩に單みしものは我が松尾芭蕉なり。彼れの先は平宗清に出で、後に伊賀柘植の庄に居る。幼にして藤堂新七郎に仕へ、共に北村季吟の門に遊び て國學を修む、新七郎、蟬吟子と號し俳句に長じ、主從其の交兄弟の如し、不幸、吟子、世を早くしければ、芭蕉遺髮を奉じて高野山に上り浮世の無常を觀じてより遁世の志止み難く、寛文六年の秋の末、隣の門柱に

出家

雲とへだつ友かや雁の生別れ

草庵

の一句を遺して家を出で塵世を棄て、洒脫なる文學生活に入り、身を雲水に托し東都に下りては深川に草庵を結び、一株の芭蕉にふりそゝぐ秋の雨のさびしさに、

芭蕉野分して盥に雨をきく夜かな

と吟じ、自ら老荘の閑寂を喜び、夙に西行の山家集を愛して其の骨髄を傳へんとし、又臨濟寺佛頂禪師に參じて心要を問ひ、造詣する所頗る深く、天和三年災に遇ふて其の庵を燒き、こゝに行脚を思ひたちて甲斐駿河に遊び、再び深川に歸りて復た芭蕉を植え、自ら風羅坊といひ桃青と號しければ世は皆な芭蕉の名を呼びぬ、貞享三年、初夏山吹の色うつらふ頃、深川の庵に禪定靜かに觀念を凝せし時、囘地一聲、水に入る蛙に大悟の眼を開き

古池や蛙飛ひ込む水の音

豁然として悟得する所あり、緣を離れ、機を離れ、心を忘れ、境を忘れ、風雅萬年の祖を爲しぬ。世に古池眞傳なるものあり、其の間の消息を揣摩して

六祖五兵衞、佛頂和尙に從ひて芭蕉の艸庵を訪ふ、六祖先づ入て「如何なるかこれ閑庭艸木中の佛法、」桃青答へて曰く、「菜々大底は大、小底は小、」と、長老內に入ていふ、「近日何の有る所ぞ」桃青答へて曰く、「雨過ぎて青苔を洗ふ」と、長老、又問ふ、「如何なるか是れ青苔未生前、春雨未來前の佛法」と、時に池邊の蛙、飛んで水中に入る、桃青聲に應じていふ、

蛙飛び込む水の音

と、佛頂曰く「珍重珍重」と、直に筆紙を取て

本身無相。我是什麼物。若未會、爲汝等諸人下一句子。看看。一心法界。

法界一心

といへり。眞僞遽かに判ずべからざれど、芭蕉の俳句の禪的修養に出るものあるや疑ふべからず。不立文字、敎外別傳、

吾は集作らん爲めに句をよまず。

と人に語りたるは蓋し彼れが本來の面目ならん。曾て笈の小文を作て其の立脚點を示していふ。

百骸九竅の中に物あり、假りに名けて風羅坊といふ、誠にうすものゝ風にやぶれ易からん事を云ふにやあらむ、かれ狂句を好む事久し、終に生涯のかりごとゝなす、或る時は倦て放擲せん事を思ひ、ある時は進んで人に勝たむことをほこり、是非胸中にたゝかふて是が爲に身安からず、暫く身を

◎松尾芭蕉の修養

立てん事を願へども是が爲めにさへられ、暫く學んで愚をさとらんとを思へども是が爲めに破られ、終に無能無藝にして只此一筋につながる、西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の畫に於ける、利休が茶に於ける、其貫道するものは一なり、しかも風雅に於けるもの造化に從ひて四時を友とす、見る所、花にあらずといふ事なし、おもふ所月にあらずといふ事なし、像花にあらざる時は夷狄にひとし、心花にあらざる時は鳥獣にひとし、夷狄を出で鳥獣を離れて造化にしたがひ造化にかへれとなり

旅人と我が名呼ばれん初時雨

人生は一大旅行、彼れは人生を旅行に送りて自然と同化し造化に從ひ、造化にかへるを以て本願としたりしなり、「隨齋諧話」に、

芭蕉の句の中、初心には聞き得ざるもの少からず、之れにさま〴〵の論辯を設けて解なすものあれども多く其の意に歸當せず、唯だ自ら勤めて深く味ひぬれば多年の後、自然に豁然として眼の開くることあり、

といへるこれ芭蕉の句を見るの眼と爲すべきか。

芭蕉の生涯は行脚にありて、山水に天地の妙趣を窺ひ、羈旅に人情の機微を探り、芋洗ふ女に西行ならばと思ひ、時雨に宗祇の宿と吟じて其の昔を偲び、或は淡月冷かに峯に懸るに「馬に寢て殘夢月遠し茶の烟」と吟じ、或は山路來て何やらゆかしき菫艸に想を寄せ、時に兵どもの夢の跡を吊ひ、時に我も發句の心ありといひ、吟行千里、脚、草鞋を脫せず、

秋十とせ却て江戸をさす故郷

旅行は實に彼れが修養の一法にして人情の迂餘曲折も、自然の妙致も皆な彼れが詞藻の中に入りしなり。「蕉門頭陀物語」に

或る人翁に物がたりけるは、貴坊は宗祇の迹を逐ひ、雲に別れ、水に伴ひ、いづちを宿と定め玉はず、行脚何れの日おかしかりし、翁ほゝ笑みて、旅せぬ人はさこそおもはめ、行脚は苦樂を翼とす、けふは晴れて笠清く、けふは時雨て袖おもき綴子の夜着、草の枕引かはり、移ひもしてこそおかしけれ、奥の細道降つゞきて泥にとりつく杖を力に曾良は痩れて行くべくもあらず、吾は笠嶋を見んと云ふ、同行も又腹あしき事あり、況や煤拂に居

◎文藻の修養

どころを追はれ、あるは琴をかきならして情なき日もあるぞとよ、旅は彌生の末つかた卯月半ばこそ氣色立て覺ゆ、ひとゝせ大和路に分け入りて負へるものに道を伴られ、永き日影をたどりくらし何がしの宿からむとするに、むら鳥、森にいそぎ、野山にいたう霞たる畵によく似たる、ふと行あいたゝずむ、かなたの垣に藪藤の覺束なくも、咲かゝりたるを見て、

くたびれて宿かるころや藤の花

かく云ふ句のうかみたる我ながら二なくおぼゆ、これらのけしき旅の榮花とも云はむと云はれけるとぞ

元祿七年、足を伊賀に止めて、こゝに數多俳諧の催あり。其の年九月八日より支考惟然などいへる門下と共に奈良に行脚し、其の歸途難波の津に病の床に臥し、御堂前なる花屋仁左衞門宅にて醫療せられしも、身は次第に衰へて大事と見えけれど、行脚の心は尙ほ已まず、想ひは朝烟暮雨の中にさまよいて、

旅に寢て夢は枯野をかけめぐる

終爲

昨の發句今の辭世

と吟じ、自ら未だ妄執の斷じ得ざるを慨き、此の後は唯だ生前の俳諧を忘れじとのみ思ひて、只管心を磨き想を練りつゝ、五十一を一期として寂然、苔下の客となりぬ。

きのふの發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世、我れ生涯言ひ捨てし句に一句として辭世ならざるはなし、若し我が辭世は如何にと問ふ人あらば、此の年頃いひすてし句いづれなりとも申したまはれかし、諸法從來常示寂滅相、これ釋尊の辭世にして一代の佛教、此の二句より外はなし。古池や蛙飛び込む水の音、此の句に我一風を興せしより初めて辭世なり、其の後、百千の句を吐くに此の意ならざるはなし、こゝを以て句の辭世ならざるはなし、

これ彼れが辭世ならぬ辭世なり、門人棺を擁して木曾殿を背中合せに粟津の義仲寺に葬る、風淸く月白きの夜、千古の詩人は靜かに八景の勝を眺めつゝ琵琶湖畔に眠りぬ。

彼れ飄逸を以て生を終りしと雖も、其の道を重んずること深く、僅に十七

字の短句を以て己が道とし行蹟聖賢の風あり、曾て門人其角と共に某侯の招に應じ、候、烟艸を忌むが故に芭蕉も亦終日之れを口にせず、其角之れを嘲りていふ「我が道は風雅を事とし權貴に阿らざるを能とす、今日御前に於て烟艸を喫せざるは聊か阿るに類せずや」と芭蕉、叱していふ「俳諧は小技なりといへども、以て道とするに足る、予が今日御前に於て烟艸を喫せざりしは禮あり、阿るにあらず。禮を忘れて放逸を事とするは斯道の賊なり」と彼れや此の如く嚴格、しかも亦清濁併呑の大量あり、人あり問ふ「見てよき書は何ならん」と翁曰く

見であしき書とてはなし、儒佛より圖書其の外謠曲、淨瑠璃本をも見るべし。

と、又問ふ「他門の人と交りて惡しからずや」、答ふ

苦しからず、交りて惡しきてのは博奕とぬす人なり

と、內に守る所あり何を讀んでか不可ならん、我れ失はざる所あり、誰と交つてか誑惑せられん、以て其の平生の修養を知るに足らむや。

第四章　哲人の修養

一　王陽明の性行

文人の性格は其の作品に於て流露し、哲人の性格は其の學說に於て髣髴すべし、古來學者の所說、仔細に其の趣向する所を點檢すれば何れも其の人の性格を示さゞるはなく、儒教に孔子の面影あり、佛教に釋迦の面影あり、近くはカント、ヘーゲル、ショーペンハウエルに至るまで嚴肅なる人格は嚴肅なる學風となり、奇警なる談論は奇警の人によりて出づ。殊に知行合一の說を唱へ實踐躬行を旨としたる王陽明に於て其の然るを見る。

陽明、名は守仁、字は伯安、明の憲宗の成化八年を以、浙江省紹興府の餘姚に生る、地は素と佳勝を以て稱せられ、家は世々豪傑の士に富む、陽明此の地と此の人に養はれ、幼にして詩賦に達し、十一歲の時、早く、

山近月遠覺月小　便道此山大於月

◉王陽明の性行

若人有眼大如天　還見山小月更濶

と、詞章としての價値は暫く云はず。其の唯心的傾向は業に已に崩したるにあらずや。蛇は一寸にして人を呑む、曾て塾師に問ふていふ。天下何事か以て一等の事と爲すべきと、師答へていふ。嵬科高第、親を顯はし名を揚ぐる乃ち一等の人なりと、陽明疑ふていふ、嵬科高第の人は時々これあり、豈に人間第一流の事ならんやと、師曰く、然らば汝何を以て一等の人と爲すと、陽明いふ、唯だ書を讀んで聖賢を學ぶは方に第一等のことならんと、氣宇頗る高し、年十四にして心を兵法に留め自らいふ。

天下一等の事

儒者は兵を知らざるを患ふ、孔子曰く文事あるものに必らず武備ありと、方今區々章句の儒、平時叨りに富貴を竊み、詞章を以て太平を粉飾するも事に臨み、變に遇はゞ手を束て策略なし、此れ通儒の羞づる所なり、と、其の庸儒と見を異にするを見るべし。

兵を學ぶ

弘治元年、陽明年十七、夫人諸氏を迎ふ、其の結婚の日、飄然として山中に入り、龐眉皓首の一道者の靜坐せるに會し、談論佳境に入りて歸るを忘れ、

結婚を忘る

道者と共に閉目對坐して日暮るゝを知らず、寢食ともに忘る、何んぞ況んや華燭のことをや。家人、新郎の在らざるに驚き百方搜索して天明に至りて之れを得たりといふの一事は如何に豪邁跌宕にして尋常細壘の外にありしを知るべし。二十一歲越に在りて浙江の鄕試に擧げられ、二十八歲京に在りて進士に進み詔に應じて邊務八事を奏す、其の要に曰く、一に材を蓄へて以て急に備へ、二に短を捨てゝ長を用ひ、三に師を簡びて費を省き、四に田に屯して食を足し、五に法を行ふて威を扼ひ、六に恩を敷きて怒を激し、七に小を捐てて大を全ふし八に守を嚴にして弊に乘ずべし」と邊境守備に對する言極めて剴切以て其の時事洞察の能を見るべし年を經て州務主事を授けられ、年三十一、病を以て越に歸り、室を會稽宛委山の一巨石中の罅に築き、名けて陽明洞といひ、靜思默想に耽り、世塵に超越して恬憺を守らんとするに意ありしが、唯だ祖母と父とを想ふて忘るゝ能はず、煩悶之れを久うし、忽ち語て曰く

邊務八事

◉哲人の修養

此の念慾提に生ず、此の念にして去るべくんば種姓を斷滅せん。

◉王陽の性行

と、此に初めて聖賢の學を正とし、大に之れを弘通せんとせり。「行狀記」にいふ。

初め任俠に溺れ、再び騎射に溺れ、三び詞章に溺れ、四び神仙に溺れ、五び佛氏に溺れ、正德丙寅の始、聖賢の學に歸正す

と、以て其の前半生を見るべきか。陽明既に斯道を恢弘せんとす、然かも僅に子弟を集めて之れを敎養するのみを以て滿足せず、進んで實務に當りて抱負を當世に施さんとす、これ其の腐儒と撰を異にする所。偶ま武宗帝、即位して權臣劉瑾等威福を弄し、政を擅にし、正德元年南京の科道官、戴銑等上疏して之れを彈劾するや、劉瑾帝に誣奏して戴銑等を獄に下し暴橫甚し、時に陽明、兵部主事に官せり、時事を目擊して慷慨措く能はず、諫疏を上りて之れを救はんとす瑾大に怒り陽明を杖ちて之れを獄に下し、尋で貴州龍場の驛丞に貶し、人を遣はして途に之れを害せんとす、陽明之れを覺り江に投せりと托言して潛かに商船に乘じて遁れ。江上颶風に逢ひて、夜、閶江に漂ひ岸に上りて山徑を迷り、數里にして漸く一寺を覓め宿を乞ふも寺僧納れず止

むなく野廟に入り香案に倚りて臥す、其の夜、群虎、廟を達て環行して大に吼ゆ、陽明、知らざるが如く熟眠曉に至る。寺僧以て虎に斃るとし、其の屍を收めんとして陽明の眠れるを見、驚て曰く公は常人にあらず、然らずんば焉ぞ虎穴に入て傷かざるものあらんやと、陽明、泚然として知らず問ふ虎穴何くにある僧いふ、公の眠る所の下これ虎穴なりと、僧之れを寺に迎へて朝餐を供す、寺に一異人あり、こは之れ二十年前、結婚の夜相見たるの道者なり、諭して龍場に歸らしむ、陽明、一絶を殿壁に題していふ。

險夷原不滯胸中　何異浮雲過大空
夜靜海濤三萬里　月明飛錫下天風

心胸快濶天地も亦寬し。此の一絶實にこれ吾等が區々險夷に齷齪たるを訓誡するものにあらずや。

龍場の地、萬山叢蘜の中に在り、瘴癘の氣、人を襲ふ、陽明此に窮居すること二年、身又肺を疾む。自ら以爲らく得喪榮辱頗る能く超脫するも、生死の一關未だ超脫する能はずと石を鑿ちて槨と爲し、端坐、靜一を守り、自

◉哲人の修養

◉王陽明の性行

らいふ、吾、唯だ命を俟たんのみと、悠々自適、心を死生に繫がず、密かに思ふ、聖人をして若し此の艱難に居らしむれば必らず吾よりも進めるものあらん。吾まだ格物致知の工夫に於て到らざるものありと、念々工夫を忘れず、一夜夢寐恍惚の間、人と語るが如くにして。覺えず呼躍し、從僕等倶に驚き覺む、之れより胸中瀟々として豁然大悟の境に入り、良知の二字を拈得して其の根原を探り、彼の德性の知を棄てゝ見聞の知を逐ふものは支流を取て未だ江海に達せざるもの、彼の孔子の心の欲する所に從ふて矩を踰えざるは方に之れ良知の全用を得たるなり。既に之れを得る又何ぞ窮通榮辱死生の見あつて其の間に參らんや。聖人の道は我が性中にあり、理を心外に求むるもの大に誤れりと、陽明此に於て木を伐り室を搆へて龍岡書院といひ土民幷に流寓の人を敎化す。

陽明の學說に就ては既に第一篇に於て說きたる如く、致良知を旨とし知行合一の主義に立ち、實際的修養として殊に靜坐を勸めて放心を收むるの工夫とす、正德五年、劉瑾罪せられて瑾の爲めに殃を被る者皆な免され。陽明も

亦擧げられて江西廬陵縣知事に移され。又入覲して南京刑部四川主事となり後、累遷して正德十一年都察院左僉都御史に任じ、漳寇の鎭撫を命ぜられ、策畫宜しきを得。終に提督軍務として兵を率ゐて之れに臨み、大に之れを破り、都察院右副御史に上り、十四年、寧王宸濠兵を擧げて叛き大兵を以て安慶を圍み、將に南京を衝かんとするや、陽明、兵を督して宸濠の居城南昌を攻めて之れを陷れ、功を以て南京兵部尚書に陞叙せらる。民を治めては二函を置き標榜して

求通民情　願聞己過

といひ自ら正うして民を諭し、其の學ぶ所を實行して治蹟大に擧り、賊を討ちては神機妙算、陣中尙ほ講學を廢せず、吶喊聲裡、自若として致良知の工夫を怠らず、曾て書を人に與へて云ふ、

山中の賊は破り易く、心中の賊は破り難し、區々鼠竊を剪除する。何ぞ異とするに足らむ。若し諸賢、心腹の寇を掃蕩し、以て廓清の功を收めば此れ誠に丈夫不世出の偉蹟なり。

◉哲人の修養

◎王陽明の性行

と、區々鼠竊を驅除する陽明に於て至難の事にあらず心中の賊を蕩平して胸境廓塵なし。盛名の下猜忌出で、猜忌の下に讒誣あり、陽明の盛名終に群小の讒誣に遇ふ。しかも既に心中の賊を蕩平するもの豈に此の如きのことに介意せんや、詩を賦して云ふ。

君不見東家老翁防虎患。虎夜入室咿其頭。西家兒童不識虎。執竿驅虎如驅牛。痴人懲噎遂廢食。愚者畏溺先自投。人生達命自灑落。憂讒避毀徒啾々。

と。世宗帝、位に即くに及び特進光祿太夫柱國新建伯に封ぜらる、當時、詩あり。

百戰歸來白髮新。青山從此作閒人。

蜂蠆尚憶衝蠻軍。雲起猶疑見虜塵。

島嶼微茫滄海春。桃花爛熳武陵春。

而今始信還丹訣。却笑當年識未眞。

と、六年、命を奉じて廣西國州の亂を平げ、七年又八寨斷峽の猺賊を征定し、同年十一月、病に罹り骸骨を乞ふて歸省の途に上り、南安に於て卒す、年五

十七。一代の行實悉く收めて以て吾等が修養の箴たらざるはなく其の教化長へに啓發の資たらざるなし。

倫彦式なるものあり、曾て書を以て教を陽明に請ふて曰く、

一　學に靜根なし。

二　物に感じて動き易し。

三　事に處して悔多し。

之れを如何すべき。

と、陽明答へていふ。

汝が三言の病も亦互に相連關す、唯だ學を以て別に靜根を求むるが故に物に感じて其の動き易きを懼る。物に感じて動き易きを懼るゝが故に事に處して後悔多し。故に君子靜を學ぶや。常に覺めて未だ曾て無ならざるあり。故に常に百事に應じて而かも常に寂然たり。心は一なるのみ。靜は其の體なり。而して復た別に靜根を求むるは是れ其の體を撓めて其の用を動かすものなり。而して其の動き易きを懼るゝは是れ其の用を

◎哲人の修養

◎スピノーザの性行

廢するなり。故に靜を求むるの心は卽ち動なり、動を惡むの心は靜に非るなり。是れ之れを動も亦動き、靜も亦動き送迎起伏して無窮に相迎ふと謂ふ。故に正理に循ふ之を靜といひ、邪欲に從ふ、之れを動といふなり。と、動靜不二、靜を求めて却て動く。吾等も亦此の三言の病に罹れるにあらずや。之れを心に求めて知行をして一ならしむこれ斯學の要なり。

二、スピノーザの性行

猶太人

地上に天國の出現を夢みたりし猶太の民は、モーゼを去ると幾千年、一たび不世出の英才耶蘇を出せしもエルサレムの王國は地に現はれず、國なく王者なく、空しく神の榮光を望みつゝ地の四方に假庵の地を占めて來るべき王國を翹望するもの幾世紀、西班牙に在りし猶太の民は第十一世紀の半より第十四世紀の末つかた迄は、此等人民のうちにモーゼス、マイモンデスの如き哲人出で、文物譁然として見るべきものありけるが、猶敎信仰の徒を迫害するの傾向漸やくこの時代より歐州に崩しそめ、西班牙の地を逐はるゝ事となりぬ。されど信心の赤誠迫害に屈せざるの徒爲政者の眼を匿れ、秘かに猶太敎を信じ、或は迫害の手を逃れん手段として名ばかりの基敎に身を列ね、心には深く舊來の信仰を崇ぶものあり、さればかの西班牙、葡萄牙に行はれし宗旨改には猶敎信仰の嫌疑に捕はれて苛しき審問を享け敎に殉して焚殺せらるゝもの年毎に幾千人、忍苦試練の生活を送りたりき。

和蘭移住

此の時に當りて新たに西班牙の羈絆を脫したりし和蘭は民に信敎の自由を許し異敎を迫害すること尠かりしものから、西葡兩國にありて是が桎梏に苦める者の、此處に移住する陸續として相踵ぎ敎堂を立て、學校を起し自己の社會を現出して自由に故國の敎を奉ずることを得、癒れたる敎條宗義を復興し銳意してモーゼの古に還らんとせり。

◎哲人の修養

和蘭移住の始まりし後四十年、新たに此處に鄕國を得たるアムステルダムの猶太人の中に一異才こそ生れたれ、バルフ、デ、エスピノーザ卽ち是なり、久しく信敎の抑壓を受けし猶太人が和蘭に移りて初めて信敎の自由を得た

◎スピノーザの性行

りしが年久しき壓迫は其宗教的信念を變じ猶太人にして基教の信仰を有する者さへ生ずるに至れり、されば和蘭に移りてよりは猶太人の間に於て宗教的偏見を生じ、教義宗旨を嚴重にし之に戻る者を嚴罰に處すると共に、教會を破門して其者を呪咀し猶太人の間に居る事を禁じたりき。ウリエル、ダ、コスタと云へる學者が經典を解釋するに新法を用ひたりとて放逐せられ、一たび悔改めて彼等の間に歸りしも、終に世を厭ひて自殺し果てしが如き、當時如何に彼等猶太人間に宗教的偏見の洽ねかりしを知るに足るべし、エスピノーザの生れしは實にかゝる時代なり。

幼時

スピノーザの父は敬虔にして僞善を嫌ふ猶太氣質の人なりしが其子スピノーザは幼よりして儕輩に優れし學才を有し、當時猶太人間に其名高かりしモルテイラに就て經典の學を修めしが、穎脫せる才氣は未だ十五歲に達せざるに猶太人間に嘖々として傳はり、將來は高名なる經典學者として世に時めくべきを豫想せられたり。されどスピノーザは師に就きて猶太の經典を修むるに從ひ其の哲學的頭腦は漸やく舊約の教義に疑を挿み初め、疑は疑を生じ、師の

胸裡の疑團

說明は疑の大なると共に明晰を缺くに至りぬ。

スピノーザが汎く學術の蘊奥を極め胸裡に蟠れる疑團を氷解せしめんとするの希望は此時に起りしなり、かくて彼は當時學界の用語たる羅甸語を學ばんとせしが、同代の猶太人は少年をして羅甸語を知り、學術に潛心せしむるは畢竟我教に忠實ならぬ者を出さんとを恐れ、學校に於ても之を授けざりしを以て彼は秘かに醫士フハン、デン、エンデと云へる人を師として之を學びたり。

スピノーザはエンデに就きて羅甸語を學ぶと共に將來彼が哲學を組織するの要素たりしデーカルト及びチョルダノ、ブルーノーの著書に接せしのみならず、廣く學術上の知識を得、眼界を濶大にせしと少からざりき。猶太の狹隘なる思想中に喰鳴し胸中一點の疑惑を挿みしスピノーザがかゝる自由なる境地に至りしとて、漸やく猶太教に對する不滿を釀すに至れるは蓋し自然の事と云はざるを得ず。かゝりければ彼はこの頃よりして基教の一異端と目されしコレヂアン教徒と交りを結び儀禮經學に重きを措かず、專ら信念の

◎猶太人の修養

◉スピノーザの性行

發露を尊び、心を潔ふする者と伍して純朴なる信心を樂しみたり。

猶太教に對する心中の不滿足は彼れを驅りてコレヂアン教徒と交らはしめ、漸やく教會に遠ざかり猶太教徒としては其の行爲甚だ儀に合はざる程となりぬ。スピノーザが猶太教徒としての信仰の動けるを見たる彼れの朋友二人は其の胸中の秘を探らんが爲に一日彼を訪れて自分も宗教上の疑惑あるが如くに粧ひ、質疑を呈して彼を誘ひたり、スピノーザは自己の高潔なる態度より胸裡に在る自己の意見を吐露して曰く、靈魂は即ち生氣にして永劫に滅せざる物に非ず、聖經の教ふる所に由れば神は形像を人に示し何等かの形體を有し玉ふに似たりと雖も、かの天使は姿を有せず、天使が人の眼に映ずるは蓋し吾人が幽靈を見るに同じと語りたり。之れを聽きし友人は果してスピノーザが異端を唱ふるを確かめ得たるを以て、自ら證人として彼を教會に訴へたり。

信仰の動搖

偏固なる猶太教徒はスピノーザが異端を稱ふるを聞きて驚くと大方ならず、直に之を教會に喚びて責問を試むと雖ども、一度斯くと信じたるスピノーザは幾多の脅嚇威壓にも屈するとなく堂々として自説を骨張し一歩も教會に讓るを肯んせず。

將來猶太教徒の精華なるべしと信ぜられたるスピノーザが異端を稱ふるに至りしは猶太人に對しては頗る傷心の事と謂はざるべからず、今彼を放逐するは易しと雖も彼を失ふは蓋し自家の寶玉を自ら泥土に委するに同しきを奈何、こゝに於て彼等は一策を案じ、スピノーザに對し年毎に一千フロリンの年金を與ふべければ、口を封じて異端を稱ふるなからんとを請ひ唯籍を猶太教徒に掛けしめ、以て自家の精粹を維持せんとせり。されどスピノーザは金錢を以て自己の信念を拋つを肯んせず、頑として之を斥けたり。

黄金前に在り

スピノーザが斯くも自説を固守するを見たる猶太教徒は尋常の手段を以てしは到底彼の意志を飜す能はざるを知り、一日黄昏スピノーザの街路を過ぐるを待ちて之を刺さんとせり。幸にしてスピノーザは人の近づくを覺つて禍難の及べるを知り僅かに身を以て逃るゝを得たりしが、其の纏へる外套は匕首の爲めに破れたりき。

白刃頭上に下る

◉哲人の修養

◉スピノーザの性行

スピノーザ二十三歳の七月二十三日猶太の教會は終に彼を目して異端者と
し嚴肅なる放逐の式を教會に行ひて之を呪咀せり、其の宣告の文に曰く、

放逐式

ヨシュアがエリコを呪ひし呪咀、エリザがかの青年を呪ひし呪咀、律法に記されたる諸の呪咀を以て之を咀ふ、晝となく夜となく彼は咀はれてあれ、眠れる時も醒たる時も咀はれてあれ、戸外にある時も家にある時も咀はれてあれ、願はくは主よ永劫彼を宥し給ふこと勿れ、律法の書にある呪咀を以て咀はれし彼に對して神は憤怒し玉ふべし。主は彼の名を抹殺し、律法の書にある昊天の呪咀を以て彼をイスラエルの民より放ひ、彼を永久の沈淪に亡ぼし給へ。

神を信ずる者には榮光其上に在れ。何人も彼と交ること勿れ、恩惠を施すこと勿れ、同じ家に住む勿れ、六尺以内彼に近づく勿れ、彼の著はせる書を讀む勿れ。と。

放逐の宣告未だ行はれざりし前、スピノーザは暗殺の危難に臨めること數數ありしを以て僅かに身を以てアムステルダムを逃れ出で、市の近郊に隱れ棲みけるが、放逐呪咀の報に接せし時、彼れは靜かに曰へらく

我は同胞をして心痛ましむるに忍びず、口を噤みて語るとなかりしも、今は我をして終に此に至らしむ。

と、スピノーザの態度の高潔なることこの一語を以ても知るに難からず。

流離困頓

猶太人將來の柱石と讃えられ、富貴も權勢も手に唾して得べかりし秀才は今や孤影悄然たる天涯放浪の客となり了りぬ。嚮昔の思出多き家を離れ、流離困憊の橫はれる異鄕の地に形影相弔ふ孤獨さへあるに、況してや彼が身は歐洲大陸至る所に酷遇せらるゝ猶太人なりしをや。されどスピノーザは困苦艱難の故を以て身を終ふる迄我が信ずる所を枉げざりき、彼れは自己の信念に殉せし男らしき孤獨を甘んせしなり。

生活の簡易

アムステルダムの近郊コレデアン派の人に身を寄せしスピノーザは猶太人の常として一身を支ふる足る程の職業を知りたるを以て眼鏡磨きを營みて其口を糊し、而も心を潛めてデーカルトの哲學を研究して得る所頗る多く、次でリンスブルヒに移り住むに及び一代の名著「エーテイカ」及び「デ、インテレクトス、エメンダチオーネ」に筆を執り始めたり。

千六百七十年スピノーザはハーグに移り住み一繪師の二階を賃し一日に費す所僅に拾錢に過ぎざる程に儉素なる生活を爲しつゝ研究を續けしが其年「トラクタートス、ポリテイコス」を版行し匿名にて之を世に公にせり、この書の

◉哲人の修養

◎スピノーザの性行

論ずる所は哲學と宗教との全く相異れるものなるを唱道し、以て信教自由に及べるものにして、同代の神學者及哲學者に對する晴天の霹靂たるを免れざりしを以て、彼等の間に顔物議を醸し終に翌年の宗教會議に於て異端邪説なりと斷せられ政府は之が印行を禁じたり、されど其書の高評は教會、政府の手を以ても之を壓抑することを能はず、幾多の秘密出版を促がし種々の名稱の下に之を流布すること底止する所を知らず。從つて之を辯駁せんが爲にスピノーザを誹謗するの徒も亦甚だ多く、「汝蟲よ、塵芥よ」と罵るものさへありき。

スピノーザが名聲漸やく四方に聞ゆるに及び、ハイデルベルヒ大學はカルル、ルドウキッヒ侯を以てスピノーザを聘せんとし信教の自由は誓つて之を許すべく唯諸有宗教を誹るが如き事なからんことを條件とし教授たらんことを請ひたり。されどスピノーザは其の條件の範圍明かならざると研究の時を失はんことを憂へて之に應ぜざりき。研究と儉素とを以て生命とせるスピノーザには教授の職は終に半文錢の値なかりしなり。彼れは常に階上の一室に籠居し人に接せず戸外を踏まず、疲るれば階下に來りて主人夫婦と雜談しつ

つ喫煙するを樂みとし、時として蜘蛛の子を捕へて之を鬪はしめ之を見るを以て唯一の快樂としたりしのみにて何等の樂欲をも爲すことなく儉素なる生活を送りしなり。されば彼れが死後に遺したりしものは數冊の書籍、寢臺卓各一つ、及び磨き終らざる數個の眼鏡玉ありしのみ。曾てハーグ市の一吏員彼の衣服の甚だ粗なるを見て同情の念に堪えず一襲の衣を贈りしを見ても彼が如何に儉素なりしかを知るに難からず。

彼れは生前曾て一度も慍れる色を他に示したる事なく、若し怒色の顔に現れんとする時は走つて我が室に入り心を靜めて再たび出て來るを常とせり。蓋し他に求むる所あれば不滿の念を生じ之を求めて得ざる憤怒の念あるべけれど、恬淡にして寡欲、自己の道德觀を體現せんことを努めしスピノーザは決して他と爭ふ事を敢てせざりき、曾て彼の友シモン、フリースが死後其の遺産を彼に讓らんとせしも彼は固く辭して之を受けず、フリースの兄弟に與へて毫も悔ゆる色なく自らは僅かに三百フロリンの年金を以て足れりとせり。

又、ヤン、デ、ウイットはスピノーザ一生中些少の年金を與ふるの約を結び

◎哲人の修養

◉スピノーザの性行

しが、ウイット死するに及んで其の後嗣は之を與ふるを肯んせりしかど、彼は毫も之を爭はず、自己の權利を主張することさへせざりき。かゝる高潔なる態度を見たる後嗣は深く感ずる所あり、再たび年金を贈りたりと傳ふ。

轗軻不遇にして一代の名著『エティカ』をも上梓することを能はざりしスピノーザは千六百七十四五年の交よりして痼疾の肺患漸やく篤く、僅かに素朴なる生活によりて健康を保ち來りしが、七十七年に至りて病頗る進み、この年二月二十日一人の友に侍かれて溘然として彼が所謂宇宙の本源たる神に皈しぬ。年四十四。

スピノーザ逝いて一百年、諸の學者よりは惜むべき無神論者として指彈されつゝありしが獨逸にレッシング出づるに及び初めて彼が眞價を認められ、ゲーテ、ノワリス、シュライエルマッヘルを俟ちて百代に動かざる彼が美所を歐洲の思想界に影響せしめたりき。

實にスピノーザは地にて詛はれ、天にて嘉せられべき絶世の篤學者にして、全く知己を百年に俟ちしものと云はざるを得ず、

第五章　修養の教訓

一　偉人の片影

上來吾等は聖賢、英雄、文豪哲人等が性行と其の修養とを瞥見して此に其の模範を得たり。

されど往古來今、吾等が準木とし規矩とすべき偉人の行跡は此の如きに止まらず、其の片言隻語も一擧一動も皆な吾等を啓發す、史を讀んで之れを求むれば滿眸悉く花爛熳たり、左に抄出するものは僅に其の二三にして擧ぐ所も亦片影に過ぎずと雖も、仔細に其行實を翫味せんか興趣轉た深きものあらむ。

伊達政宗、大閤秀吉より賜りたる名物の茶碗を弄し、誤て之れを膝下に落せる時、胸轟きければ、自ら思へらく、吾、五十四郡の太守として一個の茶碗何かあらん、かゝる器物の爲めに心胸騷然たるは修養まだ足らざるなりと

◉修養の教訓

て終に其の茶碗を砕きて心膽を鍊養したりと。

加藤嘉明

加藤嘉明にも亦茶碗に關する逸話あり。近侍の士過ちて秘藏の茶碗十個の一を破る、士、罪を恐れて謝せしに、嘉明聊かも怒る色なく、殘りたる九個を持ち來れといふ。士、恐る〳〵之れを持ち行きしに此の茶碗殘りあらん限りは汝の恐れを遺すべし、斯くするこそよけれとて皆な打ち砕きたりと、名將士を愛する概ね此の類。

柳澤淇園

柳澤里恭字は公美、淇園又玉桂と號し權太夫と稱せり、常に堪忍の二字に心を勞し其の著「雲萍雜志」の中に

或る人堪忍の二字を座右に記しおきて、常に之れを見た時はおのづから心に止りて、日用の心がけよろしといへるものあれど、堪忍は修行せざれば身に感せざる故に堪へざることをよく忍ぶこと爲り難し。予も堪忍を守れることを思ふに乘合の舟ほど事になるゝに便よきことはなしと思へば、僕一人を連れて京より夜舟にて浪華へ遊び、又浪花よりも又舟にて京へのぼりつゝひたぶるに舟に泊れるを樂しみとして堪忍の稽古せり、人の世にあることと舟に乘り合ひて泊りし折を思ひ出れば、いかほどの不自由なりとも、忍ぶに堪へざることなかるべし。たとひ疊一枚の家に住むとも乘合舟には優るべし。夜泊のせつなき膝を折りて足を縮め、人の足を枕として押し合ひ睡らんとすればゆすり起され、少しまどろむとおもへば鼾に目さめて起臥共に心に任せざるは、たとひ一夜といへども生涯も尚ほひとしかるべし

これ修養の實驗なり。

伊藤仁齋

鴻儒伊藤仁齋帷を京都堀川に下して諸生に教へ、就て學ぶ者頗る多し、門人兩三輩甚だ酒色に沈湎し、常に仁齋を欺きて遊巷に出入せしが、日を經るに從がひて漸やく師を欺くの辭なきに窮し、一夕仁齋の前に至りて曰く、我が母久しく病に臥して命旦夕に在り、今夕小閑を得て看護したしと乞ふ、仁齋之を聞て母儀の病氣とあらば早速に行かれ樣子を伺がひ申さるべしと許しければ、彼は大に喜び、遊巷に走り沈醉して皈りたるに、夜既に二更に近きに、仁齋は手燭を携へ、袴を正ふし威儀を整へ玄關に在りて彼の皈るを待ち、「いかにや皈宅の遲きによりて殊の外案じ侍るなり、母儀にはいかゞの樣子に

て有るか、段々快方にて有るか」と問ふ、薄児この状を見て懺悔の情甚しく落涙して實を告げ其の罪を謝し篤實なる書生となりしといふ。仁齋が行狀は身を以て彼を化せし自業の說法ありしなり。

山鹿素行

德川武士道の龜鑑たる赤穗四十七士、は多く山鹿素行の學風に養はる、素行も亦錬心の修養に於て頗る得る所ありし人なり。彼れ幕府の譴責を受けて北條安房守の邸に招かるゝや、奇禍其の身に及ぶこと知るも、然かも泰然自若

快く食事を認め候て、行水仕、定めて只事に有之間敷と存じ立ち乍ら遺書相調へ殘置候、尤も死罪被仰付候はゞ公儀へ一通差上可相果、これ又た相認め、令閤中候、此外五六ケ所へ小輪相調へ、態と老母へ不申遣、宗三寺へ參詣仕、下人成程はぶき、若黨兩人召連れ馬上にて參候云々。

門前に人馬多く相見え候、唯今何方へか打立候樣子に御座候、此體拙者もし不參候はゞ、則ち拙宅へ押寄せ、御ふみつぶし可有之樣子と相見申候、私事は刀を下人に渡し、座敷へ上り申候て、笑ひながら申候は、如何樣の事御座や、御門前殊の外、人多く御座候と申候て奥へ通り申候、暫く候て北條殿被出候て逢申候、北條殿被申候は不入書物作り候故、淺野內匠頭所へ御預被成候、是より直ちに彼地へ參候間何にても宿へ用向にても候はゞ可申遣と別して念頃に被申候、福島傳兵衞覗を持ち候て拙者傍へ參り申遣度事は傳兵衞可申由申候間、私北條殿へ向ひ申候は、忝く奉存候、乍然常に家を出候より跡に心を殘候事は無之樣に勤め罷在候間書置可申候事も無御座由申候云々。

水戸光圀

と以て其の爲人を見るべし。

水戸光圀薙髮して西山に隱れ深く北條時賴の芳躅を欽慕し海內を歷遊し以て遺賢を求め民苦を察す、一日某逆旅に憩ふに亭前に一双の屛風あり、屛上描くところ風韻生動着筆凡に非らず曾時之を賞せしが、顧みて侍者に云ふて曰く、この書蓋し土佐光信の畵く所、筆力凡に非す、されど松を畵いて雁を添ふの杜撰は忍ぶべからず、彼も又漫然塗抹するの尋常畵工のみと、この時西山公と同じく旅亭に憩ひおりし一旅人この畵を見て歎賞措かず、松樹に添ふるに雁を以てせし構想の妙なるを賞す、公之を聞いて自ら訝かしみ、出て旅人に其由を問ふ、旅人は西山公の士人なるを見て恐懼甚しく地に偃して罪を謝したれども公頻りに問ふて止まざる程に、旅人は容を正しふして曰く、我は一介の賈人繪の何たるやは知らずと雖ども、世人悉く松樹に配するに鶴

◎修業の教訓

◎偉人の片影

を以てするに關らず、將監古歌の意に倣ふてこの繪を作りたりと覺し、我が賞せしは蓋し是のみと、公再び其歌を問ふ、商賈は、冷泉帝の御製に

秋わたり春皈り行く雁がねも
はね休めせん函舘の松

とあるは是ありと答ふ、公之を聞きて慚愧措かず、彼を坐に延きて其姓名を問ひたりしに、當時驕奢を以て關所せられし淀屋辰五郎は實に彼なりき。公が一代に名君の名を恣にせし所以の者は微賤の輩をも捨てずして自己の足らざるを補ひし果と云はざるを得ず、人によりて其言を捨つべきにあらざるは蓋し是なり。

柳生宗矩と澤庵禪師に就きては世、奇話を傳ふること多し。其の相遇ふの初めに於て傳ふる所のもの左の如し。

一日、柳生家の門前に托鉢僧來り、聲高く御師範役などとは嗚滸がましと嘲るを門番聞き咎め、かくと告げゝれば宗矩、其の僧を呼び入れよとて座敷に通し、出家の身として劍道を心得たりと見えて先刻よりの嘲弄心憎し、

さては何流を修行せられしやといふ、澤庵笑て、貴殿は天下の御師範役なる由なれど劍術は下手なり、劍を使ふに何の流義かあるべき。流儀〳〵といふは末のことにて其の極意にはあらず、宗矩も此の僧さても何ほどの力ありてかくは云ふやらん、立會見んとて直に道場に入り、木刀を以て立ち上り、貴僧は何を持ちたまふやといふに、禅は出家の身なれば持つべきものとてはなし、速に何れよりなりと打ち込まれよと中央に突立たるに、いざとて打ち掛らんとせしに、泰然として大山の如きに流石の宗矩も木刀を下に置きて、誠に貴僧は智德優れし聖者にこそ。物に動せぬ心法こそ敎へたまへとてこれより禪に歸して心要を尋ねし

と。澤庵、「不動智神妙錄」を著はして心膽の棟養を說く其の語皆な採て修養の箴とすべし。

◎修養の敎訓

靈魂不滅論を著はして其の名を歐洲の哲學界に轟かしめたるサムエル、ドリユーは幼よりして種々の惡僻あり十歲の頃より惡童の首魁となりて果實を盜み、漸やく長ずるに及びては常に竊盜密賣を事とし全く浮浪極惡に身を投じ

酒色の慾に沈湎せしが更に長ずるに至りて海賊とならんと欲したりしに、不慮の厄難に襲はれ漸やく人に敎はれしが、此時より飜然として悔悟の意を生じ、舊來の惡行を離れ、造靴工となり、靴を造りつゝ學業に身を委ね、終には疱厨を書齋とし、妻の針箱を机となし、群兒が戯るゝ陋室の裡にありて靜かに思を凝して一代の大著を成し遂げき、彼晩年に至りて當時を追想して曰く、『讀むに從がひて自己の愚昧を覺り、愚昧を悟るに從がひて精力益々進み、瞬刻も讀書を廢せず、閑暇なき職業に身を委ぬるを以て食事中にも常に五六頁を讀まざりしことなかりき』と、かくて無賴婬蕩の少年は歐州の哲學に一大著述を貢獻することを得たるなり。

ウイリヤムヒツト

弱冠にして大英國宰相の印綬を帶びしウイリヤム、ピットは寧ろ剛復と思はるゝ程の膽力を有したりしが、或時總理大臣たる者に要する性質如何と云へる議論出で、或者は知識こそと論じ、或者は雄辯なりと云ひ、或者は勞苦と甲論し乙駁するを靜かに聞き居たるピットは徐ろに曰く、總理大臣に要する資格は曰く忍耐なり。と生來未だ曾て面の色を更へし事なきピットにしてこの語あり、

アーノルド

英國近代の敎育家、詩人マシウ、アーノルドの父として其名高きドクトル、アールドは、渾身殆んど此れ敎育の權化として尊奉せらるゝ人なるが、或時稍魯鈍なる一生徒を敎へしが、餘りに理解の鈍きをもどかしく思ひ、辭色厲しく其生徒に語りしに、生徒は博士を見上げつゝ、「先生よ、左樣厲しく仰せらるゝな、私は一生懸命になりて努めをるに」と言ひぬ、この語を聞きし博士は我克己力の足らざるを思ひ來りて慚悔の心潮の如く寄せ來り、暫時は默然として想に耽けたりと云ふ、後年博士人に語りて「予は一生この生徒の語と顏色とを忘るゝこと能はず」と云へり、蓋し常に機會を捉へて自己を修養せんと欲する者の好箴にあらざらんや。

チヤールスダーウイン

現代思想界の根底とも云ふべき進化論を大成せしチヤルス、ダーウキンは非凡の精力を有したりしことは疑なけれど、彼は甚だ纖弱なる體質にて殆んど四十年間一日として健康の愉快を知らざりし程の苦境にありて至難の事業を大成する克己力を有したりき、或時人ありて彼に餘り過度に勉強せば健康を

害することあらんと忠告せしに彼は『少しにても弱味を見すれば病氣に付けこまる』と答へ、毫も之を苦慮する色なかりきといふ。

スコット

英國の歴史小説の泰斗サー、ウォルター、スコット文筆一代の精華として含英咀華の妙時人を樂ましめ、アボッツフォルトに壯大なる邸宅を構へ郡の長官に擧げられ、華麗なる生活を送りたりしが、書肆コンランステープル社倒るゝに及んで彼が契約以外の十萬磅は法律上當然彼が頭上に墮ち來れり。時人は之を見てスコット蓋し倒れると思ひ、債主も又之を要求するの意なかりけれど、義務を感ずるを深き彼はスコットと時間とは如何なる强敵にも對すべしと云ひて敢然として之に當り、家具を賣り、財産を債主に付し、中風症に惱みつつ一意に創作に努力すること四年、洗ふが如き赤貧の裡にありて終に三分の二の負債を償するを得たり。病漸やく篤く最早創作に堪えざりし頃、一日家の前なる芝生に椅子を据ゑ、靜かに日光に曝されつゝありしが、突然椅子より立ち『是は怠惰なり、余を書齋に拉れて行き、文臺の鍵を持來れ』と云ひしを以て、侍者はスコットを書齋に拉れ行き、紙を展べ筆を握らしめしも終に書くこと能はず、涙は瀧の如く頰を流れ落ちぬ、是より久しからずして、彼は死したるなり。スコットが自己の體面を尊び、義務を盡さんとするの意は蓋し彼が描きし武士道の精髓にして、理由なき恩惠を受くるは索遜人の恥ぶ能はざる屈辱と思ひたりしなればなり。

フッス

獨逸のマルチン、ルーテルが宗教改革を遂げし前、其の前驅として現はれしボヘミヤのヨハネス、フッスの生涯ばかり悲壯敢爲なるは無し、フッスの生れしは一千三百七十三年、幼にして父を失ひ母と共に田舍に住居せしがプラーグ大學に入るに及び其の學識儕輩を抽んで年未だ三十に滿たざるに早く同大學の學長の榮職を荷ふに至れり。この頃英國のジョン、ウイクリッフはオクスフォードにありて羅馬法皇の暴橫と教會の虛僞とを攻擊せしがフッスも又この頃よりしてプラーグ市にあるベッレヘム教會の傳道を掌り、熱烈に民人に信仰を鼓吹し教會の橫恣、僧徒の驕奢を責むるや漸やく激しきを加へ來れり、これを聞きし法皇朝はフッスをウイクリッフの徒なりとし令をボヘミヤ教會に下してフッスが說教を禁せんとせしが、人民の彼に對する信仰は一片の命

令を以ては抑止すること能はず、フッスも又自説のウイクリッフと異れるを主張して容易に法皇の命に從はざりき。ボヘミヤの國會及び王室はこの衝突を見て深く憂慮し二者の間に立ちて調停の勞を執り一時漸く息むことを得たりけれど一千四百十二年法王ヨハン十二世ネープルス市を攻めんが爲に十字軍を召集し此軍に從ふ者は地獄の罪を許すべしと云へる法令は再びフッスの義憤を起さしめ、又もや此を責むるに至れり、

法王はこゝに於てコンスタンチノープル市に大會議を開きフッスを喚問して之を罪せんとせり、フッスは若し喚問に應すれば生命を殞すに至るを能く知りをりしも、深く心に決する所あり身を以て敎に殉せんが爲に單身審問の法廷に入りぬ、果然、第一回の喚問を以て幽閉せられ、七ケ月間獄裡に投せられき。會議はフッスをして異端を改めしめんとて、諸有啊嚇威壓を試みしが、フッスは毅然として之を斥け、若し余が言にして聖書に差ふ所あらば喜んで自說を捨つべし、法皇、敎會、大會議は終に我を何するものぞ、聖書の尊嚴の爲とならば我喜んで生命を拋つべしと。大會議は終にフッスに火刑を宣しぬ。

一千四百十五年七月四日鐵鎖を以て身を縛せられたるフッスは靜かに刑場に入りて曰く、「基督は予が爲に重荷を負ひ給ひし故に予も喜んで主の爲に鐵鎖を負ふべし」と。この時法皇の使者は馬を驅りて刑場に來り法王の命を傳へ、若し彼にして異端を捨てんには之を赦すべしと云ひしに、彼は徐ろに使者を顧みて「予の說く所は基督の福音なり、何の捨つべき異端あらんや」と云ひぬ。

大火焰の裡に投せられしフッスは大聲に叫んで曰く「今日汝等はボヘミヤの鵞を燒くとも、其灰の裡より生るゝ白鳥は殺すを得ざるなり」と、蓋しフッスが身を殺せし其灰の裡より生れしルーテルは實に殺すを得ざりし白鳥なりけらし、フッス死せし時年四十二なりき。

金龍の一鱗以て其の全身を窺ひ得べしとせば、如上列擧したる五六の小話も亦以て其の爲人を洞觀し、以て吾等が修養の範たらしむるに力あらんか。讀書の際、常の這般の談片に注意せば無限の敎訓は其の中に存して儒夫も亦

志を立てしむるもの少からじ。

二　金言と詩歌

金言の力

心を修養に止めて萬象に接すれば萬象悉く我が資たり、思ひを錬心に寄せて書を讀めば、萬巻皆な我が料たらざるはなし。殊に古聖が機に觸れ時に應じて心情を吐露せし片言隻句は一種の權威となりて吾等を啓發し指導すること多く、其の語簡にして意深く、千古に亘りて變せざる金言に至りては眞に錬心の指針、修養の師友たり、曾て金言三十一則を輯めて日間工夫の資とし、一日一言を思ふて一月に及び、復た更に其の初めに還り、一日一言之れを反覆して一年の修養とし、年々元旦自ら去歳の短を想ふて之れを矯むるの言を求め、新に三十一則を作り、歳毎に怠るなからんことを期す。

修養の課程

一

春至り時和ければ花尚ほ一段の好色を鋪き、鳥且つ幾句の好音を囀ず。士君子幸に頭角を列ね復た温飽に遇ひ、好言を立て好事を行ふことを思はざれば是れ世に在るごと百年なりと雖も恰も未だ生きざる一日に似たり

（菜根譚）

二

鐵を點じて化して金玉と成すことは易く、人を勸めて是非を除却することは難し、

（楚石錄）

三

君子は青天に對して懼れ、雷電を聞て驚かず、平地を履んで恐れ、風波を涉て疑はず

（櫟談）

四

この世は愛によりて自由となり、事業によりて偉大となる

（ゲーテ）

五

衣垢れて洗はず、器缺けて補はざれば人に對して猶ほ慙色あり、行垢れて洗はず德缺けて補はず、天に對して豈に愧心なからんや、

（櫟談）

◎修養の教訓　四九七

六　誠は以て萬僞を消すべく、一敬を以て千邪に敵するに足る、（曹靖公修）

七　一忍以て百勇を支ふべく一靜以て百動を制すべし、（泉）

八　喜く動くものは九天の上に動き、善く潜むものは九地の下に潜む。（孫子）

九　君子は人の美をなして人の惡をなさず、小人は之れに反す。（孔子）

十　富と貴とは是れ人の欲する所なり、其の道を以てせずして之を得ば處らず（孔子）

十一　德義を守り、宗教を信ずる善人たれ、死の床に横はるに當りては、これほどの滿足は他になきに非ずや（スコット）

十二　心大なれば百物皆な心に通ず、心小なれば則ち百物皆な病む。（張子）

十三　人を責むるの心を以て己を責むれば則ち道を盡す。（同上）

十四　知足の者は貧と雖も、而かも富めり（遺敎經）

十五　寧ろ利刀を以て其の腹を貫かるゝとも愼んで惡を履むなかれ、寧ろ須臾を戴きて其の身を壓死すとも愼みて惡を爲すなかれ（忍辱經）

十六　獅子、兎を捉ふる猶ほ象を捉ふるが如くす、これ象を捉ふる猶ほ兎を捉ふる如くなる所以なり、（石天基）

十七

貴人の前には窮を言ふこと莫れ。彼れ將に我其の鳶を求めりとなさん。富人の前には貧をいふこと莫れ。彼れ將に我其の禍を求めりとなさん。窮や貧や皆な命なり、人に告げて脫すべきものにあらず。（筆嚕）

十八　君子は己の長を以て人の短を露すべからず、天地の間長短齊しからざるは物の自然なり蟲爾の身豈に能く事々に長ぜんや（同上）

十九　己より大なる敵はなし。（西諺）

二十　多く事を爲すは易く一事を永續するは難し。（ベン、ジョンソン）

二十一　才は猶ほ劍の如し、善く之れを用ふれば則ち以て身を衞るに足り、善く之れを用ひざれば以て身を殺すに足る（言志錄）

二十二

春風を以て人に接し秋霜を以て自ら肅む、（同上）

二十三　欲を除くは外物の上にあらず、一念の微の上にあり。（春日潛庵）

二十四　天地の間に己れ一人生きて居ると思ふべし、天を師とし神明を友とすれば外人に賴る心なし。（中江藤樹）

二十五　人須らく蓋世の氣あるべし。（朱子）

二十六　堪へ難きに堪へたることは想ひ起す毎に愉快あり、（セネカ）

二十七　大石、道に横はるあらば懦者は見て行路の障碍とし、勇者は以て進歩の梯とせむ（カーライル）

二十八

◎修養の教訓

大人は畏れざるべからず、大人を畏れざれば則ち放逸の心なし。小民も亦畏れざるべからず、小民を畏れざれば則ち豪横の名なし。（菜根譚）

二十九

人の外に道なく、道の外に人なし、人を以て人の道を行ふ。何の知り難く行ひ難きことか之れあらむ。（伊藤仁齋）

三十

善き思想も之を行はざれば善き夢と異る所なし（エマーソン）

三十一

内に省み疚しからざれば何をか憂へ何をか懼れん。（孔子）

聖賢の模倣

彼の基督教徒が基督の模倣と題して基督の金言三百六十五則を集めて日々反省の資に供し、佛教徒が佛陀の模倣と題して佛陀の聖誡三百六十五則を以て修養の資とする皆な此の類なり、其の尊ぶ所に從ひ道とする所に據り以て啓發指導の料とせば撓ゆめる心を勵し、亂るゝ心を收むるに於て其の功少からざるものあらむ。試に躊躇逡巡、意志まだ定らざる時、

事を決するは癰を斷つが如し多少の痛苦は忍ばざるべからず。

の語を誦せんか、我が心此に定るものあるにあらざるなきか、詩歌に於ては餘韻の嫋々たるものあるが故に一咏の中に多大の眞理を含み、一絕の中に無量の敎訓を罩み、人情の歸趣を察し、心靈の慰安を求むるに於て痛切なるもの多し。彼の

城北仲家翁、渠家多酒肉。仲翁婦死日、弔客滿堂屋。
仲翁自身亡、亦無一人哭。喫他盃鬱者。何太冷心腹（寒山）

といへるは人情の至微にして、

千江有水千江月、（禪語）
竹樹不妨流水過、（禪語）
千峰勢到岳邊止、（禪語）
青松不礙人來往、（禪語）
雲開月色家々白、（禪語）
等閑識得東風面、（卿頌集）

◎修養の敎訓

萬里無雲萬里天。（中峰語錄）
山高豈礙白雲飛（點鐵集）
萬派聲歸海上消（朱文公）
野水無心自去留
春過山光處々紅、
萬紫千紅總是春

等の句は吾等が慰安の資たり。若し夫れ

和歌

そこひなき淵やはさわぐ山川の
淺き瀬にこそあだ波はたて　（古歌）

弓矢とる身にしあらねど一すぢに
立てし心の末はかはらじ　（月照）

直からぬ心をかくす我が影も
いとはで照らす月ぞはづかし　（太田道灌）

たれも見よ滿ればやがてかく月の
いざよひの空や人の世の中　（武田信玄）

人問はゞ鬼は居ぬともいふべきに
こゝろの問はゞ何と答へん　（矢部駿河）

俳句

等の如き三十一文字、

くちなしの花にも恥ぢよ行々子　（麥林）

蝶〳〵や花の上下あらそはず　（千山）

みのるほど頭の下がる稻穗かな　（失名）

ある智惠をかくしかくして遲櫻　（希國）

衣更みづから織らぬ罪深し　（すて）

うきことになれて雪下の嫁菜かな　（同　）

等の十七字、文藝としての價値は暫らく措き、修養の資として恰好のものにあらずや。

頃者「暗室燈」なる一書を得、中に文昌帝慾海廻狂寶訓なるものあり、青年客氣まだ定らざるの徒、之れを戒むるに於て頗る切實なるを覺ゆ、慾火心頭に起るの時、朗誦一番悚然として一服清涼劑を服するの感あらん。

孽海茫々たり首惡色慾に如くは無く塵寰擾々たり犯し易きは惟邪淫あり拔山蓋世の雄此に坐して身を亡ぼし國を喪ひ、繡口錦心の士茲に因りて節を敗り名を墮す、始は茫念の差たり遂に畢世贖ふ莫きを致す何乃ち淫風日熾んにして天理淪亡するや當に悲むべく當に憾むべきの行を以て反て計を得たりとなし而して衆怒衆賤の事恬として羞を知らず。淫詞を刊し麗色を談し、目は道左の嬌姿に注き腹は簾中の窈窕に斷ゆ、或は貞節、或は淑德、嘉すべく敬すべきを遂に計誘して完行なか

らしめ、若くは婢女、若くは僕妾憫むべく憐むべきに竟に勢逼して終身を玷すを致し、既に親族をして羞を含ましめ、猶子孫をして垢を蒙らしむ、總て心昏く氣濁り、賢遠ざかり佞親しむに由る、豈知らんや天地容し難く神人震怒し、或は妻女酬償し、或は子孫受報す、絶嗣の墳墓は好色の狂徒にあらざるなく、妓女の祖宗は盡く是れ貧花の浪子なり、富むべき者は玉樓に籍を削られ貴かるべき者も金榜に名を除かる、笞杖徒流大辟、生ては五等の刑に遭で地獄餓飢畜生、沒しては三途の苦を受く從前の恩愛此に至つて空と成り、昔日の風流而も今安にか在る、其後以て從ふなからんよりは蚤く思ふて犯す勿きに胡れぞ、譜で青年の佳士、黄卷の名流に勸む覺悟の心を發し色覽の障を破らん事を、芙蓉の白面は帶肉の髑髏に過ぎず、美艷の紅妝乃ち是れ殺人の利刃なり、縱ひ花の如く玉の如きの貌に對しても常に姉の如く妹の如き心を存して未行者は失足を防ぐべく已行者は務めて早く回頭せよ、更に望む、展轉流通し迭に相化導し必らず在々齊しく覺路に歸し人々共に迷津を出しめば首惡既に除き萬邪自ら消し靈臺滯りなく世榮遠きに垂れん矣。

吾等の修養を資すべきもの常に上來說述したる金言並に詩歌文章のみにあらず。俚言俚謠も亦採て以て錬心の料に供すべし。進んで他を導くに於ては其の平易明晰なるに於ては難解の金言に優ること多し。栂尾の高辨が北條泰時に對して唯だ七字の訣あり、「あるべきやうに」とし、德川家康が五字の訣

あり七字の訣ありとて「上を見な」「身のほどを知れ」といへる如き通俗にして解し易く、然かも此の五字此の七字受用無盡なり。

出る杭は打れる、（才名の下猜忌あり）

佛の顏も三度、（恩に狎れば過生ず）

論より證據、（空論は實驗に如かず）

人の口には戸が閉てられぬ、（世評け避難し）

我が身捻つて人の痛さを知れ、（己れの欲せざる所之れを人に施すなかれ）

の如き語、卑近なりと雖も、言ふ所は道義の奧底なり、其の他「負けるが勝」「損して得とれ」等の警句も亦吾等を訓誡す、砂中に金あり、要は採て以て我れを資するにあり。大鹽中齋いふ、

人の嘉言善行は則ち吾が心中の善、人の醜言惡行は亦吾が心中の惡なり。

この故に聖人は之れを外視する能はざるなり。

と。一切の嘉言善行、醜言惡行皆な以て吾等が師たり　善を見れは傚はんことを思ひ、惡を見ては避けんことを思ふ。かくて見る所、皆な修養の資たり、

聞く所、悉く錬心の料たるべしと雖も、其の初めに於ては殊に其の啓發すべきものを採て坐右の箴とするに於て功多きを見る。

三　達人の至言

大道二門なく達者其の途を異にす。人、聖能少し、僅に一藝一能に達するの人も叩て其の源底を探れば此處にも吾等が修養の範たるべき妙境を看取するに難からず。

圍碁の名手

圍碁の名手中川龜三郎、曾て人の其の局に對する心得を聞くに答へて

細工人の心得

勝たうと思ふて打てば石に無理が出來、負けまいと思へば我があつてこれ又無理になる。唯が一目一目無理のないやうに無理のないやうに心得て全體が無理のないやうに打てればそれでよいのだ

といひしは吾等が日常生活を一局の中に道破せるの感あり。

土屋東雨は横谷宗珉と共に鑿工の達人なり、曾て書を人に與へて

何事も伎倆を好く致し度候はゝ心のむさきことなきやうに是れ第一なり、細工人は一生貧なるものと心得、常に心のよごれぬやうにいたし度く候、

これ藝術家の擧を服膺すべきの言にあらずや、名人といひ上手と云はるゝ人皆な此の淨念あつて以て其の妙を盡くす。

圓山應擧は繪畫を以て著はるゝ、彼れ其の技に心を勞する深く、念々技を離れず其の後進を戒めし文にいふ。

凡そ後素は物象を寫し精神を傳ふる術たるを以て其の精理に通せざれは名手たる能はず（中略）古人曰く其の事を叙するは紀傳にして其の形を載せて千歳に傳ふるは畫圖なり、故に新物を寫し新圖を作るにあらずんば畫と稱するに足らず。豪放磊落、氣韵生動の如きは寫形純熟して後ち自ら會意す、故に初學の者は運筆に稽鈍なりとも構想は當に精神を費すべし、

と、彼れは實物寫生に心を注ぎ唯だ古圖を模寫して得々たるものを評して「李杜の詩」或は人麿赤人の和歌を題して己が肺肝より出でたると爲し、人を欺き世を瞞するの徒にして痛歎に堪へざるなり

人の精粕を嘗めて

◎逸　の至言

得たるもの三省すべきことなり。世に處して事に攝す、亦須く這般の覺悟あるを要す。

敵打ち

平賀源内は近世の奇士なり。其の言往々人を啓發す、曾て大石良雄を評して

大石内藏助も遊里に在りては面白きこと世の風流の士とさのみ異ることなし。只敵を討つことを忘れざるなり。主親の敵をのみ敵と思ふべからず。人々志す所、家業藝術、皆な敵坐臥に之れを思へば敵を討つことありと知るべし。奥に乘じて酒を呑むとも、酒に乘じて奥を呑むことなかれ。

と、人々皆な敵あり。其の敵豈に遠きにあらんや。念々之れを討たんことを計れば心胸終に快濶の域に入らんか。

堪能の人

近松門左工門が竹本義太夫の畫像に替して「堪能の人のいひしは、節に節あり、節に節なし、言葉に節あり、言葉に節なし、語るに語りて、節に語るなと、此の六句のものは得易きやうにて得難きのみ、よく得たる人は誰ぞや」と題したるは不即不離の妙境に臻達したるを賞したるの言にして、此の節に節あり、節に節なし、語るに語りて節に語らざるはこれ實に萬藝の金箴處世の羅針なり。

藝

名匠の苦心

清元延壽翁は歌曲を以て知らる、彼れ藝術の心得を示して

藝といふものは能く演らうと思ふと、アテ氣がさして往けないから、何時でも無難にやるつもりで語れ

と、吾等は這般の至言に接する毎に野に隱れたる聖者の聲を聞くの感あり、一藝一能に達する豈に容易の業ならんや。書畫を以て名ある田能村直入は其の歩行するに當りて扇を手にし肱を張りて空に經劃して運筆の法を錬り、且つ歩し且つ學び、路人の嗤笑を顧みず。圓山應擧は途上畫景に遇ふ毎に足を止めて寫生を怠らさりしといひ、或る弓術の大家は行住坐臥弓法に心を勞し、一日雪に壓せられし窓前の竹の勃然として雪を排せしを見て其の極意を悟り、或る鍛工は德本行者の鐘を打つ呼吸に豁然として秘奥を得たりといふ類。皆な苦心慘憺の結果ならずんばあらず、曾て故人尾上菊五郎に關する左の逸話

◎修養の數節

◎達人の至言

を聞く、

過日尾上菊五郎の宅へ垢染みたる布子一貫ひらぐけノメリの疊附といふ拵へで勝手口に腰を屈めへエ誠に濟みませんが友達が間違へを仕やしてと跡は云はねど梨園社會にまだ弊の拔けぬ錢貰ひは毎度の事と何程か摑んで遣るを手も觸れずモシ楊枝や附木を持て來る婆さんじやあるめえし此位の家で己達が是んばかり堂なるものかと云ひながら臺所へ上り込みヲイ旦那に御目に懸りてへイヤサ親方に逢ひてへと五託の間にヲイ一服貸して呉ねへナニ火は持て居やすと袂からマッチを出し烟草を吸ひながら邊りを見廻はしいつも御繫昌でお愛度ムへやす抔云ふを梅幸(菊五郎を云ふ)は聞附け堂やら其場へ立出づる樣子ゆゑ今出ちやア往ません幾干か遣て返しますから最些と其方に、ナアニ留公錢は幾干でも遣て呉な、だが其形の拵らへと樣子を己に尠し見せて呉れ而してもつと何か云はした上で返してくれと言ひいひ這出し内の者の後へそつと廻つて袖の間より眞に覗いて居たよし

(歌舞伎新報)

名優苦心の跡歷々として見るべし。業に高下なし、吾等は其の職に忠實なるを喜ぶ。名を一代に絕するもの何の業か苦心修養の果にあらざらん。森田悟由禪師、關西に巡化し、一日横濱の豪商平沼專藏と滊車の一室に會し、談、偶ま蓄財の事に及ぶ、專藏いふ、「我もと叩き大工なりしが性甚だ酒を嗜み、日々三升を傾けたりしを以て常に窮乏を免れず。三十歲の時、痛切に斯くては遂に前途の見込なしと思ひ、斷然酒を禁じ水垢離を取りて天地神佛に祈り、夜も二三時間より多くは眠らず身を捨てゝ勤めたるを以て漸く今の地位に在ることを得たり」と、禪師、聞き了り、左右の侍者を顧みていふ、「見よ、金ぐらゐを蓄めるにも此の苦勞を要す、況んや生死の大事を了得する、之れ容易の業にあらず」と、此の一語以て修養に忘すものゝ頂門の一針にあらずや。唯だ財を積む之れは人の事、然かも此の苦心を要す、其の致富以て世を益し他を利せんとするに於ては苦心更に幾段を積まざるべからざるや言を待たず。世に某富豪の家訓なるものを傳ふ、

一　仇は恩で報ゆべし。

◎修養の教訓

一　人のあしきは我があしきと思へ。
一　禍福は皆な我が行ひより來ると知るべし。
一　後悔ある時は之れに代るの善を行ふべし。
一　難難より來る處の安樂にあらざれば甘んずること勿れ。
一　おのれ正直にして人を疑ふこと勿れ。
一　人に欺かるゝとも人を欺くこと勿れ。
一　心は活潑にして常に謹する勿れ。
一　全家の和合を以て富貴の基とす。
人生の禍福皆な品行にあり、誠實勉强すること懼るゝ勿れ、既往の非を挽回するに今の良心を以てす、自治積善、私欲を去り是非を決斷す、心明かなること鏡の如し

と、致富の訣も亦此の道念にあり。大道二門なし。人々其の業を異にし、個々其の職を別にするも、其の志す所は社會の共同生活を助け其の進歩發達に貢獻し、宇宙の大道を體現し天地の化育を補ふにあること其の道とする所に二致あるにあらず、此の道を行ふ須らく先づ心を養ふを要す、自ら心を養ふて其の得力を活社會に應用して無礙自在の能を得、擾々たる人生に處して然かも天空快濶の一境を得る、之れ吾等が修養の功果なり。

修養論了

◉達人の玉言

男兒大丈夫、作レ事莫二草率一、勤挺鐵石心、直取二菩提道一、邪路不レ用レ行、行レ之枉二辛苦一、不レ裏レ衆佛果、
誠取二心王主一、
（寒山詩）

報汝修道者、道求二空勞神一、人有二精靈物一、無レ字復無レ文、呼時歷歷應、離處不レ居レ存、丁寧善保護、
勿レ令レ有二點塵一
（寒山詩）

修養論索引

ア

悪は不知より生ず　三〇
アリストレス及其以後の學說　四〇
寂靜心（アウラクシヤ）　四六
アダム　六〇
アウグステーヌス　七〇
アンセルムス　七九
アベラルドウス　八一
阿賴耶絕　一三六
愛鄉心　一三五
アダム、スミス　一三五
アレガニー山中の修養（ワシントン）　一三四
朝起きの圖表　一三四
行脚の吟味（芭蕉）　一四九
愛の神　二六四
アーノルド　二六四
「暗室燈」　二六五

イ

一般目的と部分目的　一四
意志の自由　一七
偶を智ふ　三一
イデア　六一
意志の修練　六六
イエスの言行　七二
一視同仁（基督）　九〇
遺孤を托す（孔明）　九〇
遺表（孔明）　一〇七
石川又四郎の話　一〇三
イタリヤ旅行（ゲーテ）　一〇九
怒る事なし（スピノーザ）　一一一
偉人の片影　一一三
伊藤仁齋　一一三
圍碁の名手　一一四
以賽亞書　一一四
イデア　一一八
「因果經」　一二五
「陰隲錄」　一二五
意識過程の四性質（ビーム）　一二六
遺傳と個性　一三九
遺傳と家庭　一四七
偉人と賢母　一四七
偉人と配偶者　一四九
インダス河　一五一
偉人と山水　一五二
遺傳と變化　一五二
一氣相通　一五三
一元的傾向　一五三
一德　一五四
石田梅巖　一五九
衣食住と自省　一六四
一茶　二四一
稻葉濃州　二四二
「醫經」　二四二
一些字（江村專齋）　二四二
意志の鍛錬と靜坐　二四二
意志の鍛錬と讀書　二四二
石川丈山　二四二
家隆　二四二
意志の強固　二四二

ウ

ヴアイツ　一二
雲谷　九四
宇宙に於ける人　一〇一
宇宙の一部分　一〇八
宇宙に於ける覺悟　一一三
ウォルヅウオルス　一一三
宇宙の大道　一一五
「宇宙論」　一一七
宇宙の齊整　一一八
宇宙の瑰觀　一二〇
「優婆塞戒經」　一二〇
宇宙活動の三段　一二七
靈樓大師　一三〇
靈谷鏁師　一三〇
魚と水（孔明）　一三二
ウイリヤム、ビット　一四〇

エ

エデュケーション　一〇
エデュカシオ　一〇
エルヴイフング　一〇
淮南子　三一
エロス（戀愛說）　四三
エクスタシス（恍惚境）　四五
エホバ　四五
エデン園の物語　四五
永嘉大師　四八、一二〇
「易經」　九一
「易の繫辭傳」　九二
莫了凡　九二
圓滿の心　一一一
江村專齋　一一六
榮譽と逸樂　一二五
永世の苦　一二五
嬰兒の心　一二五
英雄と修養　一二五
英雄の修養　一二五
エスピノーザ（スピノーザを見よ）　一二五
エマーソン　一二五

オヲワウ

王陽明 一四
オルムツ 一三
黄檗 八七
鬼貫 二七
大内青巒 二八
横死の九法(僧祇律) 二四
音樂と繪畫 二四
「笈の小文」(芭蕉) 一七
王陽明の性行 一七
王陽明の前半生 一六
「王陽明行狀記」 一六
黄金前にあり(スピノーザ) 一七
太田道灌 一〇
大鹽中齋 一三
尾上菊五郎 一三

カクワ

カルチュア 三
寡欲(孟子) 二四
韓退之の三品說 二五
寡欲(程子) 一七
神と鬼 七三
裁定意 八三
外緣 八三
神の決定 九一
カントの批判 九一
カントの意志自由說 九
家庭の薰陶 一〇
家庭の影響 一四
ガンヂス河 一三
火山國 一三
龍田鵬齋 一三
家庭教育 八五
學校教育 一七
寒山 二八
下變の理 二四
階級的道德 一四
家族本位の道德 一五
家督相續と財産相續 一五
「顏氏家訓」 一六
神を標準とす 一六
活道德 一七
簡易生活 一七
家政の經濟 一七
「勸農」(一茶) 一七
感謝の生活 一七
活宗教の活面目 一七
管仲と孔子 二四
河合清丸 二五
灌水法 一五
觀念法 一五
勝海舟 七三
快川紹喜禪師 八五
學習と讀書 八五
學生と新聞雜誌 九一
學識と常識 九一
觀察の三方面 九一
繪畫と文學 一〇
香川景樹 一二
勸善と儆 一六
勸勞と人道 一六
義務と權利 一七
鹿島神宮 一七
金聖歎 一七
刀と小刀 一七
海舟の南洲評 一七
川北溫山 一七
加藤嘉明 一八
春日潛庵 一八
カーライル 一八
寒山 一八
儀容 一八
儀容の純潔 一八
禁酒の習慣 一八
規律を守る習慣 一八
基督の幼時 一八
基督の冒行 一八
舊約の聖經とナザレの風光 一八
基督教の傳道 一八
基督教の根本思想 一八
基督山上の垂訓 一八
基督の教訓 一八
救世主 一八
夾谷の會(孔子) 一八
逆境の福音 一八
金言と詩歌 一八
希國 一八
清元延壽 一八
緊褌 一八
グリーン 一八
君民同祖 一八

キ

教育とは何ぞ 一〇
ギュヨー 一〇
氣質の性 一〇
キリスト基督 一〇
基督敎道德の三要素 一〇
教育 一〇
「求道の精神」 一〇
機械論と目的論 一〇
行誠上人 一〇
義務本位の道德 一〇
敎育勅語圖解 一〇
今上天皇 一〇
兄弟 一〇
恭儉 一〇
義烈奉公 一〇
共同生活の實 一〇
勤と儉 一一
勤勞と人道 一一
義務と權利 一一
金聖歎 一一
逆境の效果 一一
其角 一一
「岐蘇路記」 一一
許六 一一
儀容 一一
儀容の純潔 一一
禁酒の習慣 一一
規律を守る習慣 一一
「顏氏家訓」 一一
神を標準とす 一一
活道德 一一
簡易生活 一一
「勸農」(一茶) 一一
感謝の生活 一一
活宗教の活面目 一一
管仲と孔子 一一
河合清丸 一一
灌水法 一一
觀念法 一一
勝海舟 一一
快川紹喜禪師 一一
學習と讀書 一一
學生と新聞雜誌 一一
學識と常識 一一
觀察の三方面 一一
繪畫と文學 一一
香川景樹 一二
貝原益軒 一二
鹿島神宮 一二
刀と小刀 一二
海舟の南洲評 一二
川北溫山 一二
加藤嘉明 一二
春日潛庵 一二
カーライル 一二
寒山 一二
敵打ち 一二
「家訓」 一二

軍人 一七
軍隊勅諭 一七
軍人五箇條 一七
グラッドストン 一七
クセノフォニース 一七

ケ

教育とは何ぞ 一〇
刑名の學 一〇
原罪 一〇
外緣 一〇
言語と文字 一〇
現實の悲哀 一〇
ゲーテ 一〇
缺陷の世界 一〇
言語不到の境 一〇
權利本位の道德 一〇
「華嚴經」 一〇
懈怠 一〇
德廣と生活 一〇
見識 一〇
決心 一〇
乾隆帝 一〇
實行規律(ワシントン) 一〇
ゲーテの修養 一〇
ゲーテの家庭 一〇
ゲーテの知的要求 一〇
ゲーテの煩悶 一〇
ゲーテの自殺觀 一〇
嚴格(芭蕉) 一〇
後醍醐天皇 一〇
國體の精華 一〇
國民道德の長所 一〇
國民道德と大道 一〇
國家の使命 一〇
國際法 一〇
心の不完全 一〇
高尙の理想と簡易の生活 一〇
後水尾上皇 一〇
悟境(坐禪) 一〇
古武士の風格 一〇
心隨萬境轉 一〇
效過格 一〇
降魔の相(釋迦) 一〇
孔子の言行 一〇
孔子の幼時 一〇
孔子の晩年 一〇
五賢詩並序 一〇
高瀨(ワシントン) 一〇
「古老物語」 一〇
皓禪師 一〇
五綱(陽明) 一〇
虎穴に眠る(陽明) 一〇
孔子 一〇

サ

三品說(韓退之) 一〇
雜感の起源 一〇
雜感と自由意志 一〇
サタン 一〇
結婚を忘る(陽明) 一〇
險夷胸中に滯らず(陽明) 一〇
言志錄 一〇
「鄕頌集」 一〇
月照 一〇

コ

心の三方面 一〇
コンペーレー 一〇
孔孟の性善說 一〇
孔子の性理 一〇
「孔子家語」 一〇
浩然の氣 一〇
告子 一〇
慨然念起 一〇
「コーラン經」 一〇
個性の要素 一〇
個人と社會 一〇
國情視察の四綱格 一〇
個人の意志と社會 一〇
個性と修養 一〇
棚口の逸 一〇
個別の理 一〇
宏智禪師 一〇
幸田露伴 一〇
國民道德 一〇
個人本位の道德 一〇
光格天皇 一〇
國民道德の標準 一〇
後鳥羽天皇 一〇
罪惡と信心 一〇
產業と氣風 一〇
西行法師 一〇
山國 一〇
三德 一〇
三帶 一〇
「左傳」 一〇
「菜根譚」 一〇
財を惜む 一〇
眞田昌幸 一〇
佐藤繼信 一〇
懺悔と靜坐 一〇
坐禪 一〇
坐禪の目的 一〇
山陽 一〇
西鄕隆盛 一〇
佐久間象山 一〇
山陽の遊行 一〇
昨是今非 一〇
山上の垂訓(基督) 一〇
三綱(孔子) 一〇
「產婆術」(ソークラテイース) 一〇
三顧(孔明) 一〇
細事の注意(ワシントン) 一〇
山水と家庭 一〇
「讀佛偈」 一〇
山中の賊、心中の賊(陽明) 一〇
三官の病(陽明) 一〇

細工人の心得　三五八
人性の思索　七一
宿業　八〇
四聖六凡　八〇
悉有佛性　八三
信仰　八八
自力と他力　八八
自由意志　八八
宿命と自由意志　九二
十干十二支　九六
自由意志と人格　九八
實踐理性　一〇〇
人格と品位（カント）　一〇一
自由と必然　一〇二
人格的意識　一〇三
眞我　一〇六
自然の大法　一〇七
心身の遺傳　一一〇
人類精神の崩芽　一一一
四端實　一一五
「心學講義」　一一五
神經質　一一六
自殺と家庭　一一八
實產と犯罪　一一八
社會の感化　一一九
社會的遺傳　一二〇
習慣　一二三
宗教と氣風　一二三
修養の可能　一二四
シヨーペンハウエル
社會教育　一二五
荀子の禮　一二五
修養の理想　一二五
修養の時代　一二七
人生の危機　一二八
修養の極致　一二九
修養の方法　一二九
修養の困難　一二九
人口と食物　一三〇
人生苦觀　一三一
時代遷れ　一三一
死の道迎　一三一
實在の風光　一三二
人生の二面　一三二
至公至平の理　一三三
詩的感想　一三三
人生の本務　一三四
人道の大義　一三四
仁　一三五
人生譬論　一三五
社會狀態と道德　一三六
時代と道德　一三六
諸葛孔明　一三八
儒教の道德　一三八
「勝軍王所問經」　一三八
人倫の要旨　一三九
「心地觀經」　一四〇
「書經」　一四二
自然界の二面　一四二
弱肉強食　一四二
處世論　一四三
順理と背理　一四三
人生本務の圖解　一四三
處世と道德　一四四
社會的自殺　一四四
死道德　一四四
仁義道德と利用厚生　一四四
「商人生業鑑」　一四九
商人の道　一四九
ジヨージ、ハーバート　一四九
慈愛深禪師　一四九
眞面目の生活　一五一
人文發展の經綸　一五一
時間の活用　一五二
時間の嚴守　一五二
ジヨン、シンクレア　一五二
ジヨン、ラボック　一五二、一五三
ジエレミー、テーロル　一五三
「心法抄」　一五三
シドニー、スミス　一五四
處世の兩面　一五四
趣味生活　一五五
社會の制裁に基く生活　一五五
趣味生活と宗教生活　一五五
松爾の要　一五五
修養法　一五六
身體の修養　一五六
郡康節　一五六
十二少（江村專齋）　一五七
朱子の靜坐觀書　一五七、一五八
ジヨン、ブエルソン　一五九

シ

修養の理論　一一
修養の意義　一一
新時代の新修養　一一
修養の研義　一三
身體と精神　一六
人性の偏執　一七
修養と各方面　一九
修養の圖解　一九
修養と教育　一九
修養の目的　一二
自由獨立　一二
人性の四品　一二
子思の性論　一三
子思の修養　一三
四端の說　一三
仁內義外論　一三
荀子の性惡說　一三
周濂溪　一三
主一無適（程子）　一三
仁（程子）　一三
朱子　一三
心卽理論（陸象山）　一三
四句教（王陽明）　一三
四德（プラトーン）　一三
人類の精神　一三
自然に從へ（ツエノーン）　一三
神人一致の怡悅　一三
司馬承禎　一三六
身體の修養と靜坐　一三六
常識修養と新聞雜誌　一三六
常識の意義　一三六
史傳　一三七
書籍の選擇　一三七
樂野栗山　一三七
人心の三方面と三種の態度　一三七
正金房壁書　一三八
趣味と品格　一三八
十返舍一九　一三八
自然と修養　一三九
自然の光景　一三九
自然を友とす　一三九
自然と倫理　一三九
自然の敎訓　一三九
社交と修養　一四〇
關中の得力　一四〇
社交の秘儀　一四〇
至誠　一四〇
人心收攬の秘訣　一四〇
修養の三道程　一四一
習慣力養成（ベイン）　一四一
小事を怠にせざる習慣　一四一
時間の習慣　一四一
修養の機關　一四一
歸迦の言行　一四二
釋尊の境遇　一四二
釋尊の金言　一四二
釋尊の入滅　一四二
修養の徑路（孔子）　一四三
進學（孔子）　一四三
詩と樂　一四三
諸葛孔明の人格　一四四
出師表（前後）　一四四
鹽谷贊山　一四五
「如蘭社話」　一四五
「淨宗護國篇」　一四五
自殺觀（ゲーテ）　一四五
シルレル　一四六
「燕門頭陀物語」　一四六
「啾々吟」　一四六
信仰の動搖　一四六
修養の課程　一四七
「機說」　一四七
朱子　一四七

ス

スペンサー　一四八
ストア學派　一四八
スピノーザの意志必至說　一四八
菅原道實　一四九
氷車の喩　一四九
樂傳　一四九
「隨齋譜話」　一四九
スピノーザの性行　一四九
スピノーザの幼時　一四九
スピノーザの放逐　一四九
スピノーザの困頓流離　一四九
スピノーザの生活　一四九
スピノーザの篤學　一四九
スピノーザの生行　一四九
スコツトすて女　一四九

セ

性の善惡　一四九
性杞柳の說　一四九
性湍水の說　一四九
性惡說　一四九
性善惡混淸說　一四九
善の原實（董仲舒）　一五〇
性無善惡說　一五〇
性善情惡說　一五〇
性情同一說　一五〇
性と情（朱子）　一五〇
靜坐（朱子）　一五〇、一五二
誠意之　一五二
性德と修德　一五二
セームス　一五二
精神と國家組織　一五二
性と自由意志　一五二、一五三
性說の歸結　一五三
「聖敎要錄」　一五三
政治法律　一五三
性の三別　一五三
青年の悲哀と中年の悲哀　一五三
生活離　一五四
キネカ　一五四
生存の意義　一五四
西洋道德　一五四
戰爭　一五四
石平道人の武士の心得　一五五
善惡の四階　一五五
生計の獨立
消費と獨實
セント、ヘルナード
「仙家秘訣無病長生法」　一五六
靜坐と修養　一五六
靜坐の必要　一五六
靜坐の趣味　一五七
靜坐の功　一五七
靜坐の倫理的價值　一五七
靜的修養の極致　一五七
善美の習慣　一五八
誠實の習慣　一五八
聖賢の言行　一五八
靑年の愛人　一五八
聖賢の耽讀（ゲーテ）　一五九
生活の簡素（スピノーザ）　一五九
石天基　一五九
聖賢の模範　一五九
千山　一五九

ソ

存養氣の說　一五九
ソークラテースの墮死　一六〇
ソロアスター　一六〇
存在の否定
「天うつ涙」　一六〇

祖先の風澤 一五五
「儒林伝」 二五五
「素問」 二五五
素食法 二六四
存想(司馬承禎) 二六六
相續心 二六六
「雑譬喩經」 二六八
ソークラテースの言行 二七〇
ソークラテースの従軍 二七六
ソークラテースの對話法 二七八
ソークラテースの妻 二七八
ソークラテースの門人 二七九
ソークラテースの獄中生活 二八二
ソークラテースの死及臨終 二八五
蘇東坡の修養 二八五
蘇東坡の文名 二八七
蘇東坡の不遇 二八七
蘇東坡の悟境 二八七
蘇譚師 二八七
蘇東坡の「禮佛偈」 二八八
蘇東坡の述觀 二八八
「遊石鍾」 二八九
曹靖公修 二九〇
蘇老泉 二九〇
孫子 二九〇

タ

太極圖説 二九一
太陽の譬喩(プラトーン) 二九二
「大乘起信論」 二九八
「大莊嚴論」 二九八
第一本能 二九八
第二本能 二九八
多血質 二九八
膽汁質 二九八
ダーウヰンとヴイズマン 二九八
胎教 二九八
「大戴禮」 三〇〇
體育 三〇〇
第一性 三〇六
第二性 三〇六
經の道徳 三〇九
澤庵和尚 三一〇
高杉晋作 三一〇
大鼻屋傳兵衛 三一〇
伊達奥州 三一〇
「旅の賦」 三一〇
大慧普覺禪師 三一〇
短を見すして長を見よ 三一〇
大度量 三一〇
談話 三一〇
瀧越臺の妻 三一〇
大司寇 三一〇
脫俗(孔子) 三一〇
伊達政宗 三一〇
大筠 三一〇
武田信玄 三一〇
逸人の至言 三一〇
境龍の人 三一〇

チ

「中庸」 三一三
張横渠 三一三
知行合一說(王陽明) 三一三
致知(王陽明) 三一三
知見と德性 三一八
知即德德即福 三一九
調和の美徳 三二一
中庸(アリステレス) 三二三
直接遺傳と間接遺傳 三二三
知識の素材 三二四
チュルケーン 三二四
地と人 三二七
地理と氣風 三二七
チャリス河 三二七
地震と氣風 三二八
知育 三三一
中年の悲哀 三三一
超絶的目的論 三三二
超州 三三二
忠孝一致 三三八
超越主義 三三八
ゲオグチス 三三八
知足 三四〇、三四三
チエスターフヰールド 三四四
知足と向上 三四四
千代女 三五〇
知識の整理と靜坐 三五〇
地上の天國 三五一
陳蔡の阨(孔子) 三五一
忠恕(孔子) 三五一
治國の要(宋儒) 三五二
チヤールス、ダーウキン 三五二
張子 三五二
近松門左衛門 三五二

ツ

ツエノーン 三五七
坪内雄藏 三五八
土屋東南 三五八

テ

程朱理氣の說 三六三
天地の性と氣質の性 三六三
程明道 三六四
程伊川 三六四
天地と大極(朱子) 三六四
「修心法要」 三六八
デカルトの意志自由說 三六九
天壤無窮 三七〇
天地の公道 三七二
テニソン 三七二
天命(孔子) 三七二
デルハイ神殿の標語 三七六
天津僞正 三七八
哲人の修養 三七八
天下一等の事(王陽明) 三七八

ト

動靜二面(修養の) 二六六
動物としての人 二六九
道元 二七〇
東洋倫理の異彩 二七〇
董仲舒 二七〇
道心と人心(朱子) 二七〇
讀書窮理(朱子) 二七〇
當死節 二七〇
トマス、アクイナス 二七〇
ドツンス、スコートス 二七〇
特殊遺傳 二七〇
東四隣洋の氣風と地理 二七一
德育 二七一
同一の理 二七一
東坡 二七一
同化力 二七一
同化の標準 二七一
道德の價値 二七一
動機論と結果論 二七一
道德と修養 二七一
努力生活 二七一
徒歩的精神 二七一
道義的生活 二七一
道義的生活と趣味生活 二七一
同情 二七一
動倉獸に及ぶ 二七一
導引法 二七二
吐納法 二七二
讀書と觀察 二七二
唐龍 二七二
「讀書作文譜」 二七二
動中の工夫 二七五
讀書と修養 二七五
讀書の分類 二七五
特別智識と普遍知識 二七五
讀書の快樂 二七六
讀破百卷 二七六
東坡居士 二七六
德川家康の人格 二七六
德川家康の節儉 二七六
德川家康の遺訓 二七六
登攀上人 二七六
讀書と交友(芭蕉) 二七七
ドリエー 二七七

ナ

「汝自身を知れ」 二七八
内心の正 二七八
内熱 二七八
ナイル河 二七八
南龍公 二七八
中江藤樹 二七八
内存的目的論 二七八
ナザレの風光 二七八
内省不疚(孔子) 二七八
何事も中庸を善しとす 二七八
南陽の臥龍(孔明) 二七八
ナポレオン 二七八
中江藤樹 二七九
中川惣三郎 二七九

ニ

二個の大問題 二八〇
如來の智慧 二八〇
西村茂樹 二八〇
二宮尊徳 二八〇
日々の別れ 二八〇
肉慾と趣味 二八〇
忍の一字(家康) 二八〇
忍辱經 二八〇

ネ

粘液質 二八一
「涅槃經」 二八一

ノ

能動理性 二八一

ハ

パウルセンの自由意志說 二八一
發生の階段(ヘッケル) 二八一
犯罪と社會 二八一
パトリック、ヘンリー 二八一
博愛 二八一
芭蕉 二八一
「佛説寂莱」 二八一
長谷川小四郎 二八一
波斯匿王 二八一
パブテスマのヨハネ 二八一
破釜の墜(東坡) 二八一
芭蕉の修養 二八一
芭蕉の出家 二八一
芭蕉庵 二八一
芭蕉の終焉 二八一
芭蕉の靜世 二八一
白刃頭上に下る(スピノーザ) 二八一
蓼林 二八一

ヒ

ヒルソング人の地位 二八二
美育 二八二
微小觀 二八三
人と人との調和 二八三
平等的道德 二八三
人と人以上との關係 二八三
屏風と商人の話 二八三
ヒューム 二八三
貧に處する心 二八三
百丈 二八三
飛脚の話 二八三
「蜱蟖」 二八三
品性修養と讀書 二八三
ヒュポン 二八三
譬喩二則(釋迦) 二八三
「百喩經」 二八三

平賀源内　五一〇
平沼專藏　五一三

フ

不斷の修養　一三
文明と人格　一六
復性說　四一
プラトーンの學說　五九
不德は無識より起る　六〇
不動心（ストア）　六八
フイローン　六九
プローテイノス　七〇
佛性と罪惡　八〇
回々教の宿命說　九一
普遍遺傳と特殊遺傳　一一五
父母と犯罪　一二五
風土の影響　一三五
文明と河流　一三七
文王の母　一四八
プラトーンの德性涵養　一五三
不如意觀　一六五
フイヒテ　一七六
フオン、パエール　一八八
文明の惠澤　二二六
武士の心得（石平道人）　二三〇
負債　二七七
フランクリン　二六四
文藝と修養　三一一
文藝の趣味　三一四
文藝と誠實　三一六
不言の教訓　三二三
フランクリンの十三目　三四七
佛教　三六一
文事と武事（孔子）　三七五
不動明王　四〇〇
「武家法度」　四二九
文教（家康）　四三〇
文豪の修養　四三九
「ファウスト」（ゲーテ）　四五四
古池眞傳（芭蕉）　四五六
佛頂禪師　四五六
フツス　四九三
「文昌帝慾海廻狂寶訓」　五〇五

ヘ

ヘーゲル　一四
ペラギウス　七八
ヘツケルの意志不自由說　一〇〇
ヘツケルの遺傳論　一一〇
平原國　一四六
ヘルマン、シルレル　一四九
變易の相　一七四
ヘツケルの宇宙觀　一七六
「平常心是道」　一九一
ペイン　三三八
米國獨立戰爭　四一七
邊務八事（陽明）　四六五
ペン、ジヨンソン　五〇〇

ホ

放心　二四
本源清淨心　八五
「梵網經」　八三、八七、二二四
「法句經」　九〇
本能とは何ぞ　一一三
謀故殺と家庭　一二三
「方丈記」　一六二
菩提　一九一
法然上人　二一四
朋友　二二七
法律生活　二七〇
抱朴子　二九七
忘我と文藝　三一八
發心　三三七
ポチダー戰爭　三八五

マ

誠は聖の本　四三
マルカス、オウレリアス　六八、二七七
末那識　八一
「馬太傳」　九一
マツサージ術　二八五
「卍庵法語」　三〇〇
「馬太傳」　三七〇
松尾芭蕉（芭蕉を見よ）
園山應擧　五〇九

ミ

道とは何ぞ　一九〇
道を行ふ　一九七
自ら知る　二四一
道と利との調和　二五一
三浦梅園　三三一
道に志す（孔子）　三八〇
水戸光圀　四八七

ム

無明熏習　八二
無上の大法　九九
村田清風　一三三
無學の幸福　一五七
無常觀　一六二
無窮無限　一七七
無門　二七五
村田春海　三一六
無碍自在の境　三五〇

メ

メシア
救世主　三七三
「メモラビリア」　三九三
名匠の苦心　四一一

モ

孟子　二三
孟子四端の說　二三
孟子と告子　二八
孟子に對する荀子の駁論　三三
妄心熏習　八二
目的論　一八六
孟子の友論　二一八
目前の利と永久の利　二四九
目的と手段　二八〇
妄識　三〇四
「默鐵集」　五〇三

ヤ

夜氣存養の說（孟子）　二五
夜氣存養の說（朱子）　五〇
山鹿素行　一〇六、四八六
山鹿素行の七道論　二二八
病の十因（醫經）　二八二
山岡鐵舟　二九三
山岡鐵舟の修身二十則　三四八
柳澤淇園　四八四
柳生宗矩　四八八
矢部駿州　五〇四

ユ

ユダヤ
猶太教　七三
ユーフラテース河　一三七
雪と氣風　一四二
勇の二種　一九八
「遺教經」　二五七、四九九
誘惑（基督）　三六五
友愛論（ソークラテース）　三九六
猶太人の迫害　四七二
猶太人の和蘭移住　四七三

ヨ

善き獸　一四
楊雄の善惡混淆說　三八
「約翰傳（ヨハネ）」　九一
輿論　一三一
横井小楠　一三二
横の道德　二〇二
甕中の人　三五七
横谷宗眠　五〇八

ラ

ライプニッツの制限的自由說　九七
「禮記」　二一九
ラスキン　三二〇
ラボック　三三三

リ

良知良能　二三
劉向の性無善惡說　三八
李翱　四〇
理氣の說（程子）　四四
陸王の心即理論　五二
陸象山　五二
良知（王陽明）　五六
理想國（プラトーン）　六四
理性（オウレリアス）　六九
「劉氏通鑑外記」　九二
「倫理と文學」　一一八
流行　一三〇
理想と現實　一六一、一六六
「了義經」　二一八
倫理の二潮流　二三二
リツトレ　二六五
劉長卿　三一五
旅行と克己獨立　三二七
劉備　四〇一
龍場の修養（陽明）　四六七
良知（陽明）　四六八
俚言　五〇六

レ

禮（荀子）　三四
靈性の隱覆　一〇七
「烈女傳」　一四八
蓮如上人　二〇五
禮儀　三二四

ロ

ロゴス　六九、一九一
ロンプロゾー　一四七
老子　一九〇
「六方禮經」　二一六
「論語」　二一八、二一九
ロングフエロー　二八一

ワ

ワシントンの人格　四〇九、四一九
ワシントンの家庭　四一〇
ワシントンの幼時　四一一
ワシントン幼童を救ひし話　一一四
ワシントンの勇氣　四一五
ヴイマルの新居（ゲーテ）　四五一

修養論索引終

明治四十二年四月七日印刷
明治四十二年四月十日發行

修養論奧附

正價金壹圓八拾錢

著作者 加藤熊一郎

發行者 伊東芳次郎
東京市本郷區本郷壹丁目九番地

不許複製
不許漢譯

發行所 東京市本郷區本郷一丁目九
電話下谷一九三八
郵便振替口座一七一
東亞堂書房

印刷者 山田英二
東京市小石川區久堅町百〇八番地

印刷所 博文館印刷所
東京市小石川區久堅町百〇八番地

東亞堂書房創業第五週年紀念出版

特約大賣捌
東京神田神保町 東京堂書店
大阪北渡邊町 杉本書店
名古屋本町 川瀨書店
久留米米屋町 菊竹金文堂

（東京本郷……太田製本）

注意せよ……著述界空前の一大計畫

加藤咄堂。大住舜兩先生著

▲五月中發賣▼

近刊

常識之基礎

●最新式進化圖數葉挿入●

全一冊 菊判大クロース美裝 四百五十餘頁

正價

送料

世に抽象的に常識の涵養法を述べたる書籍は尠なからずと雖ども、而かも之れを具體的に說明して精神物質の兩界に亘り、苟くも文明の人士として缺くべからざる各種の有用なる智識を網羅し、以て吾人が「常識の基礎」を確立したるものに到つては未だ曾て之れあらず。豈誰か隔靴掻癢の嘆なきを得むや。著者加藤、大住兩先生は現時思想界の泰山北斗たり、常に後進を誘導せらるゝの傍ら、又這般學界の一大缺陷を憂へらるゝこと深く、拮据數年、即ち空前の最新案を以て、先づ筆を天體の組織に起し各種の星宿并に地球發達の顛末より、礦物、地質の過去現在に及び更に地球上に分布せる動物界植物界の諸現象を詳述し、且つ吾人々類進化の徑路より世界各國の地理歴史を叙し、尙ほ漸次文明の域に進みて、政治、藝術等の社會現象を說き更に倫理、宗教、哲學等の思想界に入り「緖論」「宇宙篇」「地球篇」「生物篇」「社會篇」「思想篇」の六部に分ち、其該博の才識を以て、系を逐ひ、統を辿り、形而上學、形而下學の各科を一も洩す所なく進化論的に講述して、本書一卷を成せるもの行文平明、趣味横溢、婦女幼童且つ之れを解するに苦しまざる而已ならず更に卷末に附するに詳細なる索引數十頁を以てし、隨時所要の問題を搜出するの便あらしむ。本書四百餘頁は實に壓搾せられたる最新の「百科辭典」にして、又宇宙の萬象を包藏せる東西學藝の精髓也と稱すとも溢辭にあらず。常識涵養に志あるの士は勿論、餘暇なくして修學の便を得ざる諸君等にして本書一卷を通讀せられなば、校黌十數年の研學に優るもの萬々ならむ!!!!

東亞堂出版圖書大賣捌所

東京日本橋	至誠堂
同 日本橋	北隆館
同 日本橋	林平次郎
同 日本橋	文林堂
同 京橋	目黒書店
同 京橋	前川書店
同 京橋	東海堂
同 神田	上田屋
同 神田	武藏屋
同 神田	勉強堂
同 神田	崇文館
同 神田	二松堂
同 本郷	日本堂
同 麻布	森江書店
東京本郷	森江分店
同 小石川	鷄聲堂
京都市	若林書店
同	寶文館支店
同	東枝律書房
同	中外日報社
神戸市	寶文館支店
名古屋市	小澤百架堂
同	星野文星堂
岡山市	奥田金正堂
廣島市	友田書店
同	積善館支店
熊本市	長崎次郎
同	金書堂書店
鹿兒島	谷村書店
大分市	甲斐治平
博多市	博文社
長野市	西澤書店
松本市	水琴堂
長岡市	目黒書店
新潟市	萬松堂書店
金澤市	宇都宮書店
札幌市	富貴堂書店
小樽市	白鳥書店
弘前市	今泉書店
青森市	今泉支店
宇都宮	內山集英堂
群馬縣	峯岸書店

東亞堂出版圖書大賣捌所

加藤咄堂先生名著

訂正十二版

増補 冥想論 附『坐禪論』

本書内篇十三章、哲學、宗教、倫理、生理、詩美等諸種の方面に亘りて品性修養の根底たる冥想の必要を叙じ、其理論と方法とを詳説し、和漢洋古今先覺の思想を提供し来りて引證該博、また餘蘊あるなし、外篇二章禪學小景、冥想雜感外に坐禪論等共に修養を心掛くる者には缺くべからざるの指教なり。（萬朝報批評）

冥想論の一篇字々として金ならざるはなく、句々として玉ならざるはなく、眞に近來快心の著なりと云ふべし。（大阪毎日新聞批評）

大判貳百餘頁
正價五拾錢
送料六錢

好評七版

人格之養成

人の本性より研究して古代の善惡を觀き人格の意義及び養成法を詳論して人格養成の必要と方法とを教へたるものにして著者は其論據を哲理に置きたるが爲めに説く所頗る幽玄の趣致あり。（國民新聞批評）

「人とは何ぞ」に筆を起し古代民俗の人類觀、人性善惡説、人の價値、近世科學人類觀、人格の意義、人格の根底等を詳論して最後に養成法に移り修養の時代、常識の涵養、趣味の啓發、意志の鍛錬、處世と人格とを述べたり、著者獨特の筆法讀者を警醒する所多し、附錄なる讀書と自然、亦是有要の文字。（中央新聞批評）

大判百八十頁
正價五十錢
送料六錢

加藤咄堂先生名著

好評四版

雜觀 朝思暮想

（朝思の一節）憐なる哉、今の青年、生活の爲めに業を求むることを知つて、道の爲めに求むるべきを知らず。滔々利に走りて唯目前の事を企畫して其の根本を逸すること勿れ。

（暮想の一節）人生に於ける事業もとより少からず。されど唯だ赫々の功を社會に立つるのみを以て大事業と見ること勿れ。沈思冥想、我が本來の心性を徹見し、其品性に培ひ、其人格を養ふ亦實に大なる事業たるなり……

中判三百餘頁
正價六拾錢
送料八錢

好評再版

修養資料 はなし草

此書續を分つて五「雨窓閑話」の奇警なる「文談武談」の壯烈なる「夜雨蕭々錄」は一讀悚然たる幽霊奇聞を語りて、附するに著者が得意の幽霊論を以てし「茶楊禪話」は浩瀚飄逸なる超俗的逸話を述べて字々清風を生ずるの思ひあり「若し夫れ「修身教材」に到つては則ち修養自警の好資料一倶に文章演説坐談等の新話材として興趣津々眞に晴行兩居の好伴侶たり。

中判頗美裝
正價四十錢
送料六錢

加藤咄堂先生名著

好評三版

雄辯法

大判二百餘頁　正價七十錢　並製五十錢　送料各八錢

著者は居士佛教家中第一流の雄辯家也本書は修辭學や因明や西洋論理學や著者の經驗抔を基礎として雄辯法の說明を試みたるもの文辭簡明にして中々面白し。（報知新聞批評）本書は雄辯法の何たるかを組織的に簡易に說明して先づ其要綱を提示し得たる者なるが其引例の實際的にして興趣深きものゝみを選べる著者の用意大によし。（大阪每日新聞批評）著者は雄辯法を實際に行ひつゝある人なれば其說く處も實際に出で經驗より來りしもの極めて多し演說說敎家は一讀すべき書なり。（國民新聞批評）

近刊

讀書法

明治四十二年六月上旬發賣

書を讀んで益く信ずれば書なきに如かず、如何にして書を讀むべきか、如何なる書籍を擇ぶべきか、如何にして其得たる智識を統一すべきかは、蓋し其幾年苦學の結果を有効ならしむべき安心の地を得しものゝみ能はざる也

雄辯法

大判二百餘頁　正價七十錢　並製五十錢　送料各八錢

著者は居士佛教家中第一流の雄辯家也本書は修辭學や因明や西洋論理學や著者の經驗抔を基礎として雄辯法の說明を試みたるもの文辭簡明にして中々面白し。（報知新聞批評）本書は雄辯法の何たるかを組織的に簡易に說明して先づ其要綱を提示し得たる者なるが其引例の實際的にして興趣深きものゝみを選べる著者の用意大によし。（大阪每日新聞批評）著者は雄辯法を實際に行ひつゝある人なれば其說く處も實際に出で經驗より來りしもの極めて多し演說說敎家は一讀すべき書なり。（國民新聞批評）

破魔禪居士著

○偉人修養史

大價送料六錢　判五百二十頁　錢錢

「剛腸なる所を學ばんと欲せば、先づ英雄の爲せる事跡を觀察し且つ其の事業を監督して、必ず身を以て其事に當り、安心の地を得べし」とは近代の巨人四郷南洲翁の格言にあらずや。本書は即ち古來偉人英傑が以て偉人たり英傑たるに到りたる修養自强の方法を研究し其崇拜すべき言行を錄して人格鍛錬の活模範を示したるもの實に立志發奮の絶好刺激たる而已ならず以て吾人の意志を鞏固ならしめ剛膽不撓の大勇猛心を養成せしむるに足らむ

臼田石楠先生編

○西郷南洲言行錄

大價送料六錢　判二百十六頁　錢錢

（每日電報批評）西鄕隆盛は後世に懸りて一大奇蹟なり彼が偉大なる生涯の出發點は本邦歷史中の大革命なる維新の風雲にして其趣味多き言行の終焉は薩摩隼人に依りて脚色されたる大悲劇即ち城山の自刃にあり彼が一世の炯眼と滿身の膽力とを以てして三條、岩倉、木戸、大久保の諸公途に及ぶ所に非ず、此書は此偉人の生涯を縱橫に寫して剩さゝらんとするもの、如く材料を汎く蒐集して傳言、行の分類に收め英雄の傳記として最も驅梅の宜きを得たりと云ふべくたゞに青年子弟の好讀物たるのみならず明治維新史の一面として世人の一讀すべき眞書なり

藤田長江先生編

○福澤翁言行錄

（橘本書店藏版）

大價送料世錢　全一冊　五四錢

本書は我が新文明の一大恩人として最も光彩ある生涯を有せし平民的大偉人福澤翁の敬慕すべき言行を錄してその獨立自尊主義、實學主義、常識哲學を鼓吹せしもの人格修養の活模範たり

萬朝報記者　芽原華山先生著

○世界文明推移史論

大價送料五十八錢　全一冊　錢錢

（國民新聞批評）篇を分つ五、日本と亞細亞文明の東漸、歐洲文明の西漸より日本文明の西漸の「新勢」及び日露交戰に入り太平洋と武藏的商業主義に及び韓清四伯利の關係を叙して日本は韓清四伯利を文明化し進で巴里倫敦の濠人町花柳をも感化するの覺悟あるべき也と結べり雄論縱橫宛ら天馬の空を行くが如く臂り竝し一代の耳目を啓發するに足るものあらん吾人は著者が此くの如き大問題を征服せんと試たる大膽に向て喝采の辭を惜む能はざる也

大内青巒居士序

○禪と修養

釋悟庵師著

大價送判五料二百十八頁錢

（萬朝報批評）禪を唯靜止唯消極なりと爲す世の誤解を破し其靜動兩面を詳說し物質精神兩方面より束縛を脫する法を敎へ宇宙の本體は卽ち我にある事を示し延いて人生の目的膽力の養成處世の秘訣等に論及す禪の何物たるかを知らざる者も熟讀玩味するうちに自ら無自性の姿を認むるを得む

（讀賣新聞批評）枯木禪野狐禪の難病を救濟する爲に本書を公にしたりと言ふ著者の識見は極めて明快に書き下されたり云々

洪嶽釋宗演禪師
無邊俠禪波邊子爵題詞

○禪と活動

破魔禪居士著

大價送判四料百十五十六頁錢

（萬朝報批評）察するに著書は現今禪を學ぶ者が多く厭世に陷るを憤慨せる者の如く大に靜中の動換言すれば禪の積極的活動的方面を慫慂せんと努めたるものゝ如しされば先づ卷頭より「大勇猛心」「聖諦第一義」「靜中動」「裸體になれ」「言ふは易く行ふは難し」「常軌を逸する勿れ」等の數章に亘りて詳細に活動的禪の如何なる者なるかを述べ以下九章に亘りて古來活動的禪の如何に活動し如何なる人によりて活動せしかを歷述せり文章又一般宗敎書類と全く其類を異にし明快縱橫詞藻豐富にして再讀するに足る

文學士 沼波瓊音先生校閱

○俳味禪味

宮垣四海庵先生著

中價送判四料全一十四冊錢

俳味とは如何？ 禪味とは如何！ 蓋禪味を解するの士にして亦始めて俳味を談ずべし。本書は俳禪芭蕉によりて建設せられ、鼓吹せられたる俳味禪味の骨髓を明にして、閑寂趣味の福音を宣傳し、極端なる物質萬能主義に荼毒せられたる現時の人心に一大覺醒を與へ、以て虛飾を去りて簡易に就かしめ、枯淡の生活をして趣味を生ぜしむ。近時思想界の新革命兒たり。

波邊國武氏
黑岩周六氏題詞
佐々木信綱氏題詠
三宅、齋藤兩氏畫

○動中靜觀

萬朝報記者 茅原華山先生著

中價送判三料四百十六卅頁錢

華山先生の文は世既に定評あり西園寺陶庵侯は「恰も蘇老泉の文を讀むか如し」と賞せられ黑岩淚香先生は實に「其趣味の博きこと時人及ぶ者少し」と贊論せられたり本書は先生が半世の思想史にして又觀察史也篇を分つと八自然を觀察し、哲理を談じ、人物を評し、修養を論じて風發卓厲、詩華煥發近時出版界の一異彩たり敢て大方の瀏覽を俟つ。

德富蘇峯先生序

○修養逸話 偉人之風化

鹽見戈山先生著

中價送判五料全一拾六冊錢

夫れ水の流れを示すものは、其水面に浮べる藻の一片なりとすれば、偉人大人物が赤裸なる人格の眞價を語るものは、卽ち其無用意の間に於て發せられたる片言逸行に非ずや。本書は天。地。玄。黃の四篇に分ち、古今東西に亘りて偉人先哲が、諸種の趣味深き奇聞逸話を集め、著者が獨特の論評を加へたるもの、德富蘇峯先生は「筆端自在快劍陣を斫るの概あり」と贊せられたり。巨人達人が絕大なる感化を被りて、以て自己を鍛錬し、修養せむと欲するの士は、乞ふ此書を三讀せよ。

井上博士、芳賀博士、鹽井學士序
ジョン、トッド敎授原著

○自修論

姬河原無鳴先生譯

五月上旬發賣

全一冊（印刷中）

足立栗園先生著

○膽力の錬養

四月下旬發賣

全一冊（印刷中）

東京血液療院呼吸操練部顧問 熊代彥太郎先生著

○心身鍛錬 深呼吸健康法

大價送判五料全一拾六冊錢

活潑の精神は、健康の身體に宿る！
天下深呼吸の如く、簡易にして、廉價にして、而かも、
身體の諸機能を强健ならしめ……元氣を充實し
記憶を旺盛にし……思想を統一し
精力を集中し……膽氣を擴大する
等の偉効ある、健康增進の妙法他にありや？
且夫れ本書の價値多き所以は、所謂机上の空論に非ずして、言々著者が多年の實驗に準據せし點に在り矣

足立栗園先生著

○心身鍛錬 養氣法

大價送判五料二十百五六頁錢錢

（報知新聞批評）緒論に元氣精神と生命と身體の關係を說き第二編に於て養氣と攝生第三編に氣力養成法を論じ第四編に於て心身鍛錬の實驗として東西古今に亘り三十三家の所說を擧げ第五編として養生訓を載せ附錄に飲食と喫煙と題して泰西十大家の實驗を揭ぐ心身鍛錬の法を說く至れりと云ふべし殊に內觀を說く所頗る傾聽翫味すべし

（讀賣新聞批評）養氣の一事は古來聖賢の尊ぶ所にして又事業家の大に努むる所なり蓋し之れ無くんば人に何等の勇氣なければなり

愛生病院長 醫學士 木村麟太郎先生校閱

○腦力養成法

漆山又四郎先生著

總價送か四料十な五六付錢錢

文明の競爭は智力の競爭也優勝劣敗の分るゝ所一に腦力の强弱如何に存す腦力の養成豈忽緒に附すべけんや本書は卽腦神經衰弱其他諸種の腦症の治療法より腦力及び記憶力增進の原理方法を詳叙せる者如何なる階級の人士を問はず必ず繙讀の勞を吝む可らず

堀內新泉先生著

○時間活用法

大價送判六料美製十八本錢錢

（報知新聞批評）時是れ金の貴きより以上に道破して時是れ人と做し人生の如何に時間の價値大なるかより時間を使用するの心得をば數十百項に剖別して丁寧深切に記述したり時の貴ぶべきこと時を浪費すべからざることは何人も之を言ふ處なれども之を知りて行ふ者尠く遂に蹉跎困頓秋風霜鬢を吹くに及んで悔恨するもの多き時に於て斯る適切眞摯なる書の出るは喜ぶべし

（日本新聞批評）金を浪費せぬ人はありとも時間を浪費せぬ人は殆ど無く紀律の慣習なき日本人は最も意を玆に致すを要す是れ本書の必要なる所以

經世學人氏著

○生活問題の解決

七月上旬發賣

本書は經世學人とは世を忍ぶ假りの名、まことは目下實業界の切れ者で、若い時分には隨分つらい勞働などをして苦學をもされた者だが、いろ〳〵世路の險艱を經來つて、今日の位置に達せられた某君が、其經驗の餘に得られた世渡りの秘訣を披瀝せられたもので、決して机上の空論なぞではないのであるから、世の人を益することは鮮少でないと信ずるのである。

報知新聞記者 熊田葦城先生著

○少年武士道 第一

三浦北峽先生畫

中價送判四料美十六裝錢錢

（報知新聞批評）本書は少年の志氣を鼓舞し忠勇義烈の精神を煥發せんと欲するものなれば少年の好伴侶として家庭必須の讀物たるべし

（福岡日々新聞批評）古來十六歲以下の少年の武談を美文的に書いたもの總て三十五人各人の小傳と訓戒とを附し又上欄に註解を添へて少年讀者の便に供して居る氣のきいた讀物である

（北國新聞批評）偉人烈士の少年時代の逸話を收めたるもの皆以て少年子弟の元氣を鼓舞するに足るべし

報知新聞記者 熊田葦城先生著

○第二 少年武士道

三浦北峽先生畫

中價送判二四料百十六廿頁錢錢

（大阪每日新聞批評）本書は我國の史乘に現はれたる英雄豪傑四十名を選び其少年時代の勇武壯烈なる行爲を叙せるもの

（東京二六新聞批評）文章の流暢と內容の豐富なる事に於て少年子弟を魅著せしむるに足らん

小樽新報批評）採て家庭夜話の資料と爲すに足る

堀內新泉先生著

○立志小說 全力の人

大野靜方先生畫

前後送篇篇料六六各十十八五錢錢

獅子の兎を搏つや其全力を用ふと人生の事と雖ども亦全力の人ならずして誰か奚んぞ赫々たる偉業を成就すべけん、嗚呼全力の人なる哉、嗚呼全力の人なる哉、全力の人岩井健一の剛健なる意志と、高潔なる心操とそが世路の險を歷幽を窮めて後始めて贏ち得たる成功の活教訓とは著者が靈犀の詩筆を俟つて勞れたる者には新たなる活力を與へ、敗れたる者には溫かき慰安を與へ、以て讀む者をして、感奮蹶起せしめずんば已まざらむとす。近時立志小說中の巨擘たるもの……

堀內新泉先生著

○人格と運命

大價送判五料二百十六頁錢錢

（萬朝報批評）人の社會に處する要訣より如何にして人格を高むべきか如何にして運命を造るべきかを說きたるものにして著者は由來小說を以て世に聞えたる士なるが此種の文體にも自ら其丁寧なる筆力を見る

（報知新聞批評）所謂世に處する新活法を平易に說きたるものにて近來盛んなる人格の修養には好適の研究材料たり

幸田露伴先生著

○潮待草

附錄『小土偶木偶』

大價送料八錢 美本十五錢

（太陽批評）一讀するに此書稍晉く皆希の性格を具したるは稱なるべし一吾人は本書が單に文學的產物として價値多きを語ると共に青年に發する啟廸書として乾燥無味の修身書よりも遙に效多きを揚言して憚らざるなり（中央公論批評）殊に土偶木偶は警省の詩情の決して老いざるを見るべく其五回のさきがけ文の如きは絕世の妙文金色夜叉の宮の書簡の如きは到底比べものにならぬ心地す（大阪毎日新聞批評）文學談あり處世談あり史談ありとりどりに愛でたからざるはなし

幸田露伴先生著

○小說はるさめ集

希價送料七錢 有本美五八

（讀賣新聞批評）露伴氏の傑作中の傑作と稱せられたる一口劍。風流佛。未練の三篇を合したるもの（萬朝報批評）今日見るも流石に想華の人を魅するものあるは偉なる哉（國民新聞批評）殊に文章の縝密にして典重なる而も洒脫にして脂粉の氣を脫せる共に及び易からず著者の出世作として明治文壇の產物として誰んで多大の興味あるべし（日本人批評）「風流佛」の超脫「一口劍」の莊嚴其藝術家の藝術に對する熱烈なる信念を理想化して描寫殆んど神に迫る云云

幸田露伴先生著

○新作賴朝

阪井紅兒先生畫

大價送料一錢 美裝圓本十八錢

頭大公の生涯は眞に努力奮鬪の連續なりき、數奇なる運命の手は、幼にして斬らるべかりし英雄を伊豆に送りて更に失戀喪兒の苦がき俚雨を降し、腎に枯れなむとせし野心の萌芽を培ひて、疾風迅雷、倏忽として覇業創建の大活劇を演ぜしむ、史を讀む者誰が慨然として志を立てざらむ哉、露伴先生此古英雄が埋沒せる個人的事實に興味を有せらるゝ事久しく博參宏證遂に斯一篇を成す、文調渾厚、理趣縝徹、近時文壇、史壇の一偉觀たり

幸田露伴先生著

○註釋二日物語

沼田穎川先生註

金價送料四錢 字入美本十四錢

（此一日の一節）四行かすかに眼を轉じて、擊する方の闇を覗へば、ぬば玉の黑きが中を、朽木のやうなる光りもてる緜とも雲とも分かざるもの仄白く立ちまよへる上に、其樣異なる人の丈いと高く痩せ衰へて凄じく……（彼一日の一節）月はやがて沒るべく四に廻りて、御堂に射し入る其光り水かとばかり冷かに、蕭然として含蓄せる二人の姿を浮ぶが如くに、御堂の闇の中に照し出しぬ。

佐藤仁之助氏著 國語漢文

要語詳解（全二冊）

正價各四十錢 送料各八錢

佐藤仁之助氏著

日本文法解義

正價四十五錢 送料六錢

佐藤仁之助氏著

漢字異同辨

正價二十錢 送料二錢

佐藤仁之助氏補 東亞堂編輯所編

國語異同辨

正價十五錢 送料二錢

大町桂月先生編

作文法講話

正價三十錢 送料四錢

佐藤仁之助氏編 新案

百人一首通解

正價十錢 送料二錢

高濱虛子先生編

新寫生文

正價五十錢 送料六錢

戶川秋骨先生著

英文學講話

正價卅五錢 送料四錢

町田柳塘仙史著

漢詩講話 附（俳句と漢詩）

正價五十錢 送料六錢

武島羽衣先生序 志賀華仙先生著

和歌作法

正價三十錢 送料四錢

佐々醒雪先生序 沼波瓊音先生著

俳句講話

正價四十錢 送料六錢

露伴臨風兩氏序 沼波瓊音先生著

模範名家俳句大成

正價壹圓廿錢 送料八錢

久保天隨先生序 沼波瓊音先生著

俳句研究

正價四十錢 送料六錢

沼波瓊音先生著

俳句階梯

正價三十錢 送料四錢

三宅雪嶺山師編著 沼波瓊音先生校訂

俳古選新選

正價四十錢 送料六錢

秋元蘆風先生譯

シルレル詩集

正價四十錢 送料四錢

山口小太郎氏序 秋元蘆風先生著

シルレル研究 鐘の歌評釋

正價七十錢 送料四錢

野口米次郎氏著 邦日本少女の米國記文

正價七十五錢 送料八錢

楓村居士新著 傳奇小說

俠雄錄

正價六十錢 送料八錢

田中波盦國公題 龜谷天尊先生著

賜天覽瑤琴

正價四十五錢 送料六錢

藤田理學士校閲 鹿田久村先生著 百科錦囊 ポケット顧問 正價三十錢 送料四錢

松波法學博士序 原田定造先生著 手形取引の顧問 正價八十錢 送料八錢

張廷彦先生閲 張宮澤爾氏著 官話 速成篇 正價卅五錢 送料四錢

張廷彦先生閲 張宮澤爾先生著 東語速成篇（官話速成篇總譯） 正價十五錢 送料二錢

德富蘆花先生序 角田鯨南先生著 時文評論 理趣情景 正價四十錢 送料六錢

坂田貞先生著 無宗教者の眼に映ずる 人生論（參陽社藏版） 正價二十五錢 送料四錢

富士川國手序 澤田順次郎氏著 科學より見たる男女の關係（鼎立社藏版） 正價卅五錢 送料四錢

大日本催眠學會 小野福平先生著 催眠術治療精義（催眠學會版） 正價九十錢 送料八錢

加藤雄堂先生序 本多五陵先生著 健康秩序 朝起の勸め（修養閣藏版） 正價卅五錢 送料四錢

藤江日東先生著 最新獨學法（修養閣藏版） 正價四十錢 送料六錢

◉新刊豫告!!!

幸田露伴先生著 新訂 曾我物語（起稿中）

文學士 幸田成友先生著 大鹽平八郎（起稿中）

文學士 尾上柴舟先生述 新派 和歌講話（起稿中）

芳賀文學博士閲 沼波文學士新著 徒然草新釋（起稿中）

文學士 沼波瓊音先生著 默想の天地（起稿中）

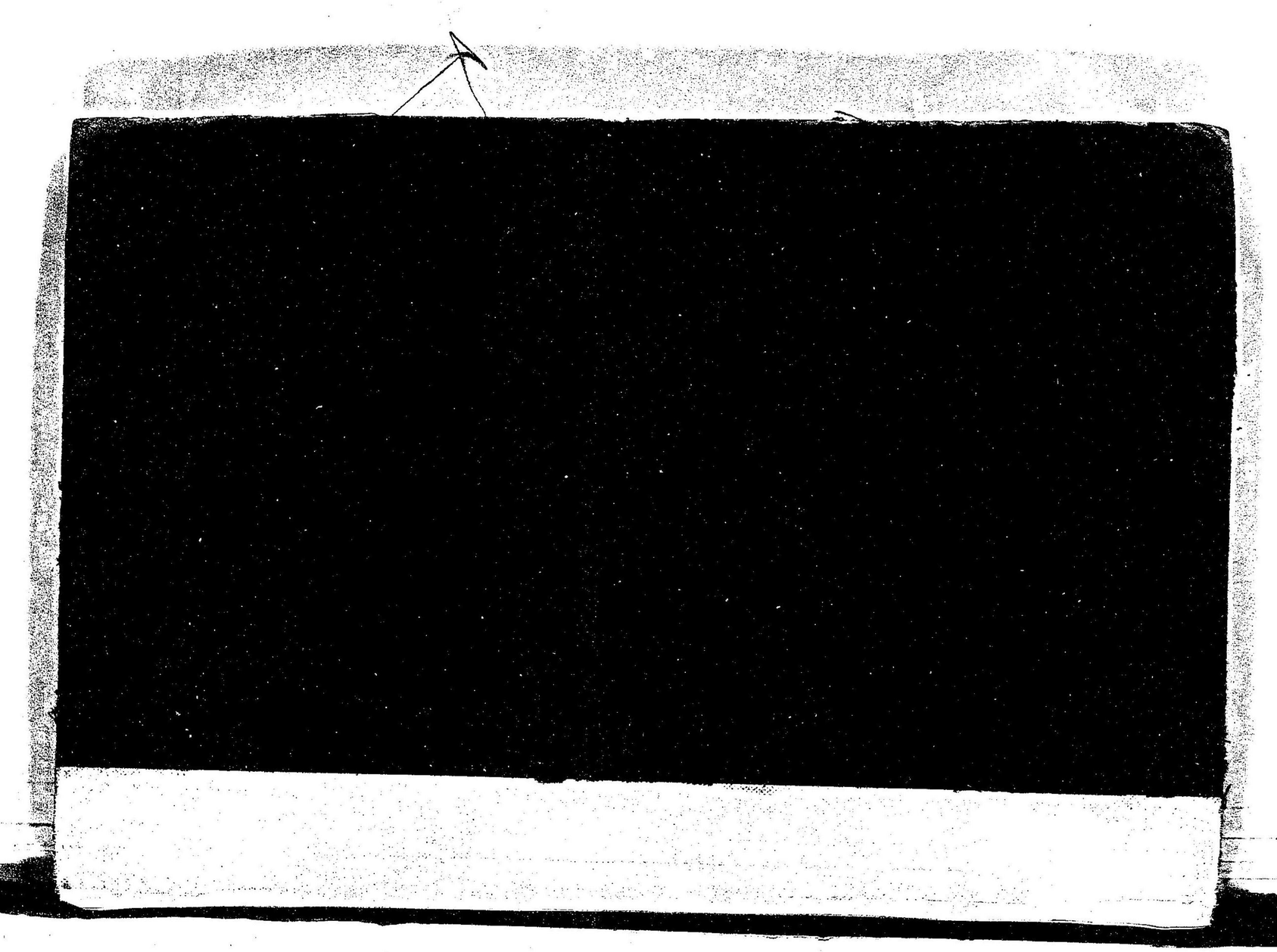
東亞堂編輯所編 最近男女學校案內（印刷中）

大場健兒先生著 どもり矯正の實驗（印刷中）

高濱虛子先生著 俳諧趣味（起稿中）

◉新刊豫告!!!

6.4
134



64
134

010168−000−7

64−134

修養論

加藤　咄堂／著

M42

AAE−1471